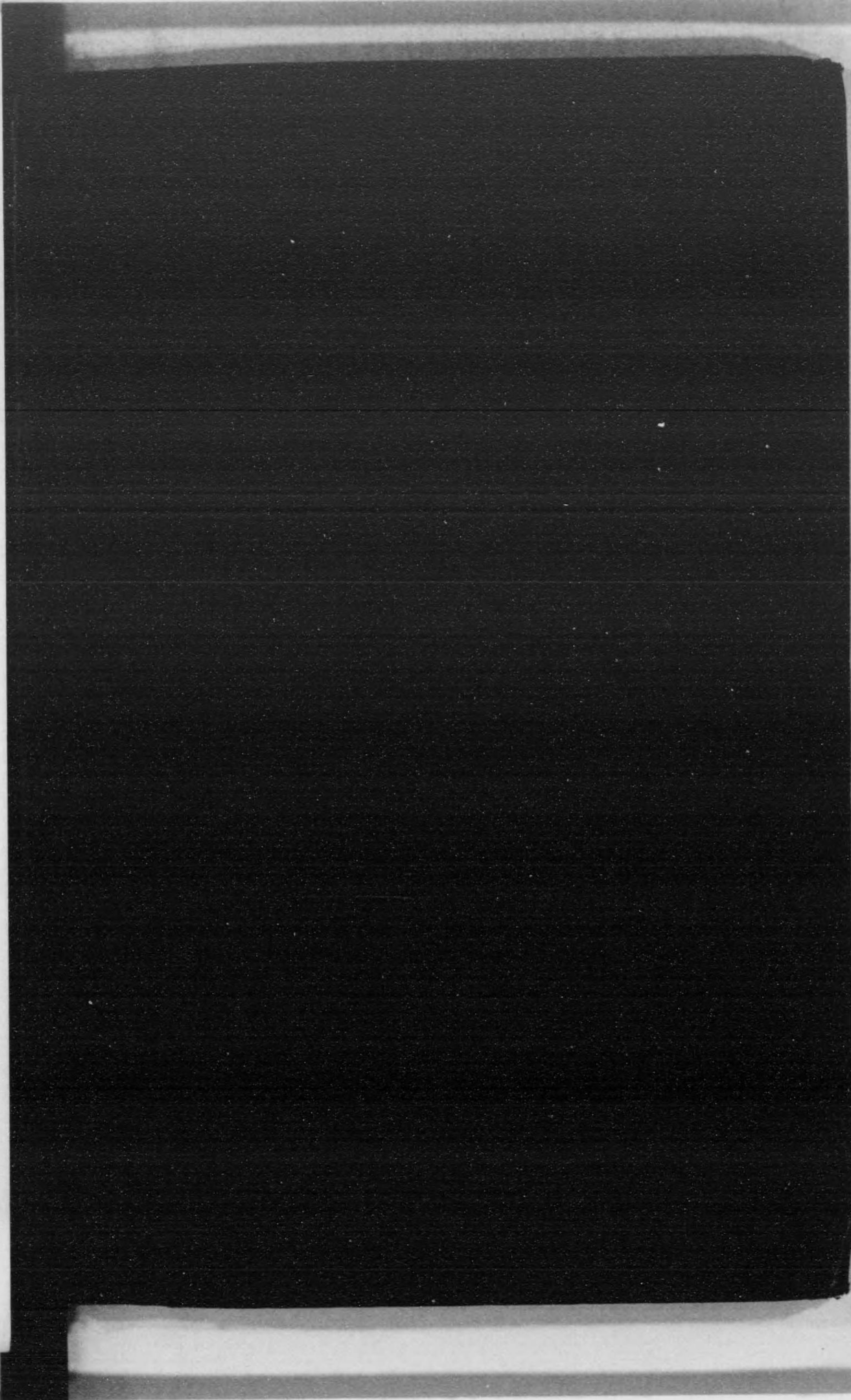


始



323
688



HOW
TO
TRANSLATE
ENGLISH INTO JAPANESE

英文和譯の研究

By Y. SATO

MEGURO

大TOKYO

15. 6. 29

内交

緒 言

音楽に就て吾々はよく「彼は音楽の耳がある」とか「耳が無い」[He has an (or, no) ear for music] とか云ふ。又「彼は音楽の taste (趣味)がある」など云ふ。これは其の人が生れつき音楽を聞きわける感性の有無及其の音楽に対する嗜好の有無を云ふのである。人に依つては音の變化、旋律を容易に又細く聞き分けるが又或人はそれが do でも re でも一向チンブンカンなのである。そして此の音楽の耳があり taste のある人は概してそれを演奏する事が上手なものである。こう云ふ人は音楽の aptitude (器量)があると云ふ。

語學が正にそれで外國語に對して自然の親和を感じる人と、どうも附きの悪い、それに接するのが所謂億劫(おつくう)な感じのある人とある。學生の中にも英文に接してすぐ片端から解つても解らなくてもスーッと讀んで行かうとする者と、何とやら怖い物、厭な物にでも出會つた様な氣がすると見えて面を外ける様にする者とある。前者は丁度音楽に耳を持つ人の様に英語の音に親みを感じて English sound が耳からも入り易く口へも出易い人である、即語學に aptitude を持つた人と云ひ得る。が後者は語學に對する affinity (親和力)を缺いて居るのでこう云ふ人が英文でも譯すとなると丸で漢文でも讀む様に指の先きで一語づ、突つ付いてボツボツ嚙つて行くと云つた様な調子になる、従つて文意も natural に頭の中に浮んで來ぬ。それならば語學は天性巧拙が種つて居るものかと云ふに決し

てそうとばかりは限つて居らぬ、どんな日本人でも英國なり米國なりで生れてそこで育てば英語が mother tongue であるかの如くに自由に語るでは無いか。成る程熟達に遅速、難易の差こあれ其の學習法さへ誤ら無ければ何人にも語學は六ヶ數いものでは無い。それに就て何よりも必要な事は丁度音樂に耳を養ふと同様語學には其の學ぶべき語に親みを持つ、即ち**語感を養ふ事**である。英語ならば英語相應の語調なり發表の仕方なりの特徴がある。英語を読むならば**英語的に讀むべし、音讀すべし、そして其の表はして居る意味を直覺すべし、**と云ふのが此の語感 (linguistic feeling) を得る根本要件である。學生諸君が英文和譯てふ仕事に苦心して居る所を見ると與へられたる英文に向つてすぐ片端から譯を附けにかゝる、出來上つた譯文を見ると實に珍奇な日本文(?)が其處にある。その意味はと今度は日本文の説明が必要になつて來る。さて筆者自らにも「解りません」と來る。其れもその筈で初めから解らないで譯した文が解らう筈は無い。

英文は讀めば解るが譯すと解らなくなる。事を確と記憶せられよ。それはその筈ではあるまいか、實物を見ると寫眞を見ると何れが其の物に對して理解し易いか。ましてその寫眞なるものが頗る怪しい。それで英文和譯てふ仕事の順序は先づ直讀直解を試る事。頭の内で意味を取りながら幾回も幾回も通讀する。それで大體の文意が掴めたら今度は部分的に其の譯出の仕方を腦裡に練る。かくして仕事の見極めが附いてから初めて筆を執る。と云ふ事である。筆を執つたら一瀉千里であらねばならぬ。それは丁度歌を詠ずると同じである。三十一文字は數秒で書ける、纏める間の頭の仕事が時を要するので譯文の過程 (process) は正に此處にある。それでまづ英文

を解する仕事に就て必要な要件を少し並べて見やうと思ふ。

英語の語感を帶して直讀直解を努める事は前にも申した。これには英語の勉強法が音讀的で活動的であるを要する。必しも机の前にキチンと端座して沈黙夜を徹するを要せぬ。庭を歩き廻るなり、書物片手に足投げ出すなりそんな事はどうでもよい、たい自分の讀むものが英語らしく、音讀して耳に響く言葉の意味がそのまゝ腦裡に浮む様に。讀む材料の性質に依つては手を振り首を動し、歌なれば歌らしく、議論ならば議論らしく讀みならずことである。學習の態度は學科の性質に依りて異なる。數學の如きは身搖ぎもせぬ精神の統一が第一の必要條件である、それを靜的學習法と呼べば英語の方は動的學習法とでも云ふべきか。さりとて英語の勉強とて矢鱈にハネ廻るべしと云ふのでは無い。音讀なり表情なり表面の動的なる内面には常に確かな理解力が働かなければならぬ、即英文を解するには須く

合理的なるべしと云ふ事を忘れてはならぬ。茲に至つて**文典の知識の必要**を説かねばならぬ。讀むものが文である以上必ずそれは首尾全きを要するものである。換言すれば subject と predicate とを備へたもので何が何したかを云ひ表はすものに違ひ無い。手に一文を取つて此れを解するには必ず先づ「何」に就て云ふて居るのか「何(ド)うした」と云ふのか。或は又其れが首尾全からぬ單に語句の連續に過ぎぬのか。その邊を確と見定める事が必要である。例ばこゝに下の様な一文に出遇ふたとする。

Out of the eight men who had fallen in action, only three still breathed; and of these two were as good as dead.

初めの部分は別に文句は無い「その戦闘で倒れた八人の中唯

三人丈けがまだ息が通ふて居た」意である。終りの and of these two were as good as dead に至つて、ヒョツとする と of these two と續けて読み度くなるかも知れぬ。その時 of these two と附けてしまふと were as good as dead が首の無いものになる。何が「死んだも同然」なのか解らぬ事になる。無論それは and of these, two were as good as dead (そして此れ等の内二人は死んだも同様であつた)と讀まるべき事が判明するのである。

猶も一つ例を取つて見ると

There has been gradually dawning upon those who think the conviction that this convention leaves much to be desired.

に於て「何か或るものが人の心に萌しかつた (there has been dawning upon~)」事を云ふて居るのだが、さて「何が」萌しかかつたのか即其の subject を捉えなければ文意が確定せぬ。それを何邊も文を通讀して見ると the conviction がそれである事に見極められねばならぬ。即 those who think でそこに間(マ)が置かるべきである。The conviction that this convention leaves much to be desired (此の協約に不備の點が多いと云ふ確信)が has been gradually dawning upon those who think (思慮ある人の心に目醒めかゝつた)と續く事が知られるのである。其れをどうかすると who think the conviction と續けて讀んでしまう者がありはせぬか、to have the conviction なら合點がいくが to think the conviction とは無理な事である。その無理に想ひ及ばずに何とかしてそれなりに意味をつけ様としたら大なる誤りである。英文和譯は意味を附けるのでは無い意味が附く様にするのであらねばならぬ。でないと「附け

る」のが「コヂ附ける」事になるのである。

文典の知識はそれが讀む上にも書く上にも應用されずば殆どその價值は無いと云つてもよい。學生は中々六ヶ敷い文典上の規則や例外を知つて居る、がさてその應用力は頗る貧弱である。従つて明かな文典上の誤りを平氣でやる、それは英文を書く上に於てよく云はれる事であるけれども英文を讀む上に於ても之れに劣らず失敗をする。例ばこゝにかう云ふ文があつたとする。

Affluence turns the edge of one's capacity which want sharpens.

此れは affluence と want との二つの名詞が turns; sharpens と二つの動詞を取つて「富裕は人の才能を鈍らすが窮乏は此れを鋭くする」意である、が、うっかりすると want を普通の動詞に取つて「.....し度い」「.....するを要す」と云ふ様に解す虞れがある。併し、もしそれが動詞であるならば want to sharpen と續くべきであるし又、want に對する主語は which (=capacity) であるべきが故に應ずる動詞として which wants to sharpen となければならぬ。すなはち want を動詞としては不合理な點がいくらか出て來る。すれば此處で what は noun であつて verb で無いと云ふ事に氣が附がねばならぬ。應用さるべき原理は頗る簡單である、三人稱單數 現在の動詞には s を附する事、本動詞は二つ並びはせぬ I want go. とは云へぬ I want to go. である、と云ふに過ぎぬ。たゞそれが此の際文意を決定する上に働かすと云ふ事が必要なのである。合理的の讀み方、文典の知識の必要と云ふのは此の邊の事を云ふたのである。次に英文解釋上必要な事は

常識の活用である。相當の常識あるべき筈の中學生が譯した

日本文を見ると甚だ以て非常識なものがよくある。一讀抱腹絶倒する様な文を書き上げる。危急存亡の秋、一生の一大事でふ試験などでは夢中になるも無理は無いが減茶な譯文でも書かぬよりは増しだと云ふ様な心から無意味な文を書くのは甚だ悪い。自分の常識に訴へて無理なものは寧ろ書かぬ方がよろしい。それで場合に依つては文脈も取れ文意も表はし得るがそれで猶その文の眞意が解されぬ様な事がある。これは自己の常識が働かぬためなので、即英語の練習に際して他の學科の知識や判断力が與つて力あらねばならぬと云ふ事になるのである。例ば

There are a great many people who believe because they always have believed.

と云ふ文があるとする、難解な語は一つもなく文脈も至極平易であるが。これは世に究理、研究の心無く因襲に捉はれて例ば化物(バケモノ)があると思つて居たから信する様な人の多い事を云ふのである。と云ふ事に氣が附かぬと此の文が解つた様で解らなくなる。従つて「世には自分等が信じ慣れて來たからとて信する様な人が多い」と思ひ切つて譯せなくなるのである。

又極く卑近の例で Every man cannot be rich. とあるを「何人も富むを得ず」と平氣で譯して居るなどは往々ある事である、此れ等は非常識の適例である。扨て英文を讀んで文脈も判然し意味も解つた、その次に來るものは

譯語の苦心である。所詮語脈も異り感じも違ふ英語と日本語である、そうピタリと合致した譯ばかりあるものでは無い、於之、與へられたる原文に對して如何なる譯文が最もそれに近き意味を、最も近似せる心持で表はし得べきかに苦心するの要が

起るのである。色々細目に涉つては個々の問題に就て説く事とするが譯者の第一の目的として心掛くべきは原文に無い事は云はぬ事と原文に有る事は捨てぬ事である。自分の譯文に都合が悪いからとて原文の語句の一部を捨て、しまつたり、餘分の事柄を加へたりする時は譯文にはならぬのである、即脱線した譯文になつてしまふのである、一語一句も苟ふせず此の原語は此處で表はす、彼の句はこう發表すると一々自覺して譯出せねばならぬ。

併し如何としても原文に忠實な譯の出來ぬ事がある、原文に従つて邦語を並べる時は日本語として奇怪なものが出る。と云ふ場合も往々ある、かる時は其の最も眞意に近い譯を考へ出すの一途あるのみである、下の例は意味は頗る簡單で譯文が難澁な一例である。

John was away a wonderfully short time; and the doctor rode back with him. They parted at the gate, and he came into the parlor, etc.

初めの部分である「Johnは恐ろしく短い間留守だつた」では實に可笑しな文になつてしまふ、どうしても「Johnは非常に早く歸つて來た(又は、行つて來た)」とでもせねば納りがつかぬのである。

猶此れ等に就ては本書に説く所の譯し方を研究さるゝ事を望む。

最後に而して最も強く力説致し度きは**單語の習得**である。如何に神籌鬼略に富むだ大將でも兵卒無くては戦は出來ぬ、讀書法の百萬遍を繰り返しても大事な vocabulary の知識が貧弱では如何ともする能はずである。それで然らば單語はどうしたら覺えられるかと云ふ問題になつて

来るが此れは中々大問題で別に改めて論じ出さねばならぬ、が先づ一と口に單語の知識と云ふけれ共如何なる知識をそう云ふのか、語數を多く知つて居る事を云ふのか、語の變化に通曉して居るのを云ふのか其れが先決問題である。

勿論色々の異つた語を知る事も必要である、けれ共其の語が如何様な意味で働くか他の語との關係はどうか、を知らぬ時は大した役には立たぬ、簡単な例だが dear と云ふ語がある此れは「親愛なる」と譯されて居る、併したゞそれ丈けで満足して居た學生が He is dear to me. と云ふ文に對して「彼は私を愛す」と誤解した例がある、此れが即危険なのである。He is dear to me = I love him と云ふ關係を徹底的に捉えて置か無いとうつかりして上の様な間違をするのである。昔或る人が腹立ちまぎれに相手の人に向つて "I have a very contemptible opinion of you." と云ふた、それは「僕は君のことをくだらぬ奴だと云ふ意見を持つて居る」と云はうとしたのである、所が相手の先生平然として答て曰く "Yes, your opinions are always contemptible." と。讀者諸君此の答の面白味を解せられしや。

Contemptible. は「卑しむべき」「くだらない」意味である。「侮蔑的な」「見下げる様な」意は contemptuous であらねばならぬ、I have a very contemptuous opinion of you. と云ふべきを誤つて contemptible opinion と云ふたのに對して Your opinions are always contemptible (御前の意見はいつでもくだらない) と應じたのである。此れなぞは語と云ふものが如何に微細な働きをするかを示す寓話に過ぎぬけれども單語の習得が如何に尋常一様のもので無いかを知るによい例だと信ずる。

人の記憶力には限りがある、ましてや諸學科に頭を悩ます學生が英語の記憶にさうは時と勞力とを割く事は出来ぬ。それに

盲目的に單語を暗記したからとてさう役に立つものでは無い。要は合理的な、順を追ふた、譬ば甘藷の蔓を手繰つて行く様に言葉の系統を傳ふてそれからそれへと語の意義用法を習得して行かねばならぬ。よく聞く事だが今日は單語を幾つ覺えた、單語のカードを幾枚繰つたと云ふが、もし一語が一つの意味丈けを有するものならばそれでもすむであらう、が實際は一つの言葉は數多の語義を持つて居る、即語意には非常な versatility (多方面)がある、一つの場合の意味を知つて居たからとてもしそれが他の意味で用ひられた場合には全くその語を知らぬも同然である、否寧ろ全然知らなかつた方が馬鹿な間違をせずすんだかも知れぬ、極言すれば一語のあらゆる場合の意義用法を知らなくては其の語を知つたとは云へないのである。されば單語の知識てふものは縦に長く語數を知ると同時に横に廣く其の各の多方面の意義用途を知るにあると云ふ事になる。扱て其れで語數を増すに就ては語の系統を辿ると云ふ事が甚だ有意義になつて来る、言葉には各々其の源がある、根原がある。一つの根原から多種多様に枝葉が出る。例ば press (壓す) を基にして express (壓し出す→發表する)、impress (壓し付ける→印象する)、compress (壓し合せる→壓縮する)、depress (壓し下げる→低くする)、suppress (壓し倒す→鎮壓する)、oppress (壓し附ける→壓迫する)と云つた様に一つの語原からして數語、數十語を造り出す、此れをその基を確と捉えて歸一的に習得して行く所謂 etymological study (語原的研究)なるものが單語習得上最も有效なる方法なのである。

言語がかく基礎となるべき語幹に發して増加して行く一方又各語はそれ自身同一又は近似せる形を以て動詞から名詞へ又は名詞から形容詞へと色々その function を變化して行く即

Differentiation by gradation (語の遷移)なるものをなして行く。かりに茲に *Drive* てふ語を取つて考へて見る。此れは *drive*, *drove*, *driven* と云ふ主要の形の變化を持つて居る。さて其れが「無理に推し進める」と云ふ基の意から「逐ふ」「驅る(馬車等を)」「擲き付ける」「吹き付ける」さては「或境遇に立ち到らしむ」(例ば *to drive mad* の如き)等の意に用ひられる。さてそれで此の動詞の現在形をそのまゝ名詞に用ひて *A long drive* (馬車の遠乗り)。'Ten minutes' *drive* (十分間馬車を驅る事)等云ふ、次で *drove* を名詞として *a drove of cattle* (一連となつて逐はれて行く家畜の群)など云ふ。又 *driven* から轉じて名詞 *drift* を作る、それは *a drift of snow* (風に *drive* されて吹き寄せられた積雪)、*snow drift* (吹雪)等に表はれる。更に又此の *drift* を動詞に用ひて「吹き積る」(例、*drifting snow*)「漂流する」「漂はす」等となる。猶進んでは *adrift* (風の *drive* するまにまに漂ひて)と云ふ副詞も出来る、と云ふ風にそれからそれへと *differentiate* (轉化)して行くのである。要する語には一種の **root form** があつてそれが関連せる數語に通有の **general idea** を表すので、*drive* に就て云へばその「推してやる」と云ふ **general idea** が *drv. drf.* と云ふ **consonant framework** (形骸)に包まれて上述の如き轉化をなすのである。斯の如く日常の用語の多くは相連關して **gradation groups** (轉化して出來た語の集團)を成し其の各語が全體に通ずる **general idea** (共通の根底意)の上にそれぞれの **specific application** (特種の用途)をなすのである。單語の習得は要するに上述の諸點を眼中に置いて從事されねばならぬのである。かく組織的に單語を研究し合理的自然に英文の解釋に從事さるれば語學の達成もさ程困難なものでも無いと思ふ。本書試る所のものは即如上の用意に基きて英文和譯の研究に資せむとするのである。

CONTENTS

Part I

	PAGE
二つの仕事	1
Noun の働き	7
Sense-subject.	13
名詞の種類	18
Abstract Noun の意味	23
Nominal Use of Words (語を「名」として取扱ふ 場合)	27
Possessive の研究	30
Apposition の研究	34
當(あて)のつかぬ代名詞及名詞	38
語句の呼應	41
Relative Pronoun に就て	49
Compound Relative Pronoun と Compound Rela- tive Adverb	52
What の用法	56
Superlative Forms of Adjectives	67
極限を表はす Expression	68
動詞の自動と他動	71

Transitives Mistaken for Intransitives	78
Complement	79
Present Perfect Tense	83
Infinitives	87
Participial Phrase の用途	95
“There is no—ing”	97
隠れたる Verbal Noun	98
May, Can, Must の意味	102
Pro-verb (代動詞)としての “do”	109
意志を表はす助動詞 “will”	112
“shall” に就きて	114
Relative Adverbs に就きて	116
結果を表はす副詞及副詞句	120
目的を表はす句が轉じて結果を表はす句となる場 合	125
“Not” の作用	135
Implied Negatives	142
“Not so much..... as”	158
If に就きて	163
“As”	166
“Such.....as”	176
“Because”	179
前置詞の働き	183
“In”	186
“With”	188

“Of”	191
注意すべき Connectives	194
Otherwise	201

Part II

文の筋 (Particular Description と General Des- cription)	205
硬い譯と軟い譯	210
小さな要(カナメ)	216
Elliptical Construction (省略文)に就て	219
文脈の斷續	223
Figure of Speech	228
Personification (擬人法)	236
反問の文	239
“To see is to believe”	246
挿句に就て	250
Pendent Expression	254
Absolute phrase or clause	256
Absolute Use of Nouns	261
命令文の用途	263
語の繰返しと位置の轉換	270



HOW TO TRANSLATE
ENGLISH INTO JAPANESE

Part I

二つの仕事

戦争をするのには、先づ敵軍の配備を明かにし、その主力が何處にあつて支隊がどう動いて居るかを知悉し、次に其れに對して如何にこちらの軍を進めるかの對策を講ぜねばならぬ、此の二つの仕事を無視したら初めから負けるに極つて居る。外國文を理解し和譯するのは正にこれである。少し複雑した思想を含んだ文であると必ずそれは一本の樹の様に幹から枝が張り枝から又小枝が出る、一見ゴチャ々々々して居る様ではあるが、それは皆中心の幹に集中して一と纏めになつて居るのである。で、まづ第一の仕事は此の文の筋を明にする事である。文の筋が明に腦裡に grasp されて語句の配備が理解されたら、次にそれを如何に料理すべきか、即和文に譯し出すべきかに就て考慮を巡らさねばならぬ、これが第二の仕事である。英文和譯の研究は要するにこの二點の研究に盡くると云つてもよい位である。

文の筋を明にする事とは要するに全文の subject (主語) と predicate (述語) を明瞭にし各語の連絡関係を了解する事である。どんな文でも必ず「何が何した」かを述べるものであつて普通ならば英文では

主語+述語+目的語

の順であるべきであるが、時としては目的語が文頭に置かれる事があるし、又述語の次に主語が来る事もある。日本文でも「私はそれを好まぬ」と云ふ事もあり又「それは私は好まぬ」と云ふ事もある。語の順が必ず極つて居るとは云へぬ、これは英語でも同様である。それに又主語と云つても決して簡単な一つの名詞とは限らぬ、長い長い語のつながりが纏まつて一つの主語や目的語になつて居る場合も頗る多い、例へば下の一文を通讀して見られよ。

Just how important this reciprocal relationship between education and social life is, we can appreciate only when we have considered somewhat more fully the nature of social progress.

用語の意味を抽出すると——important (重要な)、reciprocal relationship (相互の関係)、education (教育)、social life (社會の生活)、appreciate (理解する)、consider more fully (猶十分に考慮する)、nature (性質)、social progress (社會の進歩)。

それで一體此の文の主語は何だらう、Just how important.....はどこに續くのであらうか、讀者まづ試みに Just 以下 between education and social life is,

までを切り捨て、we can appreciate から先きを讀んで見られよ、すると

We can appreciate only when we have considered somewhat more fully the nature of social progress.

吾人は社會進歩の性質を猶一層充分に考慮したあかつきに理解する事が出来る。

と解されやう。すると主語は「吾人は」で述語は「理解し得る」である。We can appreciate が全文の中心語句である。しからば、何を理解するといふのであらうか、appreciate の object (目的) が無ければならぬ筈だ、で最初の一句

Just how important this reciprocal relationship between education and social life is

へ返つて考へて見る、と、これだけは

此の教育と社會生活との相互の關係の如何に重要なるか

となるので、それ全體が we can appreciate の目的となつて「.....の如何に重要なるかを理解し得る」事になる。譯文全體は

教育と社會生活との相互の關係の如何ほど大切なるかは、吾人が社會進歩の性質を何とか一層徹底的に考慮して後始めて理解するを得んのみ。

と云ふ事になる。これは長い一つの文が纏つて一箇の object (目的語) として文頭に置かれた一例である、が

場合に依ると文頭にあるべき subject が短いもので無く、頗る長い事がある。いつまで行つても中々それが結ばれぬ。漸く文の末尾へ来て初めて predicate がチョツピリ附いて居ると云つた様な事がある。そんな場合にも始めから讀んで行つて、subject に附隨する句がいくら長く續かうとも、長い繩を手繰つて行く様に頭の中に整然と納めて行つて纏めてしまはなければならぬ。一例を挙げると

4 To know yourself a better man than you were twelve months ago, to have a finer record of good work done, and to have acquired greater ability for doing things, is a reward that is known only to the earnest worker.

‘to know yourself a better man’ とは「自己が一層善い人間となつたと知る事」である。「自分で知る」で無くて「自分を善人なりと知る」である。‘to have a finer record of good work done’ とは「善事を爲した事の一層立派なレコードを得る事」で good work done (爲された善事) は「善事を爲した事」と解すべき所。‘to have acquired greater ability for~’ は「……に對しての一層手腕を得たといふ事」である。それでこゝまで讀んで来て次に “……is a reward etc.” とついで以上は “is” に對する主語が前に述べられたものと見るべく、それは要するに to know……, to

have……, to have acquired…… の三つの to do の形 (即ち infinitive form) が一と纏めになつて一箇の subject をなして居るものと解される即

己れが一年前の自己よりも善い人間なる事を知る事、善事を爲した一層立派な記録を作る事、仕事をする力の猶大なるものを得た事、以上は熱誠な努力家にのみ體驗せらるゝ報酬である。

penalty

と譯されるのである。

さて、原文の意味は理解し得ても、それを譯出するといふ事は全く別の仕事である。英語と日本語とは、よくも斯う反對に出來たものだと呆れるほど背反した場合がある、で吾等は文意を理解した次には、邦語なら之を何と云ふかを考へて、原文になるべくピッタリあてはまる様な日本語を求め出さねばならぬ、これが即外國語の學者は自國語の研究といふ事を重んずべき所以なのである。一例を挙げると

4. Every faculty which is a receiver of pleasure has an equal penalty put on its abuse. It has to answer for its moderation with its life

といふ一文を譯すとする、faculty は能力とか官能で、receiver of pleasure (快樂を感受するもの) とあるから、味覺、視力、聽力等それ々々快樂を受け入れる器(ウツワ)を指す。それが、その濫用 (abuse) に對して課せられたる同等の penalty (刑罰) がある。と云ふのだから

ら「快樂の器は同時に又それを濫用すれば病氣といふ刑罰を受ける事になる」の意と解されよう。equalとはその器能を使へば愉快であるが過度に用ひると同等の罰があるを指す。さて第二文に至つて、to answer for its moderation とは、「その適度なるべき責任を負ふ」意である、answer (答へる) は for ~ と續いて「或事の責に任ずる、引き受ける」意となる、moderation とは「度を超えぬ、やり過ぎぬ事」なり。それで with its life とは何か、「生命を以て責任を負ふ」とはもし節度を守らねば生命が無くなるといふ條件で責任を負ふ意である。併し日本語では此の場合何と云ふであらうか「命にかけて」とすれば通じよう。が、寧ろ正反對に「死を以て之が責を負ふ」とすればピッタリ合ふわけであらう。此の邊は譯文の苦勞の面白い點である、譯文は次の様になる。

すべて快樂を感受する機能はその濫用に對して同等の刑罰を負はされて居る。それは死を以て節度を守るべき責を負はねばならぬのだ。

以上は英文和譯の着眼點を示さんがために擧げたホンの數例である。

生きて居る國語には千變萬化ある、それが研究は困難そのものであると同時に限り無き興味も湧く、以下項を分けて順次に研究の歩を進めて行き度いと思ふのである。

Noun の働き

「あれは酒がさせた仕事だ」など云ふ言葉遣は日本語では或特種のものを除いてはあまり無いことだが英語では此れが甚だ多い。即意志に發する動作は意志を有する動物(殊に人間)の爲すべき事であるのにこれを無生物を主語として平氣で用ひる、例へば

{ 天氣が悪くて來られませんでした。

{ *Bad weather kept me from coming.*

{ 彼の人は船に弱い、海を見たばかりで酔ふ。

{ *He is a poor sailor; the sight of the sea makes him sick.*

{ 此の切符があれば入れます。

{ *This ticket will gain you admittance.*

此の語法を定義すれば「事の原因、理由、手段等を主語として叙述する形式」と云ふ事になる、此れが複雑な文の中へ出て來ると一寸間誤つく事がある、殊に其の主語となつた名詞が動詞と同じ形のものであつたりすると大變な間違ひをひき起す場合がある、次の問題の様なのが其れである。

例文 A.

D. You see men of the most delicate frames engaged in active and professional pursuits

who really have no time for idleness. Let them become idle,—let them take care of themselves, let them think of their health,—and they die! The rust rots the steel which use preserves.

【註】 delicate frame—蒲柳の體質。 professional pursuit—専門的職業。 rust—錆(サビ)。 preserve—保存する、保全する。

【譯】 最もか弱い體質の人で烈しい専門的業務に従事して懶ける暇の無い人のあるのを吾人はよく見る。彼等にして一度閑な身にならしめたらば——自身の身を大切にしたり健康を顧慮せしめたらば——すぐ死んでしまふ。使へば鈍(ナマ)らぬ剛鐵も錆させれば腐つて仕舞ふものだ。

此の文の大切な所は use が noun であり preserves の subject である事を看て取る點にある、此れを verb だと思ひ込んだら最後失敗だ。『“preserves を用ふる鐵”とは何だらう preserve は“保存する”だから“錆止め薬”だ』なんかんと飛んだ空想を走らせてしまふ。“Use preserves steel. 「使用が鐵を保つ」即「鐵は使つて居れば錆びぬ」』此れが前に云つた無生物、無形物を主語とする語法なのである、此の場合もし use を動詞と考へてもそれでは the steel which use preserves. は文法に合はぬ、steel は單數だから which uses となる筈だ、不合理だ。と云ふ點に思ひ及ばなければならぬ。此の邊が細心な注意、理づめの解釋法とでも云ふ所であらう。

例文 B.

¶ For age and want save while you may.

【註】 age と云へば「年齢」とのみ思ひ込むのが誤のもとになる、age は old の名詞である、だから oldness と云ふ語は普通使はれぬ、「年齢」と「老齡」と二つを “age” に知つて置かれればならぬ。

want は動詞で「欲く」が基、缺乏すればこそ「欲しく」なるので I want to go. (私は行き度い) の如きは want のほんの一面の用途である、You shall never want while I live. (私の生きて居る間は御前に不自由はさせぬ) の如きは決して忘れてはならぬ用例である、それで want を名詞にすると「窮乏」「缺乏」の意となるのである。

while one may と云ふ句では may は can の意と知るべし。

【譯】 老年と窮乏に備ふるために出来る間に蓄へて置け。

例文 C.

¶ Deeds do but comparatively small mischief in the ordinary run of civilized life. It is words that wound, that poison and that kill.

【註】 此の文では deeds とか words とか云ふ名詞が主語となつて居る事は明瞭だがさて其れでどう云ふ文意をなすか一寸考へものである。まづ

Deeds do small mischief. とあるが、deeds とは「行爲」で「實際手を出してやる事」である、序ながら indeed の語の如き in+deed で in fact と共通の性質があり、事實上の意から「實に、實際に」と云ふ副詞をなすのである、さてそれで “to do mischief” はと云ふに mischief は皆人が「悪戯」てふ譯で知つて居るが此の「いたづら」が子供の無邪氣な「いたづら」で無くて他に迷惑を及ぼす的のものを云ふ。元來此れは「禍害」の意ある語である、それで “to do mischief” は “to do harm” と思へばよい。よつて “Deeds do but comparatively small mischief” とは「行爲はほんの比較的小さな禍を爲す」であるが此れを It is words that wound etc. と對照して見ると筆者の云はんとする心が判然して来る、即 deeds と words. 實行と言葉、手を出して實際にやるのと口で云ふのとの比較である、斬つたりはつたり引つ叩いたりするのは deeds で、皮肉や讒言を用ひるのは words である。世が進んで來ると人は刃物で殺し合はずに言葉と云ふ武器でやつつける。されば in the ordinary run of civilized life. とことわつてあるのだ。run は此れも名詞の用法の一例だが「走る」の名詞「走り」が course の意

になる即機械的推移を表はさうと云ふのだ、“common run of life”と云へば「普通生活の流れ」「平凡な日常生活」である、ordinary run of civilized life は「文明生活の日常」である。

It is words that wound. と It.....that..... (何々こそ何々なれ) の emphatic use が此の際は最もよく活用されてあるので、禍害を爲すものは deeds でなくて却て words である事を切言する筆法である。

【譯】 行爲は文明生活の日常に於ては唯比較的の僅少の禍害を爲す。人を傷け、毒し、殺すものは却て言葉である。

例文 D.

U.A man can gain but little knowledge of himself, or of the world, amidst a circle of those whom hope or gratitude has gathered around him.

【註】 此の問題は hope or gratitude の働き工合を捉へれば解決がつく、先づ those whom hope has gathered round him とは如何なる人々を指すか。hope が基で集まつて来る人々、即彼に近附けば權勢を得る望みがあるとか金が得られるとか何か當てにする所があるから寄つて来る人間を「希望が彼の周圍に集める」と云ふたのである。又 gratitude は「感恩の念」である、此れはよく「恩義」と覺える人があるがそうで無い。「恩義を謝する心」である。その心が彼の周圍に集めた人々と云へば所謂「有難や連」である、恩を受けてそれが有難くて傍を去らぬ人々を指すのだ、そう云ふ連中 (circle) の中に納まつて居る人は眞の自己を知る事も世間を知る事も少いと云ふのが此の文の大意である。

【譯】 人は目算とか感謝とか云ふ事が基で集まつて来る連中の中に居ては自己も又世の中も知り得る事が少い。

例文 E.

M The value of a dollar is not measured entirely

by what it would buy, but also by what it might deprive you of, if you don't have it at the right time.

【註】 is not measured entirely by.....but by.....は “not only..... but.” に似た云ひ方で「全然.....に依て量らるゝに非ずして.....に依ても亦量らる」と云ふのである。本文に於ては by what the dollar will buy. (その金か買ひ得るもの) の如く dollar を agent に働かした云ひ方が注目すべき點である。それで by what it might deprive you of..... の一句に味がある。to deprive one of ~. は to rob と同様被害者を直接目的に置いて「人の.....を奪ふ」意に用ふる云ひ方、例は The king deprived him of his rank. (王は彼の位階を奪つた)、The disease deprived him of reason. (病氣が彼の理性を奪つた) など云ふ。それで「金か人から奪ふ」と云ふたでは一寸辻褄が合はぬが、その次に if you don't have it at the right time. (イザと云ふ時に持つて居らぬと) の句があるから 自分の手に無い金である。即 The want of it (その金の無い事) が奪ふ意となる事が了解されるであらう。下例を考へられよ。

Money squandered will deprive one of his necessities.

(浪費されたる金銭は人から必要を奪ふ——と云ふ事は) 金を浪費すれば衣食にも事欠く様になる。

【譯】 金銭の價值は其れで買へる物で測る丈けで無く諸君が其れをイザと云ふ時持つて居なかつたら其れが爲めに買ふ事の出来ぬものを以ても亦測られるのである。

例文 F.

U.D The little time one can afford for reading ought to settle the question once for all, as to what shall be read.

【註】 まづ順を逐うて語句の意義係り具合を考へてから譯し方を断定せねばならぬ。

to afford time for ~ で afford は give に類する語、それに「何と
か都合をつける」心持を添へたものであるから、此の句は「時間を割
く」が適譯である、それで one can afford for reading の一句は time
の説明句で「人が讀書に割き得る僅少の時間か」と云ふ事になる。此
れが文の subject をなして predicate は ought to settle the question
である、即「僅少の時が此の問題を決定せねばならぬ」と云つた様な文
脈である、さてその問題は what shall be read (如何なるものを讀むべ
きか) に就て (as to) の問題なのだ、それで文の眞意は「讀書に割く時
間の少ないと云ふ事が此の問題を決定するを必要とする」即「人もし僅
少の時間し讀書に割き得ずば速に此の問題を解決せざる可らず」と云
ふ事になるのだ、要之 The little time 以下の句が「時の僅少な事」或
は「多く時を割き得ざる事」に相當するのである。

once for all は「全部に對して一回」の意から「斷然と」「きつぱり
と」の意となる。

I will explain once for all.

今説明はするが再度とはせぬ。

I tell you once for all that this shall never be done.

此れは決して私は許さぬ事をきつぱり君に云ふて置く。

【譯】人もし讀書に割き得る時間が僅少ならば如何なるも
のを讀むべきかてふ問題を断然と確定するの必要がある。

問題

1. Habit is stronger than intention, and somewhere the
common run of speech will break through and betray you.
To converse well at some times requires that you should
converse well at all times.

2. Unfortunately, the wants of his family had kept him
from school, and he seemed to feel the loss.

3. As might be expected, the English were no sooner
assured that the invincible Armada was a thing of the past,
than they thirsted to revenge themselves upon the Spaniards

for the anxiety and terror that the threatened invasion had
inflicted upon them.

4. It occurred to us, after a while, that if we wanted to
get home before daylight betrayed us, we had better be
moving. 西船

5. A convulsive effort at the oars told how willing the
men were to obey, but their strength was gone.

6. Every human being must have clothing. Savages go
naked, but the first remove from absolute barbarism involves
a partial, if not entire covering for the body.

Sense-subject

I do not object to going.

と云へば「私は行く事に異議は無い」である、無論自
分が行くのに異議が無いのだ。もし

I do not object to your going.

と云つたらどうか? 文意は全然變つて

「私は君が行くのに異議は無い」

事となる、即 your は「誰れが行く」かを表すために
going につけたもので意味の上から見て going (行くこ
と) の subject になつて居るわけである、これをその
sense-subject (意味上の主語) といふ、又

I wish to come. と

I wish you to come.

とを比較して見ると第二文の you は意味から見て to

come の subject なので「汝が来る事を望む」意となるのである。

かく -ing といふ形や、to do の形 (文法的に云へば gerund や infinitive) の意味の上から見た subject が特別のもの (即本文の subject と同一ならざるもの) であつたらばそれを明記せねばならぬ。そして -ing の形の前には your, his の如き possessive form が置かれる。但しそれが noun の場合が危険である。といふのは名詞なら -'s の形になる筈である、例へば

I do not object to *the man's* going.

の如く。ところが實際上名詞を用ひる時はこの 's は省略されて

I do not object to *the man* going.

としてしまふ。それで「誰が……すること」に相當するのである。日本語でも「その男の……する事」といふ代りに「その男が……する事」と云ふと同様である。此の

前置詞 + 名詞 + -ing

の形が長文の中に表れて来ると、うつかりすると誤りやすい、以下の例文に依つて研究せられよ。

例文 A.

The idea of his mother waiting for the letter
he had promised her, and perhaps thinking him
forgetful of her, was as bitter a grief as any

which he had to undergo for many a long year.

【註】全文の筋は The idea of his mother…… が主語 (subject) で was as bitter a grief がそれに對する述語 (predicate) である事は容易にアテがつくであらう、するとその主語の

the idea of his mother とは如何なる意か。「彼の母の考へ」——さう思ふ人が多いだらう。なる程、idea は「考へ」だから、それも無理は無い。が、その次の waiting for the letter he had promised her (彼が彼女に約束した手紙を待つて居る) の一句をどうつづけるか、——これは The idea of his mother's waiting for the letter etc. とあるべきか略された形で、

「彼の母が彼が約束した手紙を待ち暮して居るといふ考へ」である。「彼の母の考へ」では無くて「彼が母が待つて居ると思ふ事」である、例は

Every one laughed at the idea of his going abroad.

(彼が洋行するかと思ふと誰も彼も笑つた)

に於けると同様である。

だから次の and perhaps thinking etc. も亦、*The idea of his mother thinking him forgetful of her*, とつゞくので「彼の母が、彼が彼女を忘れて居ると思つて居るだらうといふ考へ」である。

was as bitter a grief as any which=was the bitterest grief that. 「……した何ものと比較しても劣らず苦しい悲みであつた」とは「最も苦しい」意に通ずるわけである。

had to undergo for many a long year 「長い年月受けなければならなかつた」、long year は「長く感じる年」である、many a はそれが「幾つも幾つもの意。undergo (<to go under) が苦勞や悲みを受ける意となるは自然のこと、知られる筈だ。

【譯】彼の母が彼が彼女に約束した手紙を待つて居り、多分彼が母の事など忘れて居るのだと思つて居るだらうと考へると、それが長の幾年月彼が受けねばならなかつた何物にも勝る悲みであつた。

例文 B.

Asia was the original seat of human societies, and long before any trace can be found of the inhabitants of the rest of the world having emerged from the rudest barbarism, we can perceive that mighty and brilliant empires flourished in the Asiatic continent.

【註】まづ語句の説明にかゝらう。

original seat 「根據地」。seat. は座席で「何々のある場所」を云ふ、seat of war の「戦地」であり、seat of learning の「學府のある所」である如く。で original seat の「そもそも最初にあつた所」の意になる。

human societies 「人類社會」

any trace 「何等の痕跡」

inhabitants of the rest of the world 「アジア以外の所の住民」

emerge from 「……を脱する」

rudest barbarism 「最も粗野な野蠻狀態」

perceive 「みとめる」

mighty and brilliant empire 「偉大にして光輝ある帝國」

flourish 「榮える」、これは flower と同語源で、花の如く榮える意である。

Asiatic continent 「アジア大陸」。A'sia の Asiatic とアクセントが移る。

さて、全文を通讀して見られよ。long before any trace can be found of の of がどれにかゝるか、any trace of the inhabitants (住民の形跡) と解したら、先きへ行つて having emerged from…… の一句がどうともならぬ事に氣附かれるであらう。で實は、long before any trace can be found of having emerged etc. 【野蠻狀態を脱した形跡の見出さるゝ以前とくの昔に】なので、その野蠻狀態を脱したのは誰が脱したのか、といふとその脱した subject が the inhabitants of the rest of the world [世界の他の部分の住民] と云ふ長いものなのである。此の長

い句が having emerged…… といふ名詞句の sense-subject をなすのである。丁度或る子供が Newton が林檎が落ちて來たのを見て考へ始めたと云ふ話を聞いて母親に向ひ

What wonderful is there in an apple falling?

林檎が落ちるのに何の不思議があるか。

と云つた文と同一構文なので、たゞ an apple といふ短い sense-subject の代りに此處では the inhabitants of the rest of the world といふ長い文句が置かれたのである。

猶こゝに、can be found, can perceive と現在形を用ひたのは、今日歴史上吾人が知り得る事を意味するからである。

【譯】亞細亞は人類社會の根源地であつて、世界の他の部分の住民が最も粗野な野蠻狀態を脱した形跡の見出されるずつと以前に偉大なる光輝ある帝國が亞細亞大陸に榮えて居た事を認め得るのである。

例文 C.

Nations are not to be judged by their size any more than individuals. For a nation to be great, it need not necessarily be big, though bigness is often confounded with greatness. A nation may be very big in point of territory and population, yet be devoid of true greatness.

【註】not any more……than 本書“Implied Negatives”に説く通り、これは「……以上に……ならず」の意で、than の次に來るものが否定の比較標準になる。Individual は「箇人」である、人間は身體が大きくても決して偉いとは限ら無い、と同様に Nation (國) もその大ききで評價 (judge) すべきでは無い、と云ふのである。

for a nation to be great 「一國が偉大ならんためには」。for a nation は to be great の sense-subject.

necessarily 「必しも」、此の語はよく not と並んで「必しも……なるを要せず」となる。

confound with 「混同する」

in point of territory 「領土の點では」

be devoid of ~ 「……を缺く」

【譯】 國がその大きさを以て評價し得ぬ事正に個人に於けると同じ事である。國が偉大ならんには必しもそれが大なるを要せぬ。大きいと偉いとは往々混同される所であるが、一國は領土や人口上非常に大きくて而も眞の偉大さを缺く事がある。

問題

7. There is an old proverb about the inexpediency of those who live in glass houses throwing stones which I always think that we (who are in society) would do well not to forget.

8. We should not only do to others as we should wish them to do to us, but think of others kindly as we should wish them to think of us. If we make no allowances for them, how can we expect them to do so for us?

名詞の種類

同じ名詞が種類を異にして用ひらるゝ場合がある、其れに従ふて意味が變つて來る、例ば room は最も簡単な語で「室、部屋」であるが There is no room for more. など云へば「此れ以上入れる餘地が無い」。の意味で此の際 room=space でそれは common noun で無い。many rooms (多數の室) と much room (廣い餘地) と

立派な思想
高等時教と云ふべき

は明に區別をせねばならぬ。fortune は「運命」てふ abstract noun であるが to make a fortune など云へば「財産」「一と廉の資産」で common noun である。age は「年齢、老齡」だが時に old people の意で用ひられる。creation は「創造」だが「神の創造せるもの」の意で「天地萬物」の意になる。一個の單語について一個の譯を知つて安んじて居ると非常な失敗をする事がある、常に語意の versatility (變轉) を注意するのが肝要である。

例文 A.

Good thoughts and carefully gathered experience take up no room, and may be carried about as our companions everywhere, without cost or incumbrance.

【註】 good thoughts は「善い考へ」と譯せば用は足りる様なもの、其れは自分の善い考へては無く聖賢の思想とか學者の考へとか云ふものを指す事と解すべきである。to take up no room が「場所塞げになる」意で to take up=to occupy である。room=space なる事は冠詞の無いのでも察し得べきだ。without cost and incumbrance cost は「費用」で incumbrance は「邪魔」であるから「費用も要らず邪魔にもならず」と譯すべきである。

【譯】 立派な思想や注意して集め得た經驗は場所塞ぎにもならず、何處へでも吾等の友として、金もかゝらず邪魔にもならず持ち歩く事が出来る。

例文 B.

Age looks with anger on the temerity of

youth, and youth with contempt on the scrupulosity of age.

【註】 age は old people で youth は young people と解すべし。此れなぞも look with anger とか with contempt とか云ふ語から推し量つて age や youth が人間を指して居る筈と考へがつく可きだと思ふ。temerity は無鐵砲な勇氣を云ふ、此れに反して石の橋を叩いて渡る様な入念さを scrupulosity と云ふ。

【譯】 老人達は若い者の無鐵砲を怒りの眼で見る。若い者等は老人の入念さを嘲笑する。

例文 C.

▷ It has cost many a man life or fortune for not knowing what he thought he was sure of.

【註】 fortune は資産と見るがよし。to cost は失はしむる意でよく用ひられる、つまり「或事に對する代價を拂はせる」意が基である、例、His folly cost him dear afterwards. [彼の馬鹿(放蕩)が後に至つて彼に高い價を拂はした]。

to be sure of は「自信する」である「確に……と思ふ」の意。
to be sure to do と差別せよ。

{ He is sure of succeeding.

{ 彼は成功を自信す。

{ He is sure to succeed=He must succeed.

{ 彼は成功するに違ひ無い。

【譯】 確に知つて居ると思つて居た事を、實際は知つて居らなかつた爲めに、命や財産を失ふた人が澤山ある。

例文 D.

Old age is a tyrant which forbids the pleasure of youth on pain of death.

【註】 此れは old age を擬人化 (personify) した云ひ方で手つとり早く云ふと「齡を取つてから若い者の真似をすると死ぬ、年寄の冷水は危険だ」と云ふ事である。on pain of death の一句を注意せられよ。此れは「違背するに於ては死に處するぞと云ふて(禁する)」の意である、即ち to forbid (禁する) の條件である。全文が老齡てふものの悲しさを云ふたものと解せばよい。

【譯】 老齡は壯年の快樂を繰返すに於ては死を以て罰する暴君である。

例文 E.

▷ To be always afraid of losing life is, indeed, scarcely to enjoy a life that can deserve the care of preservation.

【註】 此の文で life が二つ用ひてある、前の方の life は「生命」であつて後のは「生」又は「生活」である、前者は無冠詞で後者は a life とあるに注意。猶又此の文は To see her is to love her. (彼を見るは即彼を愛するなり→彼を見る時に必ず愛する事になる) と同一筆法なる事を見るべし。

the care of preservation は「保存の苦勞」即「失ふまいと心配する事」である。

【譯】 常に生命を失ふ事を恐れて居るのは、實際失はぬ様に苦勞する丈けの價值のある生を享樂する事には殆どならぬ。

例文 F.

▷ The creation is a perpetual feast to a good man, everything he sees cheers and delights him.

【註】 Creation は create (創造する、無より有を作る) する事である、即「創造」である、それが轉じて神が造つたもの即宇宙萬物を指す事になる、此の文では正にその用途である、feast は饗應、御馳走であつ

て「楽しきもの」「快きもの」の代用詞である、動詞に用ひても I feasted my eye on the jewels (私は寶石を見て目に正月をさせた) など云ふを参考せられよ。

【譯】善人には宇宙の森羅萬象は不斷の響應である。彼の見ものとして彼を樂ませ喜ばせざるもの無し。

例文 G.

It must be an industrious youth that provides against age; and he that fools away the one must either beg or starve in the other.

【註】youth と age は young と old の名詞で「若い時」「老齡」を意味する。轉じて「若い人」「老人」の意になる。本文では youth を最初 a young man の意に用ひ、あとになつて the one で之を受けてその第一の意即「若い時代」の意に用ひてある。

provide against 'age 「老年に備へる」

fool away 「馬鹿なまれをして徒費する」

the other は age を指す。

文頭の it は that 以下を受けるので He that provides.....とあると同じである。

【譯】老年に備へて貯へる者は實に勤勉な青年である。此の青年時代を遊んで過してしまふ者は老齡に及んで乞食するか飢死ぬかせねばならぬ。

問題

9. I was now safe on shore, and began to look up and thank God that my life was saved in a case wherein there was, some minutes before, scarce any room to hope.

10. Fortune has often been blamed for her blindness, but fortune is not so blind as men are. Those who look into practical life will find that fortune is usually on the side of

the industrious, as the winds and waves are on the side of the best navigators.

11. That which we acquire with the most difficulty we retain the longest, as those who have earned a fortune are usually more careful of it than those who have inherited one.

12. No fortune can stand carelessness long, and we are on the high road to ruin the moment we think ourselves rich enough to be careless.

Abstract Noun の意味

He did it without the knowledge of his father.

上文を「彼が父ほど知識無くてそれをやつた」と譯した逸話がある。knowledge は成る程「知識」には違ひ無い、けれどもそれが元來 to know の名詞形である事は誰しも知らぬものは無い、しからば knowledge は「知ること」である。He did it without the knowledge of his father. は「彼は父が知らぬうちにそれをやつた」意に外ならぬ、こんな容易な文は無いわけだが、knowledge と云へば「知識」といふ漢語に譯す癖がついて居るものだから、上の様な妙な誤をする事になるのである。

Abstract Noun には動詞の意味を纏めて名詞にしたもの、所謂 Verbal Noun が含まれる、その Verbal Noun には上の knowledge の如く「……すること」の

意と、猶一層固まつた(例ば「知識」の如き)意味とを持つて居ることを考へねばならぬ、即それに従つて意味にも轉化を生じて來るのである。

例文 A.

It is vain to expect any advantage from our profession of the truth, if we be not sincerely just and honest in our actions.

【註】 *profession* の意味はと問へば大概の學生は「職業」と答へる。成る程 *profession* には「職業」といふ意がある、しかしそれがすべての場合では無い、元來これの元の動詞形は何であらう、無論 to *profess* (公言する)である、そんなら *profession* に「公言、宣言」の意のある事は考へるまでも無いことである、しかも前説の *knowledge* と同様にこの元來の意味が忘れ勝ちになつて本問題の如き our *profession* of the truth (自己の誠實を公言すること)を飛んでもない誤譯をしてしまふ事になる。

to expect any advantage 「何等利益あるものと思ふ」。

vain 「無駄、だめなこと」。

sincerely 「衷心から」。

just 「正當な」。

【譯】 吾々が行爲に於て衷心から正しく正直であるのでなければ、自己の誠實を公言する事から何等か利益あるものと思ふは無駄な事である。

さて、それに就て次の事を考へて置く要がある。

動詞から發した abstract noun は其の動作行爲を表すものである事云ふまでも無い、例ば

occupation

なる一語を取つて見る。それは動詞 *occupy* の名詞で

ある、で to *occupy* とは「占領する」「ふさぐ」意である、従て *occupation* は「占領」の意である。——と云ふと、學生は *occupation* を「職業」の意と知つて居る者が多いので其處に稍奇異の感を起すかも知れ無い、先づ次の例を考へられ度い。

a. I *occupy* this room.

私は此の部屋を占有して居る。

b. I *am occupied* with study.

〔「私は勉強に自分の身を占領されて居る」意から〕。

私は勉強に一生懸命になつて居る。

上の第二例に見る如く to be *occupied* が「従事する」意になるものから、こゝに *occupation* が職業とか仕事とか云ふ第二の意を得たのである、即此の第二の意義は第一の動詞元來の意味から轉じてその行爲の結果を示すものであると云はれ得る。abstract noun に此意味の轉化ある事を知る事は語學上最も必要である。

例文 B.

It is idleness that creates impossibilities; and where men care not to do a thing, they shelter themselves under a persuasion that it cannot be done.

【註】 abstract noun がその元來の意味から轉じた場合は多く不定冠詞 "a" を附けたり複數形になつたりして事實上 common noun にな

るのである、*impossibilities* の丁度「不可能事」にあたる事などその一例である、猶こゝに *persuasion* の一語がある、このもとの動詞 *persuade* は「説きつける、説伏する」意である、これは説諭して相手の人間がそれに服した場合でなければ使はない、説いても向ふが承諾しなければ *I persuaded him* とは云はれぬ。要するに *I persuaded him*. といつた裏には *He complied or yielded.* の意が含まれるのである。さて此の「説伏する」意の *persuade* を次の様に用ひる事がある。

I am fully persuaded that character is above all things.

これを直譯すれば「私は人格がすべての上に立つものと説き伏せられて居る」、であるけれど、それは、誰に説き伏せられたと云ふわけでは無く、自分の考へや経験からツクツクさうだと悟らせられる意なので、文意は

私は人格は何ものにも優ると確信して居る。

意となるのである、従て名詞 *persuasion* は I. 説得、II. 確信、信念、の二意を持つ事になる、本文の

they shelter themselves under a persuasion that..... が正にそれで「彼等は出来ぬと云ふ信念の下に隠れてしまふ」と云ふ事になる。*shelter oneself* は「身をかげふ」意で *under~* を従へ「.....の下に逃げ込む」意から或口實を楯にして逃れる意となるのである。

【譯】 不可能事を作るものは怠惰である、そして人が或事をやりたくない時は、其れはやつても出来ぬと云ふ信念の下に逃げ隠れるのだ。

問 題

13. I often come across men who do not act up to their professions. That reminds us of the proverb, "Saying and doing are two things." He who claims to be a man of his words is not of necessity to be depended upon.

14. Every man should be ashamed of poverty which he can prevent, not only because it is a reflection upon his ability, and will make others think less of him, but also because it will make him think less of himself.

Nominal Use of words (語を「名」として取扱ふ場合)

ネルソンがナイル河口に敵を撃破せんとした前日に部下の Captain Berry が "If we succeed, what will the world say?" と云ふたらネルソンは "There is no if in the case." (此の際「ならば」なんと云ふ言葉は無い) と云ふた、と云ふ話がある。かく *if* だの *because* だのいふ conjunction でも *yes* とか *no* とか云ふ *adverb* でもそれ等元來の意味を持つた名詞として(多くの場合そう云ふ「語」として)文中に用ひらるゝ場合がある、そんな時は *if* ならばその元來の function (役目)を勤めて「.....ならば.....」と云ふ様な、*if* のツナギの働をして居るのでは無いのであるから、それに氣づかずに普通に考へてその文を解かうとすると非常な誤譯をする事がある、親切な記者は斯る際には quotation marks (" ") を以てその語を區別して置くがそれは必しも必要なものでは無いからそう云ふ區別の記號なくともその事に想ひ到る修練が必要である。

例 文 A.

M Life is not only short, but uncertain. We are not only ignorant what to-morrow may bring forth, but whether for us there

may be any to-morrow at all.

【註】此の問題は構文上別に六ヶ敷い所は無い。例の not only..... but..... (のみならず.....其の上に)が主たる連鎖をなして居て要するに Life is not only short but uncertain. を敷衍した文である。ignorant は ig+know で ig- は in- の轉じたもの、打消の接頭語である。to be ignorant=not to know で I was quite ignorant of the fact. (其の事實は私全く知りませんでした)などで覚えて置かるべし。此れは ignorant を コナして使つた場合。an ignorant fellow (無學な奴)の如きはそれが固まつた意味の用法。各々用ふる所に依つて差別あるを見るべし。さて We are ignorant what to-morrow may bring forth. の一文を考へて見ると、こゝで最初云つた様に to-morrow を「明日は」と云ふ普通の用途を脱して、一文の主格たる位置に据ゑられて居る事にさへ氣がつけばよるしい、即「吾々は明日(なるもの)が何を齎すかを知らぬ」となるのである。to-morrow の nominal use がその次にも又出て来る。.....but whether for us there may be (any to-morrow) at all. に於て any to-morrow と續けて讀まればならぬ、譯は「吾々に一體明日なんと云ふものがあるや否やも知らぬ」「今日ありて明日無き吾が命かも知らぬ」意となるのである。此處の at all は「一體全體」と云ふ強めの語で whether there may ever be any to-morrow. と云ひ換へてもよいのである。

【譯】人の一生は短いのみならず不安定なものである。吾人明日(アス)が日何事が身に起らうも知らぬ許りか、一體明日の云ふ日が吾が身にあるかさへも知らぬ身である。

例 文 B.

Q. The workman who drops his tools at the stroke of twelve, as suddenly as if he had been struck by lightning may be doing his duty,—but he is doing nothing more. No man has made a

great success of his life by doing merely his duty. He must do that; and more. If he puts love into his work, the “more” will be easy.

【註】at the stroke of~ は時の正確さを云ふ句であつて「時がボーンと打つと同時に」である、Stroke は strike から作る名詞形なる事勿論である。to be struck by lightning は「電撃を受ける」で、日本では「雷に撃たれる」と云ふのが西洋では「電 (lightning) に撃たれる」と云ふ。to make a success of one's life は to make one's life a success の英語的な云ひ方で、例は「彼を一人前に育て上げる」と云ふのを to make him a man とせず to make a man of him. と云ふのと同様である、He must do that—and more. が全文の骨子をなして居る、that は his duty である、で「彼はそれは盡さなければならぬし、猶又それ以上を盡さなければならぬのだ」に當る。to put love into work. が愛を單めるなぞが適譯であらう。それで the “more” が本項説く所の more の nominal use で「それ以上なるもの」「それ以上やると云ふ事」に相當するのです。

【譯】十二時がボーンと鳴るや恰も雷に打たれたかの如くに己れの道具をボロリと捨て、仕舞ふ職人は、成程義務は盡して居るかも知れぬが、それ以上には何も盡す所は無いのだ。單に自分の義務のみを盡した丈で自己の一生を成功に終らした者は無い、義務は勿論盡さねばならぬ、がそれ以上を盡す必要がある。もし彼にして己れの仕事に「愛」を込めたならば此の「以上」たるものは至極容易な事となるのであらう。

問 題

D15. Diligence is the mother of success, and God will help the provident. Work while it is called to-day, for who knows if to-morrow's sun may see you laid up with illness?

U, D. 16. “You will make a reduction if I take a dozen of these, I suppose?” “I am afraid, sir, you must take no for an answer.”

Possessive の研究

God's love of man

普通“の”と譯して居る所謂 Possessive の形が單に“所有”を表はすだけでは無く色々な動的關係を有して居る事は文法の教科書にもチャンと出て居る。例ば girls' education, education of girls は何れも女子を教育する教育で、此の際の possessive は objective relation (目的關係)を表はして居る。又 the Emperor's departure, the departure of the Emperor 共に皇帝の出發で、subjective relation (主格關係)を示して居る、それが同一の noun でも此の兩様の關係を表はす場合が中々ある、即

the ascent of a balloon. 氣球の昇騰。

(subjective relation)

the ascent of a mountain. 登山。

(objective relation)

の如きその一例である、此れを猶明瞭に定義すれば、此の Subjective, Objective, の二つの relation を表はすのは Possessive form が他動詞より作らるゝ名詞と結合する場合に起るのである。例ば “The emperor's death” に於ては death が自動詞の die から作るので「皇帝の死」と云ふたゞ一つの意味より外無いけれ共、 “The emperor's conquest” には「皇帝が勝つた事」

(subjective relation) にもなるし、又「皇帝を打破つた事、即皇帝の敗北」(objective relation) にもなる。此れは conquest が他動詞 conquer から作るからである。但し objective relation を表はすのは或限られた名詞の possessive form 丈けなので、多くは “of+noun” の形が其の方を受持つ、殊に subjective, objective 二つの場合が同時に mention さるゝ時は of+noun が後者を表はす事になつて居る、例ば God's love of man. (人を愛する神の心)。His dislike of work. Teacher's explanation of the passage. (其の文句の先生の説明)の如きである。所がこう云ふ動的關係を possessive が表はすと云ふ事をうつかり心づかずに 's の形や of+noun の形を見るとすぐ “……の持つて居る” 意の様に思つてしまふのは甚だ以て無用心と云はなければならぬ。一例を挙げれば近來 democracy に関する辯論が至る所で聞かされる、そして「democracy とは何ぞや」に對するその定義として米國大統領の Lincoln が云つた有名な言葉が引用される、それは

Democracy is the government of the people, by the people, and for the people.

である、ところが國粹擁護論者は此の “government of the people” を指して「人民の政府」と譯し democracy とは「人民の有する政府」なり。君主を認めざる政府なり。と解してかゝつて居るが此れは飛んだ間違ひで、なる程 democracy は「人民が主として働く政治」

には違ひないが其れは“by the people”が表はすので of the people は何にもそんなに力ツこぶを入れる所ぢや無い。此れは明かに objective relation の“of”なので government of the people は governing people 即「人民を統治する事」の意である、天下「government of the people」ならざる「government」は何處にも無いわけだ、要するに此れは government を「政府」と云ふ固まつたものに譯してしまふから起つた間違で此の定義の眞の意義は

Democracy とは人民自らに依つて、人民のために、人民を統治するものなり。

である。

それでは此の possessive が「が」か「を」か何れか判然せぬから解釋が困難だと云ふ事になるが、其處は文の前後の關係と名詞の性質意義とに依つて見定めるより外仕方が無い、We at once started for his rescue. と云へば「吾等は直に彼を救助しに出かけた」で、God's love of man は「神が人を愛する慈愛」である。で前申した通り、God's love of man の様に Subjective relation, Objective relation 兩方を示す必要のある場合には Possessive case が Subjective を表し、of+noun が Objective relation を示すのが定則である。

猶 of+noun は此の動的關係を示す外に同格關係を表はす場合がある、此れも解釋に必要である。

He lacked what constitutes the first requisite of longevity,—the virtue of temperance.

彼は長命に最も必要なる第一要件を缺いて居た、それは即ち節制と云ふ徳だ。

此れは the City of Tokyo (東京と云ふ市、——東京市)の様に固有名詞では常に見當る事で間違も無いが上例の様な一般的名詞に使はれると一寸氣づかぬ事があるから序に茲に注意して置く。

例文 A.

Never do anything of which you will ever have cause to be ashamed. There is one good opinion which is of the greatest importance to you, namely your own.

【註】 —to have cause to— ……するわけがある、……する覺えがある。opinion—批判、評判、of importance—重要なる。namely—即ち。your own=your own opinion [your (i subj. relation.)]

【譯】決して自ら恥づる覺えがある様な行爲を爲すな。汝に取つて最も大切なるべき好評はたゞ一つあるのみ、其は他なし汝自ら汝に對するそれである。

例文 B.

Character is formed by a variety of minute circumstances, more or less under the regulation and control of the individual. Not a day passes without its discipline, whether for good or for evil.

【註】 *minute' cir'cumstances* 「些細な事柄」、*a variety of = various*, 「色々様々の」、*individ'ual* 個人——本人。

not a day passes without etc. は「一日として……無くて過ぐる事無い」意である、*its discipline* の *its* は *objective relation* にある、即「人格が陶冶される事」である。*for good or for evil* は其の人格の感化が善い方へなされる事もあり又悪い方へ向けられる場合もあるよりしてかく云つたのである。

【譯】 人格は其の人自らの制御調節を多少は受けながらも、種々雑多な事柄に依つて形づくられるものである、善かれ悪かれ人格の陶冶無くて過ぐる日は無いのだ。

問題

17. The good opinions of people never come because one's parents are rich, but because one's self is worthy.
18. Life is hard. Make up your mind to go steadily forwards, and bear your burden, and if you will do this while you are young, you will become comfortably rich when you get old, and will have the respect of society and the enjoyment of everything good in this world.

Apposition の研究

一つの名詞の説明に他の名詞を置く、それは *ap-position* (同格)にあるものと云ふ、此の同格名詞が相並んで置かるゝ場合は文意を取るに困難で無いが、時として、ごく離れた位置に、前に出た名詞の説明として置かるゝ事がある。讀んで行つてボカツと何の関係も無い名詞が飛び出して来る、目的でも無ければ主語でも無い、一體どこにどう文脈がついくものやら判定がつかぬ、と云ふ事がある、そしてよく考へるとそれが同格語として前の名詞の説明に置いてある事が往々ある、時としては前に述べた事柄全體の説明として置かれる事もあるので同格名詞とは云ひながら何もそれに對する他の名詞があるわけでも無いといふ場合もある。以下の例文に依つて研究され度い。

例文 A.

A more beautiful and touching letter could scarcely be penned than his description of the accident which happened to his little son—a fall from his pony, resulting in a broken thigh.

【註】 *A more.....could scarcely.....* は比較級の形容詞を *scarcely* (殆んど無い)で打消した形で「これ程……なものは殆んどあり得まい」である。*touching* は人の心に觸れる意で「憐れをさそう、胸にこたえ

る」である。丁度 moving (人の心を動かす) など、相似た形容詞である。

be penned は be written である、pen を動詞に用いた所を注意せねばならぬ。

description 「叙述」。

an accident 「出来事」とは「怪我」である、An accident happened to him. と云へば「彼が怪我した」に相當する、happen to ~ は「誰の身に起る」である。

a fall from his pony が前の accident の同格であつて、「小馬から落ちたといふ出来事」とつづくのである。

resulting in a broken thigh 「大腿骨を挫くに至つた所の」、これは a fall の説明句、result in ~ は「.....といふに結果する」で「その結果が.....になる」である。

【譯】 彼の小さな息子に起つた怪我、それは小馬から落ちて大腿骨を挫いたといふ、その叙述ほど美しい悲しい手紙は他にとても筆にする事は出来ぬほどである。

例文 B.

▷ If anything he looked rather less than his age, a result, perhaps, of having always lived with the young. His features are agreeable; his body, though slight of build, had something of athletic outline, due to long practice at cricket, football and hockey.

【註】 If anything はそれだけ切り離した副詞句であつて「どちらかと云へば」の意である。それは「彼の見かけより若いとか、老(フ)けて居るとか、何とか云ふ事があるならば」の意からである、If にはこう云ふ短かい句がある。Correct the errors, if any. (誤あらば正せ。) や I wish to enter the High School if possible. ならう事なら高等學校へ

入り度い。の如きはごく普通の句である。if anything もその同類と見るべし。

look less than his age 「實際の年齢よりは若く見ゆる」。

a result は前に述べた様に、He looked less than his age 全體の同格詞であつて which was a result..... と補つて見ればよく解る、それは of having always lived with the young [若い者共と一所に暮して居た(結果)]とつづくのである。初めからズツと讀んで、.....a result, perhaps, of..... が前に述べた事の説明として名詞を置いて續けたもの、と自然に讀み解かれる様に反覆讀みならずがよし。

features 「目鼻立ち、顔のたち」、feature は顔の局部々々の形であるから複数になるのである。

though slight of build 「やき形ではあるが」、build はこゝでは名詞で construction (體格)を意味する、of は「.....に就て云へば」の心で「.....の點は」に當る。He is quick (or slow) of understanding. 彼は理解が敏い又は鈍い。He is blind of one eye. 彼は片盲だ。の如きを参考。

have something of athletic outline 「何處となしに運動家のおもかけがある」。outline は「輪廓」「外から見た様子」である。

something (あるもの)とは、これとはつきりは云はれぬが「何となしにある様子」の意で用ひられる。

due to ~ 「.....の結果、.....のために」。

long practice 「長い間やつた事」。

【譯】 彼はどちらかと云ふと年よりは若く見えた、多分いつも若い者と暮して居た結果であらう、彼の目鼻立ちは氣持よく、身體は體格がホツソリして居たが、どことなく運動家の風格があつた、これは長い間クリケット、フットボール、ホッケーをやつて居たがためである。

問題

10. When a child I was permitted to handle on Sunday certain books which could not be exposed to the more careless usage of common days; volumes finely illustrated, or the more handsome editions of familiar authors.

當(あて)のつかぬ代名詞及名詞

短文の中に表はれる代名詞が何者を代表するや不明な場合は常にある事であるが、其れが其處に表はれた文だけで見當が附く筈のものは決して見逃してはならぬ。ところがその見當がうつかりして居ると一寸つけ難い場合がある、時として pronoun が代表する名詞が文の後の方に出て居る事があるし。又よほどよく考へて見ぬと pronoun と本家の noun と結び得られぬ事もある。容易な一例を取つて見ると

Remember that all the duties of her children to England may be summed up in two—industry and honour.

上文の her は何を指すかと云ふに無論、England を指すので her children は English nation である。もしも國家は “she” を以て represent する、事を承知せずに居らば、her を何か單獨の婦人の様に思ひ違へて全文の意味を捉へるに行惱む事になる。

例文 A.

It is another's fault if he be ungrateful; but it is mine if I do not give. To find one thankful man, I will oblige many that are not so.

【註】本文で “he” は誰を指すか問題である、もし “It is

another's fault if he be ungrateful.” の一文丈け孤立して居て後續の文が無ければ、此の文は明かに「彼が恩に感ぜぬとてそれは他人の罪だ」と譯してもよろしからう。がその次に “but it is mine if I do not give.” とあに照して見ると此の場合 “he” は “another” を代表せればならぬ、即「他人が(恩を受けて)有難がらぬとてそれはその人の罪である。もしそうだと云つて自分が他に與ふる事を爲されば、それは自分の罪である。(人が恩に感ぜぬからとて慈善を止めてはならぬ)」が正しい文意であるのだ。此の邊の意味の取り方は語法と云はむよりはむしろ常識の力に俟つ點が多いので、“give” と云ひ “ungrateful” と云ひ。“fault” 等から推し考へて見れば文意は自然判明して來るのである。猶 “mine” が “my fault” である事も一つの見つけ所である。此の問題は徹頭徹尾 pronoun の試練である。その次の文では今度は pronoun ならぬ “one” を pronoun と取り違へる心配がある。to find one thankful などと云ふと「人を thankful に見出す」様な書き方らしく思はれるだらうが此處の one は生粋の one で「一つの、一人の」の意である。即「一人の恩に感ずる人を得んが爲めに予は恩を忘るゝ多数の人を援助せん」と云ふ悟つた云ひ方であります。猶 I will oblige etc. の will が意志を表はす事。及び oblige が「他人に義理をかける」“to lay one under obligation” の意なる事等も重要な點である、要之、本題には “he” “mine” “one” “will” の四つの急所をしかと押へなければならぬ難文である。

【譯】他人が恩に感ぜぬからとてそれは其の人が悪いので。(それだからとて)自分が他を助くる事をせずば自分が悪い事になる。一人の恩を感ずる人を得んが爲めに吾は多くの忘恩者を助けやうと思ふ。

例文 B.

She is your own honourable child, and as honest a woman as any in the whole room, let the other be who she will.

【註】此の簡短な文だけで she が誰やら your が she のどんな関係

やら明かには解る筈は無い。たゞ「彼女は貴女の正當な子であつて此の部屋に居る誰にも劣らぬ正しい女である」と云ふ意味に取る丈けであるが let the other be who she will の一句が考へ所である、此處では當ての附かぬの普通の pronoun で無くして “the other” である。the other とは二つ又は二人の内一つを取つた残りの一つである、それが此處では何に又は誰に當つて居るのか。それはこうである。she is as honest a woman as any (woman) in the whole room と云ふから、「その部屋中の誰を連れて来て彼と比較しても其者に劣らず正直だ」を意味する、即ち彼女と或他の娘と比べる事になる、して見ればその比較の對照に連れて来た娘が the other になるわけだ、the other は即相手(アヒテ)である、即上の as any の “any” と一致するのである、此處では却て普通の pronoun を用ひて let her be who she will. とした方が解りが早い。それで此の句は所謂讓歩の句であつて whoever she may be と云つた形の變形なる事はよくある筆法で既に知らる事と思ふ。

【譯】 彼女は貴女の正當な娘で、此の部屋中の誰——それが誰れであらうとも——に劣らぬ正直な女子である。

例文 C.

Thus was born in the boy's heart that ambition which afterward lifted the man into honor and fame.

【註】 此の文では代名詞では無いが當ての一すつかぬ名詞がある。それが問題だ。即 the man とは誰を指すのか。此處では却て him と代名詞を用ひて呉れたら明瞭になるから面白い。the man は the boy と同一人物を指すのである。何故それを him とせずに見別語の the man を用ひたかと云ふに其の子が長じて大人になつて後の彼をと云ふ心を此の the man に含めやうと云ふ筆者の用意である。全文の大意は、何か或る事件の爲めにその少年の心に強い野心が宿つて、そのために彼は長じて聲望ある位置に達した。と云ふのである。此の問題は別項文の筋にも入るべきもので一つの particular description である、又 thatwhich の呼應をも見逃されぬ筆法である。

【譯】 かくしてその少年の心の中に、後年成人せる彼を名聲ある地位に達せしめたるその野心が萌したのである。

例文 D.

If the principles of a polite, deferential behavior be not planted in early life, they will rarely become a part of a man's character.

【註】 polite は「丁寧な」で deferential は defer (尊敬する) —deference から出来た形容詞「恭謙な」意である、それで問題は a man's character である、此れは「人の」でも「男の」でも不可である。即「成長してからの」「大人としての」である、で無くば文意が完全に傳へられぬ。

【譯】 もし丁寧に恭謙に振舞ふ主義が若い時に植ゑ附けられぬ時は、それが長じて人となつてからの性格の一部をなす事は殆ど稀である。

語句の呼應

文の中の或る言葉が他の言葉と相應じ、相結んで文意をはこんで行くことは最も大切である、It is character that makes a man great. (人をして偉大ならしむるは人格である)の It と that とは相呼應して、「……する所のそれ」と強く指示した發表をなして居る、斯の如き語句の關係を明かにする事は英文解釋の最も重要な仕事である。

I. That..... which

“which” に導かれた句がその前にある “that” に

應ずる事は別に珍しい事でも無いが少しこみ入つた文になるとその *that* を relative pronoun などと取り違へて失敗する事がある、簡単な見本を示せば “He lacks *that* power of will *which* makes for success.” の如きものである、譯すと「彼は成功を致すその意志の力を缺いて居る」で *that* は power of will を特に強く指示するのである。

例文 A.

Labour to keep alive in your breast that little spark of celestial fire called conscience.

【註】此の問題の第一解決點はそれが命令文である事、subject は *you* で略されてある事、である。即 *labour* は動詞で「……する様に努めよ」の意である事を看破せねばならぬ。此の *labour* を「労働」なんかと考へたら最期失敗である。

to keep alive は「生かして置く」であるが、此處では *fire* と *spark* とあるから「消さずに保つ」に當る、*spark* はスパークだ「火花」である、*celestial* は知らぬとして *that spark of fire called conscience.* として考へて見られよ「良心と呼ばれる、その火花」だらう。此れも別項説く figure of speech の一例である。

celestial は *heavenly* の意、*worldly* の反對で「神の園にある様な」意で「神々しき」等が適譯と思ふ。*called conscience* の前には *which is* の略されて居る事勿論である。

【譯】良心てふ其の小さな神々しき火花を汝の胸の中に絶やさぬ様に努力せよ。

例文 B.

We shall find that part of our duration very

small, of which we can truly call ourselves masters, or which we can spend wholly at our own choice.

【註】是の問題の解決は *duration* と *to call oneself master of something* との適確な了解で極る。先づ *Duration* は *during* (……のつゞく間は、……中に) や *endure* (堪え忍ぶ) と密接な言葉である。即 *duration* = 「期間」である、しかし此の問題では *our duration* とあるから此の際此れは *our life* に等しいと見て取る事が必要である。

master は「主人」たる事申す迄も無いが此れが *to be master of* と *to master* (動詞に用ひて) と云へば「己れを主人とする」——「征服する」「熟達する」となるわけである、“He made himself master of the land.” は「彼は天下を乗つ取つた」意である。それだから “We can not call ourselves master of all our time.” と云へば「吾人は自分の時間全部自分の自由になるとは云へぬ」意だ。従つて “that part of which we can call ourselves masters. (吾々が全く自由になると云ひ得るその部分) が very small なる事を知る」と云ふのが本問題の主旨である。

【譯】吾人は一生の内で眞に自己の所有(モノ)であり、全然自分の勝手に費す事の出来る、そんな期間は甚だ少い事を知る。

例文 C.

He had arrived at that last stage of human depravity, when cruelty becomes pleasing for its own sake.

【註】此の問題で *depravity* と云ふ單語が解らぬものと假定して全體からそれを推定して見たらどうか。先づ *cruelty becomes pleasing for its own sake* の一句である、*cruel* は「残忍な」意だから *cruelty* はその名詞「殘虐」である、「殘虐」な行爲は他に何か目的があつてこ

そ行はれるが普通であるのに、それが for its own sake (殘虐それ自身の爲めに) pleasing (面白い) と云ふ事は中々なり得ぬ事で、人間性を失ふて惡魔外道に墮せむとする人間のその last stage (末期) に於てのみ稀に見る所である、stage は「階段」であつて従つて degree に似た意に用ひる、first stage (初期、初歩)、second stage 等用ひられる、此處まで考へれば Human depravity が「背徳」とか「人非人」とかの意と察せられる、そして亦實際それでよいのである、“to deprave” は “to make bad” であつて「心等を下劣にする」意である、A depraved nature 「下劣な心」、A depraved taste [下(劣)びた嗜好] 等用ひる。

【譯】 彼は殘虐が、殘虐自身の爲めに快いと云ふ様な、そんな人非人のどん底に達して居た。

【附】 that.....which が上の様に such.....as に似て來る事を考へられよ、例ば

That virtue which needs to be guarded is scarcely worth the sentinel.
監視を要する様なそんな徳操は殆ど番兵を置く丈けの値打が無い。

例文 D.

That man has fallen into a pitiable state of moral sickness, in whose eyes the good opinion of his fellow-men is the best of merit and their applause the principal reward of exertion.

【註】 *pitiable state of moral sickness* とは「道徳的疾病的憐むべき状態」である。で一寸見たところでは *That man has fallen into a pitiable state of moral sickness.* だけが「あの人は道徳的に憐れむべき状態に陥つた」と譯せるであらう、が in whose 以下のつゞきを考へると合點が行かぬであらう。

good opinion は「善い意見」ではわからぬ。「好感」とも譯すべきもので *good opinion of his fellow-men* で「彼の同胞から好く思はれること」を意味する、*the best of merit* は「功績の最上なるもの」、*their applause* は「彼等同胞の賞讃」、*principal reward of exertion* が「努力の

主たる報酬」である。すると in whose eyes 以下は

「其人の眼中には同胞から感謝されることか最善の功績であり、彼等の讃嘆を得ることが努力に對する第一の報酬の如くに思はれる」。

意と解せらる、此れが別の *That man* 以下に應じるのだから、*that* は *whose* にかゝつて「こう云ふ様なそんな人間は云々」となる、*that man* は *such a man* といつた様な意味と知るべきだ。

猶一言したい事は *has fallen* の形である、これは單に「陥つた」とせず「陥つたのである」「陥つたと云ふべきだ」と譯すべきところで、或一箇の斷案を下した語氣である事を考へられたい。

【譯】 自分の眼中には同胞の好感が功績の最善のものであり、彼等の讃嘆が努力の重なる報酬の如く映する様な人間は道徳的病的憐れむべき状態に陥つたものである。

問題

20. Those who have won prizes have made a good beginning; those who have not, may yet make that good ending which is better than a good beginning. No life is wasted unless it ends in sloth, dishonesty, or cowardice.

21. Gallant men who are cut off by the sword, move rather our veneration than our pity; and we gather relief enough from our own contempt of death, to make that no evil, which was approached with so much cheerfulness, and attended with so much honour.

II. This ...that

文中に *this* とあるからは、何かそれに相當するものが前以て擧げてある筈と思はれるであらうが、實際はその後に従ふ *that.....* の句が之に應じて居る事がある。

例文 A.

The mind is like a sheet of white paper in this, that the impressions it receives the oftenest, and retains the longest, are black ones.

【註】 The mind is like a sheet of white paper in this (心は一枚の白紙と此の點が似て居る)とまづ云つて置いて、此の點とは即ち……と後から説明を加へたのが that 以下の部分である、this と that とか並んで置かれて居ながらその關係が一寸わからぬ懼れがある、單に in that…… とすればよい様に思はれるであらうが、その間に何か名詞を置く習慣になつて居るのだ。

impression は「心に press した跡」である、「印象」である。retain は keep or hold で「持續する」意。black ones は black impressions の略で「暗黒な印象」とは不愉快な感じや怨恨を指すものと見るべし。

【譯】 心は一葉の白紙とかういふ點が相似て居る、即最も瀕繁に受け、且又最も長く消えずに保つ印象は暗黒なものである。

例文 B.

Even the greatest actions of a celebrated person labour under this disadvantage, that however surprising and extraordinary they may be, they are no more than what are expected from him.

【註】 前例と同様 ……labour under this disadvantage, that…… に應じるので、これを單に the disadvantage that…… (……といふ不利益) 或は such disadvantage as…… とでもしたらば一層よくわかるだらう、それが前にも説いた如く「こゝにいふ不利益に……、即ち……」と説明的

に述べたので、従つてコンマが that の前に置いてあるのである。

此の文で重要な語は labour under~ の意味である、to labour は「働く」意と解さるゝが普通だが、場合に依つては「苦勞する」意になる、従つて You labour under a mistake. と云へば「君は間違をして、それに氣がつかず苦しんで居る」意となるのである、て此處の、celebrated man (有名な人) の the greatest actions (最も偉大な業) ても labour under this disadvantage とは「こゝに云ふ不利益を蒙る」意と解される、斯る際は to labour under~ = to suffer from~ と覺えられよ。〔42 頁参照〕

さてそれが如何なる disadvantage かといふ事を that 以下が述べて居る。

surprising 「驚嘆すべき」、extraordinary 「並々ならぬ」。〔42 頁参照〕
be no more than~ = only 「……に過ぎず」。what are expected from him. 「彼から豫期されて居るもの」とは「あんな偉人のことだから、その位の事は當然である」と世人が思つて一向驚かない意である。

That is what might be expected from him.

それは彼から豫期され得る事だ。

とは「それは彼のやりさうな事だ」に相當する事を考ふべし。

【譯】 有名な人のやる事はどんなに偉い事でも常にこゝに云ふ不利益を蒙る、即如何に驚くべき偉大な事であつても、彼には當然豫期さるべきものに過ぎぬのである。

問題

22. I agree with Mr. Samuel in this—that no one who lived through the Great War, and was in a position to observe what was taking place, will ever forget the qualities displayed by the men and women of this country, men and women who had no other education than the elementary schools had afforded them.

23. When a true genius appears in the world you may know him by this sign, that the dunces are all in confederacy against him.

III. It.....that

例 文

It might be owing to the pleasing serenity that reigned in my own mind, that I fancied I saw cheerfulness in every countenance throughout the journey.

【註】 文の subject が長いものであつて、それをかりに It で代表し、後で that がそれを受けて續く、さう云ふ書き方は始終ある、併し長い文になると that が幾つも出て来るから、最初の It に應じるのがどの that であるか、まごつく事がある。此の問題でも that reigned in my own mind. that I fancied..... と二つの句が that で導いてある、Itthat と應じるのはその何れであるか、まづ語句の意味をしらべてから考へて見れば解る。

be owing to ~ 「.....に原因する、.....なるがためである」。

pleasing serenity 「快い晴れ々々しさ」、serene とは清らかに澄んだ意で心に一點わだかまりの無いのが serenity of mind である。

reign 「統御する」意から「行きわたる」「はびこる」。

saw cheerfulness in every countenance 「誰の顔にも快活を認めた」とは「會ふ人毎に誰の顔も愉快さうに見えた」意である。

それで文頭の It に應ずる that は第二のものなる事が知られやう。

【譯】 私が旅行中 到る處で誰の顔にも愉快けな様子を見た様に思へたのは、私自身の心を支配した快い晴れ々々しさのためであつたかも知れぬ。

問 題

24. It is not every one that wears a human form, that can claim to be a man, in the full sense of that term. Many live and move among us, who are destitute of the chief elements of a manly character.

Relative Pronoun に就て

Relative Pronoun (關係代名詞) 'that,' 'which' 'who' 等は文中のある名詞や句を受けて、それを代表して、次に従ふ句にかゝつて行くものである事は言をまたぬ、たゞその antecedent (先行詞) が一箇の名詞でなくて長い文句である場合がある事を忘れてはならぬ。例へば

He was ever true to the royal cause, which won him a permanent renown.

彼は天朝の味方として終始した、これがために彼は永久に名を成したのだ。

に於ける which は royal cause を受けるので無く He was ever true to the royal cause と云ふ事實全體を受けて、「その事が彼に名聲を獲與へた」と、次の文の主語を爲して居るのである。

それで關係代名詞はかく文の語句を引き受けて、次につゞく句の subject になつたり object になつたりするのであるが、時にそれが次の文句のどの語へつゞくのであるか一寸不明なことがある、例へば

There is ever an unsatisfied longing which we spend our lives trying to fill.

の一文に就て見るに、

There is ever an unsatisfied longing.

人生には常に満たされざる「あこがれ」といふものがある。

と云つて、その longing (憧憬) を which で受けて居る、さてその which は次文のどれへつづくのであらう、「そのあこがれを」が we spend の目的ではあり得ない、we spend our lives (吾人が一生を費す) とついで居るから、即ち此の which は trying to fill の目的なのである、「それを fill (満た) しようと努めて一生を過して行く」意で、which は次文中の infinitive 'to fill' の目的となつて居るのである。

かく関係代名詞はそれに續く文句の subject となつたり、本動詞の object になる外に、文中の不定法や前置詞の目的にもなるのである、此の點は英文解釋上注意すべき事である。

例文

There is nothing which continues longer than a moderate fortune; nothing of which one sees sooner the end than a large fortune.

【註】 *moderate* といふ語は「mode (度) に適つた」意で「適度の、法外でない」意から「おとなしやかな、廉價な」等を意味する、従つて時には「低い、豊(ユタ)かならざる」等にもなる、a moderate fortune とは a large fortune (巨財) に對して「中産、ほどほどの財産」である。で、前半の文は「ほどほどの財産ほど永續するものはない」であつて次に、nothing of which..... と續いて居る、此の *of which* はどう云ふ關係にあるものであらうか、次につづく文は one sees sooner the end than a large fortune である、one は「人か」である、a man の代りによく使

、one であつて、one sees sooner the end (人か終りをもつと早く見る) とあるからは「何の終り」かを明かにせねばならぬ、それが即 *of which* である、即この *of* は the end *of* なので、「その終りを.....」である、文意は「巨萬の富以上に早くその終りを見るものは何ものもない」事になる。

かく關係代名詞が何か前置詞の目的となつて置かれ、その前置詞を後へ續く句の名詞か動詞へ結びつける文脈をよく研究する必要がある。

【譯】 中位の財産ほど永く讀くものは無い、又巨萬の富ほどその終りを早く見るものも無い。

問題

25. No complaint is more common than that of a scarcity of money. Money, like wine, must always be scarce with those who have neither withal to buy it, nor credit to borrow it. Those who have either will seldom be in want either of the money or of the wine which they have occasion for.

26. Keep in mind in the first place, that though the library groan with books there are in each department only a few books, in relation to which others are but auxiliary.

27. Games not only keep the body in health, but give a command over the muscles and limbs which cannot be overvalued. Moreover, there are temptations which strong exercise best enables us to resist.

**Compound Relative Pronoun と
Compound Relative Adverb**

whatever, whichever, whoever は anything which, anyone who. 等に相當するもので compound relative pronoun と云ひ、wherever, however, whenever は compound relative adverb と云ふ、此れ等は各々文中にありて主語、目的又は副詞等の用を辨ずると一方に又、本文と遊離して absolutely に用ひられて所謂 concessive clause (讓歩的の句) を爲す場合とある。

Compound relative pronoun の元來の用途はそれが clause の主語或は客語として働くのである、これに對して、concessively に用ふる時は clause に於て別に主語なり客語なりを繰り返すのである。

Do whatever you do in earnest. 汝の爲す事は總て眞面目にやれ。(whatever you do が Do の目的となる)。

Whatever you may do, do it in earnest. 何事を爲すにしても、眞面目にやりなさい。(Concessive use; whatever you may do = No matter what you do. で此れは遊離した讓歩の句。do it in earnest. と云ふ風にチャント “it” と云ふ目的を置いてある)。

又 Compound relative adverb を concessively に用ふる時は助動詞 “may” を伴ふて本文の範圍外に立つ。

I take this wherever I go.

(普通の副詞的用法)、私は何處へ行くにも此れを携帯する。

Wherever you may go, you will find something to complain of. (concessive use: 此れを命令法で表はせば go where you will, you will find etc. となる)。

何處へ君が行くとしても何か不平の種はあるものだ。

此の -ever を用ひた句が屢々 concessive clause に用ひらるゝ結果、その元來の用途あるを忘れて文意を取り迷ふ事ある故注意すべし。

猶今一つ、whatever は代名詞であつて「何等のもの」といつた様な強めの言葉として用ひる事がある。

I see no beauty whatever in this picture.

私は此の繪に何等美しさを見出さぬ。

かゝる場合の whatever と前に説いた如き clause を作るものと判別が明に出来なければならぬ。

例文 A.

Whatever employment you follow with perseverance and assiduity, will be found fit for you.

【註】此れは whatever を元來の用途に依つてそれが全文の subject となつた例である、もし「何事を……するにしても」と concessively に解して行くと、will be found etc. が首の無い文になつて仕舞つて仕未

いづれ。殊に with perseverance and assiduity と云ふ句があるので「忍耐勤勉を以てすれば」と云ふ様な條件的 shade of meaning (風味) が加はるのである。

【譯】 汝が忍耐勤勉を以て従ふ如何る仕事でも必ず汝に適するものとなるであらう。

【例】 上文をもし concessively に云はうとならば次の様にならね。

Whatever employment you may follow, if you follow it with perseverance and assiduity, you will find it fit for you.

猶 whatever, whichever は形容詞的にその次に名詞を従ふる事屢々あり。本文もその一例なるを見よ。

例文 B.

Whatever our creed, we feel that no good deed can by any possibility go unrewarded, no evil deed unpunished.

【註】 —ever で初まる concessive clause は往々動詞を省略する事がある、本問題にも見る通り元來ならば *Whatever our creed may be.....* とあるべき所を may be だけは解り切つたものとして省略されたのである。

creed は「信條、信念」で重に宗教上の信仰箇條を意味する。

by any possibility 「如何なる事ありても」、possibility は「possible な(可能な)事」「萬一無いとも限らぬ事」である、それを打消に用ひて notby any possibility = not possibly など云へば「萬が一にも無い、絶対に無い」と云ふ強い打消になるのである。

no good deed can go unrewarded と續いて「如何なる善行も報いられず終る事無し」となる、go unrewarded の go は「すんでしまふ」意。

no evil deed (can go) unpunished と補はれて「どんな悪事でも罪なくすむ事無し」である。

【譯】 吾人の信條が如何なるものであるにせよ、どんな善行

も報いられずに終る事は絶対になく、又如何な悪事も罰せられずにすむ事は無いのだ。

例文 C.

We infer that as vigorous health and its accompanying high spirits are larger elements of happiness than any other things whatever, the teaching how to maintain them is a teaching that yields in moment to no other whatever.

【註】 any other thing *whatever* とか no other thing *whatever* などと名詞の後へ附けた *whatever* は形容詞の様に思はれるが實は no~ とか any~ とか云ふものを強める強勢的同格名詞の役をなすもので「ナンだつてカンだつて」と云つた様な語勢をなすものである。

We infer that = *We think that*. *infer* は「推量する」である、此の *that* はずつと下の *the teaching how to maintain them is.....* へつゞくのであつて *as vigorous health* から *any other things whatever* まで一つの挿まれた「.....であるからして」といふ副詞句である。

vigorous health 「強壯な健康」。

its accompanying high spirits 「之に伴なふ元氣」*accompanying* はその健康に附隨する所の」である。*spirits* は複數形で「元氣」の意。

elements of happiness 「幸福の要素」。

larger.....than any other things 「如何なる他のものよりも大きな」。

the teaching how to maintain them 「その健康や元氣を維持する方法の傳授」。—ing に the や a を冠する時はそれが眞の名詞になつたしるしてである。

yield 「まける」、*yield* は元來の *to give* の意で、従つて、*to yield to* = *to give in to* 「.....に降参する」といふ事になる、こゝでは *yield to no other (teaching) whatever* 「どんな他の教へにも譲らぬ」とつゞく。

in moment = *in importance* 「重要なる點に於て」、*moment* には「瞬間」の意の外に「重要さ」と云ふ意味がある。

It is a matter of *moment*.

と云つたら、「それは重要な事柄だ」の意である、これと、

This is a question of *the moment*.

これが刻下の問題だ。

の如きと區別せねばならぬ、又

moment (瞬間)の形容詞は *momen'tary* で

moment (重要)の形容詞は *momen'tous*

である事も如つて置く可し。

【譯】 強壯な健康と之に伴ふ元氣とは他のいづれ如何なるものよりも大なる幸福の要素であるから、之を維持して失はぬ方法の傳授はその重要さに於て他の如何なる教へにも譲らぬものであると思ふ。

問題

28. If a young man bows to the conviction that whatever he is to be, and is to win, must be achieved by hard work, there is abundant hope of his success.

what の用法

I. *what* が *that* *which* に代つて「……なるもの」の意に用ふるは普通の事であるが、その *what* が *adjective* となつてその次に名詞を従へる事がある。I gave him *what* money I had. の様なのがそれである、かゝる時には *what* は “*all the~which*” に當るのである、即上の文は「私は持つて居た丈の金を彼に與へた」意だ、猶そんな場合には自然その物が「たんとは無い」事が多いので I gave him *what* little money

I had. の様に *what* と名詞との間に他の形容詞が入つて來る事も屢々ある、すると「私は自分の持つて居た有るか無しの際かの金を皆與へた」意となるのである、勿論此の「*what*+形容詞+名詞」に於ける形容詞は必ずしも *little* には限らぬ事を斷つて置く。

例題 A.

One of the saddest sights is that of a young man who has sacrificed *what* little health and constitution he had for a college course.

【註】 *What* little health and constitution he had が上に説く所の構造で「自身の持つて居る而かも貧弱な健康、體質を悉く」を意味する。

Constitution (體質) は *to constitute* (組立つる)、の名詞で「國體」「組織」「體格」等の意を有す、すべて「多くの部分から組み立つた」ものを表すので、*constitutional government* (立憲政治) 等も参考になる。

Course は *course of study* (課程) であつて *middle school course* (中等教育)、*college course* (専門教育) 等よく云ふ。

Sacrifice は *sacri* (holy, sacred)+*fice* (make) で「神聖にする」が元の意「清めて神に献する(物)」を云ふ、それから「犠牲(にする)」意となつたのである。

【譯】 世の憐れな様の一つとして、己れの持つ限りの貧弱な體質健康を大學教育に犠牲にしてしまつた青年のそれである。

例題 B.

What curious books I have, they are indeed but few, shall be at your disposal.

【註】 此の文には取り立て、云ふべき三點がある、第一に *what*

curious books I have. が此處で説く所の point で「私の持つて居る珍本は残らず」である、前にも云つた通り what の次に來る形容詞は必しも little や few には限らぬので此處では curious が來て居るが、どうも此の筆づかひは「僅かなから残らず」と云ふ心持が附いて來たがるもので、此處でも they are indeed but few と挿句にしてことわつて居る、此れが挿句の一例で “few as they are.” (それも少數ではあるが) と云つた様な心を表はして居る、第三に注意する點が shall の使用であつて shall be at your disposal が I place at your disposal. と云つたのと同じになる。

disposal は to dispose (of) = 片附ける、から作る、to dispose of は「賣り拂ひ、片附ける、處分する」等に當るので at one's disposal は「その人の自由になる」意だ、「彼が處分する自由にある」様なのが元の心である。He has a great sum of money at his disposal. (彼は巨額の金が自由になる。) や I place these books at your disposal. (此の書物を御用立てます。) 等参考すべし。

【譯】 私の持つて居る珍しい書物は總て——と云つてもほんの僅かですが、貴君の御自由になさつて下さいまし。

29 問題

28. Those who have read of everything are thought to understand everything; but it is not always so. Reading furnishes the mind only with materials of knowledge: it is thinking that makes what we read ours.

II. What は比喩の句を introduce するに用ひられる、「4 の 8 に對する比は 2 の 4 に對する比に等しい」と云ふ事實を此を以て云へば “4 is to 8 what 2 is to 4.” なので此の云ひ方を一般の事柄に用ひて例へば Leaves are to the plant what lungs are to the animal, の如き文になる、此れは「木の葉の植物に於けるは肺臓の動物に於けるが如し」と譯される。注意

すべき事は what に従ふ句が比喩の標準になる。と云ふ事なので、上文は what を前へ出して what lungs are to the animal, leaves are to the plant. としてもよろしい、がもし Lungs are to.....what leaves are とすると主客轉倒で「木の葉の.....なる如く肺臓は動物に對して居る」と云ふ様な事になるから用心すべきである。猶又此の what の代りに all that の如き語が用ひらるゝこともありと知るべし。

例文 A.

What salt is to food, wit and humour are to conversation and literature.

【註】 wit も humour も似たもので wit は頓智、頓才で「しやれ」なぞのうまいのを云ふ、humour も「滑稽」又は「諷刺」である。但し曾我の家流の悪じやれは wit や humour とは云はれぬ。又 wits と複數形にしては「智慧」になるので “to be at one's wits' end” (百計盡きて、策の施すもの無く、當惑して) はよく出會ふ句である。

when he was taken prisoner, he set his wits to work to devise some means of escape. 彼が捕縛になつた時、彼は逃げ出す工夫に智慧を絞つた。

【譯】 頓智や諷刺の會話や文學に於けるは尙鹽の食物に於けるが如くである。

【附】 此の what は「~が~に對する所のものは」、「~の~に對する關係が」にあたるので、こう云ふ云ひ方をもつと説明的に表はすには as.....so..... てふ形式の文が用ひられる。下にその一例を擧げて置く。

As a vessel is known by the sound whether it is cracked or not, so men are proved by their speeches whether they be wise or foolish.

【註】 vessel は大小何に關らず「器」(物を盛る)である、皿でも徳利でも血管 (blood vessel) でも、さては船をも vessel と云ふ。殊によく船に使ふからこんな文では間違ひ易い。が crack (缺ける、龜裂を生ずる)があるを考へるとそれが陶器である事に氣が附く筈だ。

【譯】 器の龜裂があるや否やはその音にて知らるゝが如く、人の賢愚は其の談話で判ぜらる。

例文 B.

The quantity of beer consumed in those days was indeed enormous; (for) beer then was to the middle and lower classes not only all that beer now is, (but) all that wine, tea, and ardent spirits now are.

【註】 “for beer then etc” の文を what を以て書き更ふると for beer then was to the middle and lower classes what wine, tea, ardent spirits are now to us. の如きものとなる、即「當時中流下流階級に取つてビールと云ふものは丁度今日吾々に酒や茶がある總ての役目をなした」意を表はすのである、語句に就ては to consume が「消費する、消耗する」で、體力を消耗する病の意で結核病を consumption と云ふのも此れから出る語だ。ardent は普通「熱心な」意に用ひるし spirit は「精神」だから ardent spirits は「熱心」だと思ふかも知れぬが ardent は burn が原意、又 spirit は「精」である、「アルコール」は spirit であるので ardent spirits は whisky の如き「火酒」を云ふのである。

【譯】 當時消費されたビールの量は實に莫大なものであつた、と云ふのはその當時中流下流の社會に取つてビールは今日のビールに相當するのみならず、葡萄酒、茶、火酒の總てに相當したものであつたからである。

III. what? が形容さるゝ場合を考へて置く必要がある。形容さるゝと云つても what true? とか what

good? とか直接 adjective が附隨する事はあまり無い。通常 of—の句が從ふので例ば what of truth (or of the true) is there in his statement? 彼の言葉の中に如何なる誠があるか、の如き文に於て what = how much と考へればよろしい。長い文中にあつて此の of—の句を what に結んで考へる事が一寸困難を感じる事があるからその類の練習をやつて見やう。

例文

A religion is believed in for what there is of the good, true and beautiful in it.

【註】 to believe in は「信仰する、信賴する」意、單に to believe (信ずる、本當だと思ふ) と少し異なる。“There is much of the true in it” (その内には多くの誠が含まれる)。の文から what there is of good etc. の云ひ方へ移つて考へられよ。

【譯】 宗教は其の中に善なる、眞摯なる、美しい所があるがために信仰さるゝのである。

IV. 挿句を導く What

What が that which に代りて文の subject をなす場合が轉じて文中の挿句を導く様になる、下例を見られよ。

- a. *What mostly troubled Hamlet was the uncertainty about the manner of his father's death.*
ハムレットの心を最も悩ました事は父の死に方の不審な事であつた。
- b. *The habit of drinking makes you indolent,*

and, *what is worse*, leads you to other vices.
 飲酒癖は人を怠惰にするし、猶悪い事には他
 の種々の悪徳に導く。〔挿句の例〕

b 文は *what is worse is that it leads you etc.* とあ
 れば *what is worse* が subject になるのだがそれを約
 してそれだけが一個の挿句になつたのである、こう云
 ふ句は重に文の中間に表はれて来る事を察せられよ。
 (「挿句に就て」の項参照)

例文

The majority of people talk too much, often
 saying nothing, or what is perhaps the worse
 for themselves, uttering words which they after-
 wards wish had been left unsaid.

【註】 *majority* (大多数) と *minority* (最小数) とを對して覺えらるべ
 し。 *to be the worse for* ~ には二つの場合がある。

a. If he dares to do such a thing, it will be the worse for him
 (or himself).

彼がそんな事を敢てやるなら益々以て彼の爲めにならぬだらう。

b. He is the worse for his visit to the hot-spring.

病人は温泉へ行つて却て悪くした。

それで此處では a に類するもので、それが *what is the worse etc.*
 と續いて「猶悪い事には」「甚しきに至つては」と云ふ様な心を表すの
 である。

to be left unsaid は他の箇所て説明して置いた通り「云はずに置く」
 意だが此處の *which* 以下の句が文脈上注意を要する、即 *uttering words*
which they afterwards wish they had left unsaid. (彼等が云はずに置け
 ばよかつたと後で後悔する様な言を吐いて) と云ふべきところを *words*

which.....had been unsaid とつゞくやうに受身の形にしたものであ
 る。 *Often saying nothing* (は saying nothing to the purpose. の意と
 見るべし即「實(み)のある事は何にも云はずに」である。

【譯】 大概の人は餘り饒舌りすぎる。而も實(み)のある事
 は何にも云はず、又彼等にとつて猶悪い事は、後に至つて云は
 ずに置けばよかつたと悔る様な言葉を云ふのだ。

【附】 上述の *be the worse for* ~ の例文を下に一つ擧げて置く。

The agricultural labourer learns a great deal in the fields. He
 knows much more than we give him credit for. It is field-learning,
 not book-learning—but none the worse for that.

【註】 “*agri-*” は “*field*” である *culture* が「耕作」、それで *agri-*
culture が「農業」となる。 *field* が「野良」即「田野」になるのは忘れ
 てならぬ事である、此處でもそれが *field-learning* 「田園學問」となつて
 居るのである。

to give one credit for ~ は「それだけの腕があると思ふ」である、
to give one too much credit for ~ が「買ひ被(かぶ)る」事となる。

【譯】 農夫は野良で多くの事を學ぶ。彼は吾々がとてもと
 思つた程の事を知つて居る。それは田園の學問で書物の學問
 ぢや無いが決してそれが爲に劣ると云ふ事は無い。

V. *What it is, what he was.* 及此れに類する句
 が人又は物の實狀、現狀を云ふためによく用ひられる。
 そしてその用ひらるゝ “*be*” 動詞の *tense* に依つて
 現在の有様、過去の實際等夫れ々々表し分くる事が出
 來るのである。例ば *He made me what I am.* (彼は
 私を今私がある所のものとなした→彼は私をして今
 日あらしめて呉れた)。 *I am telling you only what it*
is, not what it will or shall be. (私は唯現狀ありのま

を申上げて居るので、今後どうなるか、どうなるべきかに就ては何も申上のちや無い。

例文 A.

We can hardly leave Italy without a peep at Rome, its capital, a city famous for what it was rather than what it is. Wherever we go, we recall its ancient glory and power, when this city was the center of the Roman Empire, which controlled nearly all the known world.

【註】 文の書き出しは one cannot do.....without..... (何々する事無しに.....し得ぬ)..... てふ形式に類する。can hardly leave は「去るに忍びぬ」が適譯である。a peep at=a short visit to で「一寸覗く」のである。famous for what it was etc. は徹底的に「今日のローマとしてよりは寧ろ昔のローマとして名高き」と譯してしまふがよろしい。to recall は to call back to mind である、「思ひ起す」が適當。the known world は the then known world である、即「當時知られたる世界」であるから譯は「當時の世界」が當る。

【譯】 吾々はイタリーの首府ローマ——今日のローマとしてよりは昔のローマとして名高い——を一見せずその國を去るには忍びぬ。市中到る處吾等は、それが當時の殆ど全世界を統治したローマ帝國の中心たりし時の榮譽と勢力とを想ひ起すのである。

例文 B.

The idle man does not know what it is to enjoy rest, for he has not earned it. Hard

work, moreover, tends not only to give us rest for the body, but, what is even more important, peace to the mind. If we have done our best to do, and to be, we can rest in peace.

【註】 此の文は what の色々の用途を説くに持つて來いの問題である、まづ what it is to enjoy rest. (休息を味ふと云ふ事の眞意) で本項に説く所謂物の實狀、實際を表はす場合の例を作つて居る。what it is. の it が次に來る to enjoy rest を代表して居るに注意せられよ、それから此處で to earn の一語が充分に了解されぬと文意が満足に解し得ぬ。earn は粒々辛苦して稼ぐである、即正當な働きをなして得る意である、故に idle man は年中 rest して居るけれども、その rest たるや正當な働の報酬として得たもので無いから、その甘味が解し得ぬと云ふのである。

次に what is even more important が所謂「挿句を導く what」の一例であつて「猶其の上に大事な事には」に相當する、下例を参考の事。His father was a man of thoughtful, intense, earnest character, as the best of our peasants are; valuing knowledge, possessing some, and, what is far better and rarer, open-minded for more. (吾國の農夫の最善なものがさうである如く、彼の父も思慮のあるしつかりした眞面目な人格の人であつて、智識を重んじ、又相當それを有し、そして又一層それよりも善く且、稀らしい事には、尙一層の智識を受け入れる度量を持つて居た。) 猶最後に If we have done our best to do, and to be, etc. とある to do 及 to be が to do good and to be good などあるものゝ略と見ればよく分る、即吾人の爲すべき事あるべき事に吾等の最善を盡さば云々に相當する。

【譯】 怠惰な者は休息を楽しく味ふと云ふ事の何たるかを知らぬ、如何となれば働いて休息を獲る事無ければなり。加之、勞役は肉體に休養を與ふるのみならず、猶必要な事は、心に安心を與へる傾きがある。吾等もし爲すべき事あるべき事に吾等の最善を盡したならば安んじて休らふ事が出来るのである。

VI 誤り易き What.

今迄説く所に依つて what は ㊦ that which (.....するもの)に相当する場合と ㊧「如何なる?」意味、所謂 dependent interrogative (疑問詞として文中に含まるゝもの)を爲す事、其の他 ㊨ 比較比例をなす句を導く場合がある事等につきて研究した、猶又 ㊩ に屬するものにも what が pronoun として獨立するものと adjectives として名詞を従へるものがある、例ば

a. By this we can see *what* a resolute mind can achieve.

固い決意は如何なる事を果すかを.....

b. By this we can see *what* great thing can be achieved by a resolute mind.

如何なる大事が遂げられ得るかを.....

a. に於ては what は獨立したる pronoun で b. に於ては adjectively に great thing を形容して居る。a では what a resolute mind と續けて考へ誤る虞れがある。what の次に pause (間) を置くべきである。以下此の邊に用意を必要とする例文を擧げて見る。

例文

It is marvellous what continuous application will effect in the commonest things.

【註】 application は to apply oneself to a matter (或事に一身を委れる) の意で勉強、勤勉の意となる、此の語が「應用」とか「申込」

とかの意の外に此の勉強の意がある事を忘れぬ事。さて此處で what continuous application. (如何なる不斷の勤勉か)と續けて見ると will effect (遂げるだらう)の目的が無くなる、それでは正しい解釋では無いことが解る、依つて此れは what が獨立して目的となり「如何なる事を」であり、continuous application が subject になつて下の様な譯文であればならぬ事が知られる。

【譯】不斷の勉強が如何なる事を成し遂ぐるかと云ふ事は實に驚嘆に値する。

問題

30. What it is that constitutes the look of a gentleman is more easily felt than described. We all know it when we see it; but we do not know how to account for it, or to explain in what it consists.

Superlative Forms of Adjectives

形容詞の最上級は屢々 even の意を含む事がある、其れは全體の文意から推して容易に氣が附く筈であるが稍もすると不徹底な譯をする事があるから用心せねばならぬ下に其の例文を擧げて置く。

例文

The longest life, the greatest industry, joined to the most powerful memory, would not suffice to make us profit from a hundredth part of the world of books before us.

【註】 —to suffice は sufficient の基、「充たす」意である、此處で it would not suffice = is not sufficient と思へばよろしい。to profit

from は to make use of で「……より利する」即「……を読んで利益を得る」意である。before us は「吾人の前にある」意から “we can have” (吾人の手に入る)意に解すればよい。

【譯】 最長の壽、最大の勤勉、加之、最強の記憶力を以てしても吾人の前にある書物の世界の百分の一をも読んで利するに充分では無い。

問題

31. The least movement in his sleep, and he must have rolled over and been dashed to pieces on the rock below.

極限を表はす Expression

形容詞の最上級を以て表はす所の意味、即「最も……である」心を色々の變つた形式で發表される。其れ等を此處に集める事にする。

I. 比較級の打消

「……なる事……に若くものなし」「……ほど……なるものなし」の意が adjective の comparative degree を打消した形式で表はされる。

Nothing is more detestable than the man who courts popularity.

人気を求むる人ほど厭はしき者はなし。

例文 A.

Nothing is more characteristic of the English, or more unlike the French than the courage to

go and settle in some place where they know nobody and with which they have no previous associations.

【註】 此の文は形容詞の最上級を用ひて表はせば It is most characteristic of the English people and most unlike the French to have the courage etc. となる。characteristic of で「何々の特性を發揮せるもの」の意。character から characteristics (特性)が作られる。本文ではそれが形容詞になつた場合である。

association は society (交り、社會)と親類の語で二つとも「相結ぶ」が元の心。此處では「關係」とか「縁」とか云つたものに當る。

此の文は英國人の特性が最も非佛國的である事をうまく云ひまわしたものである。

【譯】 誰も知つた人の居ぬ所、それまで何等關係の無かつた土地へ押しかけて移住する勇氣は最も英國人の特性であつて又最も佛國人らしからぬものである。

例文 B.

Excellence in art, as in everything else, can only be achieved by dint of painstaking labour. There is nothing less accidental than the painting of a fine picture or the chiselling of a noble statue.

【註】 by dint of は by means of の強い發表で He succeeded by dint of perseverance. 彼は忍耐すくて成功した。など云ふ。painstaking は to take pains (苦勞する) から作る形容詞で pains は複數形で用ふると「苦心、努力」の意となるから painstaking となるのである。labour は「働き、努力」である「勞働」と譯しては不可である。accidental は「偶然的の」で「まぐれあたりの」と譯してもよい。There is nothing less accidental は「……よりまぐれ當りで無

いものは無い」となる、即繪畫彫刻の業たるや最も必然的のものであつて、うまく當つて名作が出来るなんて事は決して無い。と云ふ文意である。

【譯】優秀なる藝術は(何事でもそうで無いものは無いが)苦しい努力の力に依つてのみ大成される。立派な繪畫の成作、貴い立像の彫刻ほど偶然の出来榮えの望み得ぬものは他に無い。

問 題

32. There is no character more contemptible than a man that is a fortune-hunter; and I can see no reason why fortune-hunting women should not be contemptible too.

II. “If there ever is ……” の形式

He was a scoundrel, if there was one. 悪黨と云つたら實に彼奴が事だ。

此れは「世に……なるものありとせば、そは……なり」と云つた口調で特に或る事柄を取り立てゝ云ふ形である。無論それが「最も……である」意を表はさうとするのである。例へば

例 文 C.

If there is one virtue that should be cultivated more than another by him who would succeed in life it is punctuality; if there is one error that should be avoided, it is being behind time.

【註】 *by him who……* を *by a man who……* と解する事。 *He who……* は *One (or a man) who……* の古い形である。 *who would* の *would* は *wishes* と見るべし。

punctuality は “punct”=point から作る、point of time を誤らぬ事である、即「時間の嚴守」を意味する、その反對が即 “to be behind time” である。 *to cultivate* は「耕作する」から「修める」「修養する」となる。 *to cultivate a good habit.* (よい習慣を作る)、 *to cultivate friendship* (友情を温める)等の用法が本文に適ふ。

【譯】此の世で成功せむとする人が何を措いても修めなければならぬ徳がもしありとせば、そは几帳面と云ふ事だ。もし避くべき缺點ありとせば、遅延と云ふ罪だ。

動詞の自動と他動

動詞の自、他の別は絶対に存在するので無く、自動詞でも時として他動詞として用ひられ又其反對の場合も多々ある。其れ等を簡短に定義して見ると、

他動詞が自動詞的に用ひらるゝ場合。

a. 動詞が一般的意味に用ひらるゝ時。 *Do you study hard?* とか *The knife does not cut well.* とか目的が一般的なるために特に擧ぐるの要なきために省略さるゝのである。

b. 他動詞が受身的意味で用ひらるゝ時。 *The army numbered a million.* (……と數へらる)。 *His life reads like a fiction.* (彼の一生は讀むと小説の様な氣がする)の如き類である。

c. 他動詞の active progressive form が passive form に代用さるゝ時。 *The house is building.* が *is*

being built の代りをつとめ、*Guns were firing.* が *were being fired* に代るの類である。

d. 他動詞が reflexive sense で用ひらるゝ時、例ば *I took the first chance that offered.* と云へば *that offered itself* の意で「私の前に己れを提供した(即、現れた)最初の機会を捉えた」意になる。

自動詞が他動詞的に用ひらるゝ場合。

e. Cognate object (動詞と同根、同意の名詞) を取る時。 *He lived a happy life.* の如き云ひ方で。猶又此の cognate object が省略されてそれに附随する語が object の如く位置する事がある。 *On seeing me she smiled a welcome. (= a smile of welcome).* *They laughed their loudest (laugh).* の如きがその例である。

f. 自動詞が使役の意味で他動詞的に用ひらるゝ時。 *I stood the candle at the corner of the table.* (立てた)。 *The policeman walked the man off.* (引つ立てた、歩ませた)の類。

さて以上の如き文典上の智識が譯文の上で入用になる問題を漁つて見る。

a. 属する問題

例文 A.

Time is the measure of life on earth. Every moment that flies over our heads *takes from* the future and *gives to* the irrevocable past, shortening

by so much the measure of our days, abridging by so much the means of usefulness committed to our hands.

【註】先づ主要な點は take と give との此處での働きてある。此の二語は他動詞として最も普通のものであるが、其れが一般的意義に用ひらるゝ結果其れが preposition と合して全く新しい意味を表はす様になるのである。此の最も簡明な例が to send for の如きである。Send (送る) が *send a message* (便りを送る) の意でその目的語を略しそれに for..... (を求めて) を附けて to send for が「注文する(品物を)」、「迎へにやる(人を)」と云ふ新規の語を作るのである、此の筆法で to take from は to take something from (.....から幾分を取り去る) 意味で「減する」意となり、to add to 又は to give to が to add something to (.....に幾分を加へる) の意で to increase (増す) の意となる。即ち “take,” “give,” “add” と云ふ他動詞が一般的意味で自動詞となり此れに preposition を加へて別の他動詞と轉するのである。

{ All dealings between man and man are giving and taking.

{ 人と人との交渉は皆此れ利害の交換である。

{ Inapplicability takes from the value of the invention.

{ 應用が六ヶ敷いと云ふ點がその發明の價値を減ずる。

それで Every moment that flies over our heads takes from the future and gives to the irrevocable past. は「吾人の頭上を飛び去る刻一刻は吾人の未來を減じ取り返し難き過去を増す」意となる。其の他注意すべき語句は

shortening by so much, abridging by so much に於ける by so much で此れは「それ丈け」「一刻去れば一刻丈け」に當る、by は「丈け」を意味する前置詞である、それで shortening 以下の句は要するに前の take form, give to を繰り返し説明したものである。單語としては abridge が「簡約する」「縮める」意で「縮刷辭典」は abridged dictionary である。

commit は「委(ユヅ)れる」意、committee (委員) とか、commission が「委任」「任命」「代辨」の意、次で委託された報酬で「手数料」と

なるなぞを併せ覺えられよ。も一つ irrevocable は「revoke (call back) し難き」意で voca-, vok- 等の語幹は voice (聲) と共通のもので「呼ぶ」とか「云ふ」とか々基の意をなす、vocalist (聲樂家) 等で覺えて置くがよい。猶 days が life の意に用ひらるゝ事も見逃す可きで無い。

【譯】時は此世の生の尺度である。吾等の頭上を飛び去る刻一刻は未來を減じ、挽回し得ぬ過去を増すのであつて、一刻去れば一刻だけ吾等が生命の長さを縮め、吾等の手に委ねられた世を益する途を短くするのである。

【附】 means of usefulness とは、世のため人のために働くには「時」が無くては出来ぬから、人が五十年の生命があればその五十年は世を益する手段として神がその人に委ねたものと見るべく、依つて「時」の事を「吾等の手に委ねられた利他の資本」と云ふたのである。

例文 B.

When you are out of your country, you must abstain from such actions as will reflect on the nation.

【註】 to reflect (反射する) を自動詞に用ふると (“on” を伴ふて) 不面目、耻を reflect する意で「……の體面を汚す」「……の面にかゝる」意となる。

His misconduct reflects upon his family.

彼の不行跡は彼の家の名折れになる。

もし文の subject が人間だと「誹謗する」意となる。

I do not, for a moment, wish to reflect upon him, but really he has not treated me fairly. 私は彼の誹謗をする積りでは決して無いが、併し實際彼の僕に對する處置は公平を缺いて居た。

to abstain from は「斷じてせぬ、……を斷つ」の意「禁酒する」は to abstain from wine と云ふ。

【譯】君もし外國へ行く事あらば國家の體面を損する様な行爲は斷じてせぬ様にせねばならぬ。

b に屬する問題

例文 A.

To tell a plain woman that beauty counts for nothing is like explaining to a starving family that the lives of the rich are wretched.

【註】此の問題の中心をなして居るものは counts for nothing の句である、て to count は元來勘定する意の他動詞であるが其れが數へられるてふ自動詞的の意で數に入る、大事なものとなる、意となる、例は

Each mistake counts for one.

誤りは各々一つに數へる。

College education is not absolutely necessary for a man to be a gentleman, it is character that counts. 大學教育は紳士になるに絶對的必要では無い。大事なのは品性である。

それで counts for nothing は amounts to nothing と同意で「何の役にも立たぬ」「一文の價値も無い」意と知るべし。

plain は「簡短な」意で、従つて ①「明瞭な、明白な」場合と ②「粗末な」「質素な」「美しからぬ」場合とが出来る、“a plain fact” は「明白な事實」であつて、“a plain living” が「質素な生活」、“a plain woman” が「御粗末な縹緞(キラヤリ)の女」となるのだ、語義の轉化も根本からたどつて求めるとやさしく全體を掴むことが出来る。此の plain (明白) から explain (to make out plain) 「説明する」が出て來るのである事も plain fact である。the rich は the rich people で此れは the+adjective の用法の例。それから

wretched は unhappy の意。それで全體の譯は

【譯】不器量な女に美貌は一文の價値も無いと云ふて聞かせるのは、食ふや食はずで居る家族に、富める者の生涯は不幸なりと説く様なものである。

例文 B.

The winners in the world's race are these who have learned to conserve their energy, to make ^{every} ~~very~~ motion count, to walk straight and think straight.

【註】 此れも to count の應用文である。文全體の上から見た注意點は The winners in the world's race are these who..... の語氣にある。此れは邦語の「.....する者こそ.....なれ」に當るもので英語ではそれがホツクリ返しになつて來るのだ、此れに就ては項を別にして説くつもりだが、上記の文も「社會の競争場裡の優者たらむには.....せる者ならざる可らず」即「.....を習ひ得たる者こそ勝利者となるのだ」と云ふ意を表はさうと云ふのであつて、たゞ單に「勝利者は此れ々々の事を學んだものだ」と云ふだけでは無い。それ故譯出するときもその心組で筆取るがよらしい。

to conserve は to preserve の兄弟語であつて、reserve も同様皆此れ等は -serve=keep が基である、conserve は「保守、保存」の意で to conserve one's energy は「自己の精力を蓄へる、無駄にせぬ」意である、conservative は「保守主義の」の意になるのも併せ覚えられよ。

to walk straight は無論形容的の語なので「仕事に道草を喰はぬ」「直往邁進する」意である、即 to think に對して「實行」が to walk で表はされるので to walk straight, to think straight で「思ふ事、爲す事皆一直線にせよ」と云つた様な譯がよい。

【譯】 世の競争場裡の優者たらむ者は自己の精力を保全し、一舉一動をして意義あらしめ、考へるにも行ふにも直往邁進的なるべきを體得した者でなければならぬ。

d に屬する問題

例文

The first thing that drew his attention was a heap of coals shot out of carts on the pavement.

He offered himself to shovel or wheel them into the place where they were to be laid, and was employed. He received a few pence for the labour. He then looked out for the next thing that might happen to offer, and went through a series of beggarly employments.

【註】 He offered himself to..... (彼は.....しやうと、即させてくれと己れを提供した) と next thing that might happen to offer とを比較せられよ、後の場合は to offer itself の意で、「現れて來る」意になるのである、「仕事」を心あるもの、如くに見做して取扱つた云ひ方である。to happen to~ は「偶然.....する」意。

shot out of carts とは「荷車からザーツとさらへ出した(石炭)」なり。wheel them into the place は「ある場所へ手車で運ぶ」意、wheel (車) を動詞に用ひた例である。

and was employed 「そして採用された」

went through 「.....を通して行く」とは「.....をやり通す、やつつける」意。

a series of beggarly employments 「乞食の様な下等な仕事を次から次へと」 a series of は a number of と云つたと同様に「幾つものつながり」である。

【譯】 まづ彼の注意を引いたものは荷馬車から敷石の上に打ちあけた石炭の山であつた、彼はそれを置くべき場所にシャベルで掬つたり小車で運ばして呉れと申出てそれに使はれた、そしてその勞力に對して數ペンスの金をもらつた。次で何か偶然目につく仕事を探した、かくして下等な仕事を次から次へとやつてのけた。

問題

33. The things which really make life worth living are very common, and within the reach of all. How often we

hear the poor berating the rich whom they envy, bemoaning the cruel fate that has kept about everything worth while away from them, but when we stop to take stock of life in the things that are really worth while, that count for most, we are pretty nearly all on equal footing.

34. Begging is after all harder than working, and taking it altogether, does not pay so well. Everyman, moreover, should stand on his own feet. A ploughman on his feet, says Franklin, is higher than a gentleman on his knees.

Transitives mistaken for intransitives

邦語の自動詞に對する英語が無くてその transitive counterpart (それに對する他動詞) のみがあるものがある、殊に感情の動詞に於て見る所で、例を挙げると

[邦語(自動)]	[英話(他動)]
驚く	to surprise (驚かす)
失望する	to disappoint (失望さす)
落膽する	to discourage (落膽さす)
喜ぶ	to delight (喜ばす)
怒る	(to anger (怒らす) to offend (")
etc.	etc.

それでかう云ふ causative verbs (使役的動詞) が用ひらるゝ場合うつかりして自動詞的に意味を取ると非常な誤をする事がある、此の事は和文英譯に於て殊に

注意すべきであるが、英文和譯に際しても相當氣を附けねばならぬ。

例文

Beginning at the very foot of the hill, and working slowly to the top, seems a very discouraging process.

【註】 discouraging は「失望さす様な」の意で「面白くない」「張り合ひの無い」等が適譯である。process は proceed (進む) する順序、道程を云ふ、本文では「仕事」位に譯してよろしい。to work to the top に於ける work は努力して進む、力行する意に解すべし。

【譯】 山の麓から始めて頂上まで徐々に苦勞して上るのは甚だ骨折甲斐の無い仕事の様感じられるものだ。

Complement

Complement と云ふものに就て文典の講議をよく聞かされる。曰く此れは動詞の不完全なる叙述を補ふて、主語なり目的語なりを説明するものである。曰く Complement を取る動詞の代表的のものは Be, Become; Make である。I am, He became, I made him, 等は各々完全なる文意を成さぬ、此れ等は夫れ々々 I am a student. He became mad. I made him happy. 等の語を補ふて始めて完全なる文意を有する事になる。曰くかゝる不完全なる動詞は他に多々ある、が其れ等は皆何等か特別の意味を帶して上の be, become, make

等に代るものである。と。それで此の臨時不完全な動詞となつて Be や Become に代る動詞のある事が英文の特色をなすもので、例ば He was born a poet. と云ふ、此れは He was born. + He was a poet then. を一文にした様なもので「彼は生れながらにして詩人であつた」意となるし、又 He died a beggar. と云へば He was a beggar when he died. の意をもつと直感的に「彼は乞食で死んだ」とでも云つた様な云ひ振りをしたものである。此の語法をよく呑み込んで置かぬと此の種の文にぶつかつて文の意味、心持を味ふ事が出来ぬ。以下例を擧げて其の練習に資する。

例文 A.

It is owing to the absense of character that great geniuses have been known to die in poor-houses. It is on account of their character that men with little talent have died millionaires—and most respected ones, too.

【註】 to die millionaires が上に説いた complement の例である、即「百萬長者となつて死ぬ」意の煎じつめた云ひ方である。それからこの文にはその他に注意すべき点が多い。第一 absence of character の云ひ方である、「無人格」の意だが、absence のこんな用法は英語としてごく普通で、日本人としては變に思はれるものである absence of mind (ボンナリ、放心) なども同様である。第二に have been known to die の譯法で、此れは所謂「經驗」を表はす perfect tense であるがそれで「……した例(タメシ)がある」と譯すべき所である、此の英文、和文を對照して to have done の用途を悟られ度い。最後に

and most respected ones, too. とあるのは上の millionaires の説明で「而かも最も崇敬されたる長者として死んだ」意になるのだ。

【譯】 偉大なる天才が貧民院で世を終つた例のあるのは彼等に人格の無かつたが爲である。一方又才能も少い人が百萬長者、而も世に崇敬されたる長者となつて死んだ例のあるのは彼等に人格のあつた爲である。

例文 B.

Man would have continued a savage, but for the results of the labours of those who preceded him. They discovered art and science and we follow them heir to the useful effects of their labours.

【註】 to be a savage (野蠻人である)を繼續状態に表すために to continue a savage と云ふたので、此處では continue が be に代つて incomplete verb となつたのである。those who preceded him = his predecessors である。to precede は「或物に先立つ」であつて to follow の反、to proceed はただ「進む」意で他との比較で無い、其處が precede と proceed との差異である。heir は「世繼」「後繼者」で此處では we follow them の follow の complement である即「彼等の努力の結果を受けて彼等に從ふ」意だ follow them の代りに become は are を入れ換えて見れば heir の用ひ方が分明する。

【譯】 人は先代の人々の努力の賜無くば何時までも野蠻人で居たであらう。即前人が藝術や科學を發見し、吾人は彼等努力の有益なる結晶を受け繼いで彼等に從ふのである。

【注意】 Incomplete Verbs は絶対に complement を從へずば用を爲さぬものと思ふ可らず、不完全なる動詞の代表たる“be”にありても God is. {神は在(イマシマ)す}の如き文にありては完全なる動詞である。下例の如きは be 動詞が complement を取る事なく用ひられたる文例なり。

例文 C.

We must ourselves be and do, and not rest satisfied merely with reading and meditating over what other men have been and done.

【註】 We must ourselves *be and do* は *be* と *do* とが一般的意義に用ひたので *be and do something* とあるものの如く考へればよろしい、即「吾人は自ら何等か獨特の人間であり又何等か爲す所あらねばならぬ」意である、*what (=that which) other men have been and done*. にありては *what* が *have been* の complement であり又 *have done* の目的であるのだ。

【譯】 吾人は自ら何者かで在り何事かを成さねばならぬ、唯單に他人がありし事爲せし事を讀み考へてのみ満足すべきに非ざるなり。

例文 D.

It is a prevalent idea among men who are not very prosperous in their occupation that any other business is better than the one in which they are engaged. Those who are ever ready to act on this idea, and make frequent changes, generally remain poor through life.

【註】 complement を用ひた文句は意味が解つても譯すのに工夫が要る。此處の *remain poor through life*. でもそうである。此れを *are poor through life*. としたのと意味は變らないが「貧乏したつきり一向動かね」心持が *remain* に味はれる、だから譯すにも「一生貧乏のし通してある」位の言葉は使はねばならぬ。それから *to be ever ready to.....* は「いつ何時でも.....ちやんと待ち構へて居る」意から、轉じ

てそう云ふ意志は無くても「始終.....しがちである」場合に用ふる事、即 *to be apt to do*. の極端な云ひ方になる事を注意すべし。猶又 *to act on this idea* が「此の考へに基いて行動する」意で、*Alcohol acts on the brain*. (アルコールは腦に作用する) 様な場合と比較對照して見るがよろしい。

【譯】 自分の職業にあまり成功せぬ人には何でも他の仕事が自分の今從事して居るものより善いと云ふ考へが普通あるものである。で常にかう云ふ考へに左右されがちで屢々職業の變更をやる人は概して一生貧乏のし通して終るものだ。

問題

35. No one ever expected he would die a rich man, as he always had the reputation of spending much more than his income allowed him to do.

Present Perfect Tense

Present Perfect Tense は現在迄に完了せる行爲を表はすと云ふのがその定義であるがそれに就て知つて置くべきは、「...してしまつた」と云ふ事は「今はも早や無し」と云ふ事を意味する事である。此れは一寸考へると「present perfect は現在に關係がある」と云ふ文典上の教へを裏切つた様な云ひ方であるが「現在に關係がある」と云ふのは「その行爲の結果影響が現在に残つて居る」と云ふ事で「今猶それをやりつゝある」意味では無い。(但し此れは“to have been doing”と云ふ様な進行形及び元來繼續を表はす動詞、例は *I have lived*. と云ふ様な種類は別である)。例は

I have read it. と云へば讀んで今其の内容は知つて居る、が讀む事は終つたのである。友人が悪ふざけをやつて騒いで居る際に “Have done!” と云へば「もう止せ」と云ふ意である。又 I have done with him for the future. は「今後彼には用が無い、絶交だ」の意である。此の「……してしまふ」「……したことがある」意味が文の中にあつて中々利くから perfect form があつたら等閑に附せず充分其の意味を考へるが肝要である。

例文 A.

Poverty is a great evil in any state of life; but poverty is never felt so severely as by those who have, to use a common phrase, seen better days.

【註】此の問題での注意點は to use a common phrase と云ふ挿句で have seen better days が割けて居る事丈けだ、to use a common phrase. は「ありふれた文句を借りて云へば」とことわつたので別項に説く文の主要部に挿む合の手である。それで to have seen better days が一文の要所を成してゐるので、初めに説いた様に have seen は取りもなほさず「経験した」である。「今は落ちぶれたが昔はこう云ふ日を見た事がある」意だ。

better days は happier times or prosperous times (盛んな時代、多幸なりし時)である。days が times 又 age を意味する事を知つて置かれよ。

cf. He has already seen his best days.

彼の得意時代は既に去つた。

【譯】窮乏は如何様な身の上にも非常な災であるが、貧の痛

切に感ぜらるゝ事はよく世間で云ふ榮華の夢を見た人ほど切なるものはあるまい。

例文 B.

Coleridge has truly observed, that “if the idle are described as killing time, the methodical man may be justly said to call it into life and moral being. He organizes the hours and gives them a soul and by that, the very essence of which is to fleet and to have been, he communicates an imperishable and spiritual nature.

【註】此れは time の善用に關する Coleridge の言葉で文意が一寸六ヶ敷いが本項の perfect の適例と思ふから擧げて置く。methodical は meth'od (方策)のチャンと立つてゐる、「秩序ある、兀帳面な」意味である、怠情な無方針な人間は「時を死なす(浪費する)」と云へば、秩序ある人は「時を生かす」(call it into life) と云ふべく、時を生かして用ひれば time は一つの moral being (生きもの)となる、と云ふのだ、moral は「道德の、徳義心ある」意味で moral being は「是非善惡の差別を知る者」の意となる。此れは時を生かすと云ふたから續いて用ひた語である。He organizes 以下はそれの説明で to organize は organ (機能)から作る、或材料を纏めて一つの働きを成す組織を造り上げるを云ふので「組織する、組立てる」等に當る、それで methodical man は「時間」を組織的に案配して決して無駄にせず、一つの精神をそれに與へる、即一日なら一日、一月なら一月だけに纏つた或る事業を爲す機關とする、そして此の組立つた「時」に依つて(何等か立派な事業を爲して不滅の高尙な(精神的の)性格を残し傳へるのである)。と云ふのが大意だ。それで the very essence of which is to fleet and to have been. が問題になる句である、which は前の that を受けるので、その that は又前の organize した hours を指すのである。

essence は「精髓」である「本質」である、「時」の本質は「經つて行く」「矢の如く足の早い」事である、だから to fleet (飛び去る) と云ひ to have been と云ふたので、さてこそ to have been が本項に「説く」「去つて早や無し」の意である。「時」の本質は「足の早い事、無くなつてしまふ (to have been) 事」である、その時を捉へて立派な事業を成す。と云ふのが文の大意である。

【譯】 コレリツヂ は下の様に云つて居るが誠に至言である。「もしなまけ者が「時」を殺すと云ふべくんば、秩序ある賢者は正に「時」を生かして理解ある生き者とする」と云ふてよい。後者は即時間を有機的のものとして之れに靈を賦與する、而して此の、本來足の速い失せてしまふ性質の「時」を驅使して不滅の精神的性格を後世に傳へるのである」と。

【附】 此の問題中に、も一つ大切な點がある、其れは譯文にも現はしてある通り truly と justly との働きである、to say truly は「ほんとうにそう云つた、偽ぢや無い」意味に非ず「其の云ふ事は誠である、もつとも千萬な事である」意である。justly も同様に「そう呼ぶが正しい」意で此れ等 adverb は to say, to call 等の批判的の言葉である。You may well say so. 「そう云はるゝのも御尤もです」等も同一筆法である。下例を参考さるべし。

He ventured to approach near enough to read the title, holding, rightly enough, that a book is not personal property, and that his act involved no violation of privacy. (彼は一尤も至極の事だが一書物は一箇人の私有物では無いから、人の祕事に立入るわけでも無い、と考へて、思ひ切つてその書名を讀み得る程の距離まで近寄つた。)

問題

36. Thinking, not growth, makes manhood. There are some, who, though they have done growing, are still only children.

37. "The right thing in the right place" is a golden rule; and a little trouble in putting things away when you have done with them, will save a great deal of time and labour, when you want them again.

Infinitives

I. 主語としての Infinitives

Noun-infinitive を文の subject となすに際しては先づ形式的に It を文の頭に置いて眞の subject は後尾に置くこと *It is wrong to tell a lie.* の形式で誰しも知る、ところが實際にあつて見ると必しも然らずで *To see is to believe.* (見るは即信する事になる) の流儀で Infinitive をそのまゝ頭に据えた文が多い。のみならず此れに色々の modifiers が附いて來るので一寸正確に讀み取る事が六ヶ敷い場合がある。此處では其れ等の練習をする。但し此の事は "That" clause にも同じく云はるゝ事で *It is right that you should do so.* が正規の形で、*That you should do so is but right.* が元來のまゝの形である。

例文 A.

That the Allies will win is certain. That for us to win, will require a minimum period of three years is, I think, probable. It might last longer; it might end sooner; it can end only in one way.

【註】 此の文は徹頭徹尾 anticipative "it" を嫌つた文である、試みに所謂 "it" の "that," "it" の "to" の流儀で書き直して見ると次

の様な文になる、*It is certain that the Allies will win. It is probable, I think, that it will require a minimum period of three years for us to win.* どうも *it* の *that* も一つ位なら結構だが、こう續いては困る、おまけに第二文などではそれが二重になつて居るのだ。まづ *for us to win* will require a minimum period of three years. だけで切り取つて「と云ふその事が」とそれ丈けを “*that*” でくゝつて *is probable.* の *subject* に据えて考へるのである。

“*For us*” は *to win* の意味の上からの *subject* で「吾人の勝つ事」である。*minimum* は「最少限度」であつて *maximum* (最大限) が此れに對する。

it can end only in one way とは「吾軍の勝つと云ふ一途の終結あり得べきのみ」の意だ。

【譯】 聯合國軍が勝つは必然である。吾等が勝つには最も短くて三ヶ年を要する事は當らずとも遠くはあるまい。戦はもつと永く續くやも知れぬ、又もつと早く終るかも知れぬ。が其の終り方はたゞ一あるのみである。

例文 B.

We do not live in a world in which a man can afford to be discouraged by trifles. There are real difficulties enough, with which to fight is to live, and which to conquer is to live nobly.

【註】 此の文後半の *with which* 以下を熟讀して *to fight is to live; to conquer is to live nobly.* と二つの *infinitives* が各々 *subject* をなして居る事を考へるべし、此の文の注意點は「Relative pronoun が infinitive や前置詞の object をなす」と云ふ事である、*to fight with which. to conquer which.* とそれぞれ *difficulties* を *which* が受けて *infinitive* の *object* になるのである。こう云ふ場合の *Relative pronoun* の用法をよく會得され度い。語句に就ては、

to afford は「.....するの餘裕を見出す」の意で俗に「やり切れる、やり切れぬ」と云ふ、その *manage* する意が *afford* である、例 *He cannot afford to send his boy to school.* (彼は子供をも學校へ通はし切れぬ身の上だ)。*to be discouraged* は「失望する」と自動詞的に譯す。

【譯】 吾人の住む世は些細な事に失望落膽して居られる様な世の中で無い。眞の困難が随分ある、此れと戦ふのが眞に生くる事であり、此れに打勝つのが尊く生くる事である。

例文 C.

With some exceptions, the more briefly a thought is expressed the more clearly is it conveyed. Every word in a sentence which does not do good does harm. It is therefore a rule in composition never to use a superfluous phrase.

【註】 ありふれた形式ながら *Infinitive* の打消はその前に *negative word* を置いて *not to tell a lie* (嘘吐かぬ事) と云ふ形にする。その一例を茲に取つたのである。此の問題には色々の代表形式が集つて居るまづ “*the more..... the more* (すればする程)” の形、それから *adjective clause* を挿んで *predicate verb* の *subject* との呼應、即 *Every word in a sentence (which does not do good) does harm.* の句では *do, does* が幾つも並ぶから一寸間誤つかされる、*to do good* (益がある)、*to do harm* (害になる)、てふ句をよく承知して居らぬと「文の中で無益の語は必ず有害になる」と思ひ切つて譯し得ぬ。

with some exceptions の一句の如き「言葉の使ひ振り」をよく考へてかゝる必要がある、此れは邦語なら「二三の例外を除きて」とせればならぬ所である。

to convey a meaning or thought の *convey* (運ぶ) が「人に傳へる」意となるに注意。

【譯】二三の例外を除きて、思想が簡単に發表さるればさる程明瞭に人に傳へられる。文中にありて無益の語は皆有害となる。されば餘分な語句を決して用ひぬと云ふ事は作文上の一法則である。

問題

38. To be thrown overboard is the best way of learning how to swim, and being pitched out into life is the best way of learning how to live.

II. Absolute phrase を作る Infinitive

Infinitive は文の頭又は他の部分に置かれて所謂 absolute phrase を作る。To tell you the truth, I do not trust him. の如き常に見る所の筆法である。下に此の種に屬して特に考究を要する一文を研究して見る。

例文

As a matter of fact, all great discoverers worthy of the name have at one time or another been regarded as dreamers, not to say mad.

【註】As a matter of fact は in fact と同様「實際の事だが」、「實のところ」等が當る。worthy of the name の the name は the name of the discoverer である事、即「其の名に恥ぢぬ」と譯して當る。at one time or another は「いつか一度は」の意、その「何時かしら」が one.....or another で表はされるのだ。さて最後の not to say mad だが此れは「.....とは云はぬまでも」に當る、即「時には mad と云はれた者もあるが、それは極端の例で、そうまで云はずとも dreamer とは必ず見做された」意を表はすのである。依つて not to

say ~ は「.....と云ひ度い所だがまあそうは云はずとしても」と云つた様な言葉の遠慮を示さうと云ふ句と知られる、此れに反して to say nothing of ~ てふ句は「.....は云はずもかな」「.....は無論として」と云ふ様な強い言葉である事を斷つて置く。

a. He is extremely frugal, not to say stingy.

彼は吝嗇とまで云はずとも兎に角極端に儉約だ。(彼は非常な儉約家で吝嗇と云つてもよい位だ)

b. He knows French and German, to say nothing of English.

彼は英語は云はずもかな、佛語獨語も知つて居る、(*もし He does not know English to say nothing of German. とすれば、獨語は云はずもかな英語も知らぬ。と兩方の否定になる)。

【譯】事實上、總ての其の名に恥ぢぬ大発見家はいつか一度は狂人と迄で無くとも夢想家と見なされたものだ。

III. 未遂、不實行を意味する Perfect Infinitive

Infinitive の perfect form は本文の predicate に對して prior action を表はすが本來の役目である。

{ He is suspected to have set fire to his own house.

{ 彼は自分の家に放火した嫌疑がある。

{ He seemed to have long been aware of the fact.

{ (=It seemed that he had long been aware of the fact)

{ 彼はその事はとくの昔に知つて居たらしかつた。

所が此の perfect infinitive が過去に爲すべくして爲さざりし行爲を表はす場合がある。それを少し研究して見やう。

(1) “be+to do” と “be+to have done.”

“be+to do” の形は「命令的、天命的豫定行爲」を

示すものである。例ば *My father goes to Osaka and I am to accompany him.* (父は大阪へ参ります、それで私も一所に行くのだそうです)の如きである。其れに對して“be+to have done”となると過去のその豫定が何かの妨げで果さなかつたものを表はすのである。例へば

I was to have gone to war, and God knows what might have happened to me then.

私は戦争に行く筈だつたのだ。もしそうしたら私の身に何事が起つたか知れたものでは無かつたが。

(2) “ought to do” と “ought to have done.”

“ought to do” は「爲すべきだ」と云ふ義務行爲を表はすのだがそれが“ought to have done”となると「爲すべきであつた(せぬのは悪かつた)」意となる。“should have done”の形も同様である。次文を比較せよ。

You ought to be careful of your conduct.

You ought to have asked your father's permission.

(君は父君の許可を乞ふべきであつたに。)

(3) “I should like to have done”の形式

“I should like to do……”は“*I like to do*”の緩和した云ひ方で「もし願えらしたならば」と云ふ様な條件付きの意味で丁寧な要求の形として屢、用ひられる。(I should very much like to go there の如く)。

それで、もし此處に perfect infinitive を用ひるとなると「過去になし得ざりしを憾む」意となるのである。

I should like to have seen the performance.

その演技を見たかつた(が残念な事をした)。

猶此れに似而非なる construction が一つある。それは *I should like to have done.* でなくて *I shou'd have liked to do.* と云ふ形である、此れは過去に於ける自己の切なる希望(實現されざりし)を述ぶるのである。

How I should have liked to say a word of comfort to him!

私は一言慰めの言葉を如何にもして彼に云ふてやり度かつた。

(4) “wanted to have done.” = “should have liked to do.” 「……し度かつた(が出来なかつた)」

How I wanted to have made one of the party!

如何に私は其の仲間入りがし度かつた事だつたらう。

例文 A.

Everything that has occurred in the fields of battle is to be buried in oblivion.

【註】此れは“be+to do”の例である、oblivion (は being forgotten の意で「忘却、埋滅」に當る、to bury in oblivion は「忘却する、忘れてしまふ」でその自動形が to fall into oblivion (忘られる、うづもれる)である。依つて is to be buried in oblivion は「忘れてしまふ事になつて居る」から「遂には忘らるゝ運命にある」意と知らるゝ。

【譯】 戦場に起つた事は皆遂に忘却されてしまふ運命にある。

例文 B.

Q We do those things which we ought not to do, and we leave undone those things which we ought to have done.

【註】 此の文では to leave undone の一句に注意を要す。「……せずに置く」は單に「……せぬ」とは違ふのでそれか此の句の表はす役目である。下の例文参考。

We left no stone unturned in trying to discover the thing. 其れを捜し出さうと隅なく隅から隅まで捜索した。to leave no stone unturned は「ヒツクリ返して見ぬ石は一つも無い」で「百方手を盡して求むる」意、「ought to have done」は「爲す可かりし事」と譯すべし。

【譯】 人は爲す可からざる事を爲し、爲す可かりし事を爲さずに捨て置く事がある。

例文 C.

His reason, powerful as it was, was reduced to be the slave of feelings which it should have controlled.

【註】 powerful as it was は “as” の項で説明してある as=though の一例である。to reduce は to produce の反て「還元する」が原意「満足なものを毀して元の原質にする」心から「破壊する、滅す、……にしてしまふ」意となる、to be reduced to ashes (灰燼に歸す)、to be reduced to penury (もとの一文無しになり下る)、to be reduced to a skeleton (骨と皮に瘦せほそる)等用ひらる。to be the slave of が “to be master of” の丁度裏返しなるを見よ。

One should strive to be master of one's passions (=not to be the slave of one's passions)

人は性慾の奴隷にならぬ様に努むべきだ。

それで to be master of one's passions が to control one's passions と等しいのだ。

【譯】 彼の理性は一時強いものであつたが、遂に衰へて抑制すべかりし感情の奴隷となつてしまつた。

Participial Phrase の用途

Participial Phrase の元來の役目は attendant circumstance を表はすにある。即或る主要事項に附帶する事情、事件等を附屬的に述べるのである。

In a few minutes nothing was left of them and over five thousand houses were burnt to the ground, the fire lasting from 8 a. m. to 3.30 p. m.

數分ならずして彼等の何物も残らずなつた、そして五千戸以上の家が焼き落された。此の火事は午前八時から午後三時半まで續いたのだ。

かく Participial Phrase は譯す時に切り離して別の句として表はした方が無理が無い場合が多い。それで此の分詞に初まる句の表はす意味を調べて見ると次の様になる。

1. Simultaneous action (同時の行爲)を表はす。

He went away muttering something to himself.

彼は口の内で何かぶつぶつ云ひながら立去つた。

2. Previous action (先に起つた行爲)を表はす。

Writing something on a slip of paper he passed it to me.

紙片に何か書いて彼は私に手渡した。

3. Subsequent action (後に起る行爲)を表はす。

I ran all the way to the school, arriving there out of breath.

私は學校へ行く途中馳け通して、息を切らして行き着いた。

4. Reason (軽い理由)を表はす。

Fearing lest I should be thought too inquisitive, I desisted from asking further about the matter.

私はあまりホヂクリ屋だと思はれはせぬかと思つたので、その事を猶詳しく聞く事を止めにした。上の第一、第二は誰しも知る事ながら第三に至つては一寸異様に感ずるかも知れぬ、がそう云ふ筆使ひは決して稀で無い、Participial Phrase できへあればいつも「...する所で」一點張りで譯すのは愚な次第である、各場合に應じて適當の譯を試むべきである。

例文

It was now fully nightfall, and a thick fog hung over the city, soon ending in a settled and heavy rain.

【註】 nightfall (日暮れ)で daybreak (夜明け)である東西丁度反對の語を用ふるに注意。to hang over は覆ひ被さる形を表はす。

soon ending in~ は which soon ended in~ とある様な subsequent action を表はすので、settled は腰の据つた、落ち着いた意から settled rain は長雨になる。

【譯】 今や日もトツブリ暮れて濃霧が全市を覆ひ包んだ。それもやがて落ち附いた本降りとなつた。

問題

39. I begged the landlord to be introduced to a stranger of so much charity as he described. With this he complied, showing in a gentleman, a little over forty, dressed in black.

There is no —ing

There is no の次に gerund を置く形は不可能な事を云ひ表はすによく用ひられる、丁度邦語の「.....されたものぢや無い」に當る、例ば There is no going out in this heavy rain. (此の大雨に出かけられたもんぢや無い)なぞがそれである、但し此れは必しも gerund に限るのでは無いので元來が abstract noun を no で打消せばそう云つた様な感じを表すのである。下文を参照されよ。

If there is no respect for truth, there is no safe society between man and man.

誠實が重んぜられ無くなると人間同志に安らかな交りと云ふものが出来なくなる。

例文

The measures which the employers took so enraged the workmen that there was no restraining them.

【註】measures は方策、對策等である、to take measures の句で用ひられる、to enrage は赫怒せしむる、to restrain は re(back)+strain で「引つ張り戻す」の義「制する」に當る。

【譯】雇主等が取つた處置は勞働者を激怒せしめて、もはやとても彼等を制する事が出来なくなつた。

問題

40. She thought her family should all retire to the country for the summer, that the children might have the benefit of the mountain air, for there was no living-in the city this sultry season.

隠れたる Verbal Noun

例へば茲に Each difficulty overcome makes a stepping stone for the man to rise to greatness. と云ふ文を考へて見ると、此れは「一つの困難に打勝つ毎にそれは人の偉くなる臺石になる」意で「打勝たれたる困難」と云ふは「困難に打勝つ事」である、又は「一つの困難に打勝てば」である、それだからかゝる際の overcome といふ過去分詞は文法上 difficulty の形容詞だが意味の上から見て「隠れたる verbal noun」とも「隠れたる條件」とも云へよう。かう云ふ過去分詞の

使用が間々英文解釋上の difficulty を與へるものである。

例文 A.

A few books well read, and an intelligent choice of those few,—these are the fundamentals for self-education by reading.

【註】問題は a few books well read に存在する、此れを「よく讀まれたる少數の書物」と譯したら間違ひになる。そう云へば「世間で多く讀まるゝ書物」の意になつてしまふ。所が此れはそう云ふ意ぢや無いので、“well reading of a few books” 或は “to read a few books well” の意である。即 well read は意味の上から見て隠れたる verbal noun である。その他の語句で重なるものは

intelligent で此れは intellect (智) と關係があるもので「賢明な」意である、intellect から直接作る intellectual (智的の) と混ぜぬが肝要だ。

intel'ligent writer. 賢明な作家。

intellec'tual work. 智的の仕事、頭腦を使ふ仕事。

fundamen'tal は to found (基礎を置く) から作る。foundation が「基礎」で fundamental がその形容詞「基礎的の」である、それを又そのまゝ名詞に用ひて「基をなすもの」「基礎的のもの」の意となる。

【譯】少數の書物を熟讀する事及びその少數の書物の賢明なる選擇とが讀書に依て自己を教育する根本の要訣である。

例文 B.

Among common people will be found more of hardship borne manfully, more of unvarnished truth, more of that generosity which gives what the giver needs himself, and more of a wise

estimate of life and death, than among the more prosperous.

【註】 more of hardship borne manfully (more manful bearing of hardship. の洗練した云ひ方である、即「困難の遙か男らしい忍耐」である、「男らしく忍ばれたるヨリ多くの忍耐」では一寸困る。 unvarnished は「偽り飾らざる」の意、varnish は所謂ニス、ニス、と稱する塗料である、即「塗り隠さぬ」心で unvarnished と云ふたのである。 that generosity which は such—as に當るのでその項での説明を参照せられ度い。 gives what the giver needs himself の subject は generosity なので此の句が面白くなるのである、「與へる人自身無くてならぬものを他に與へる様なそんな慈悲の心」と云ふのだ。 estimate は「打算」とか「豫算」とか云ふべき語だが此處で “estimate of life and death” を「死生觀」と譯しこなす氣轉が欲しい。

【譯】 世に時めく人よりも世間並の人の中に却て遙か優つた困難に對する男らしい忍耐、偽らざる誠、與ふる人自ら無くてならぬものを他に與ふる様な慈悲の心、賢い人生觀が見らるゝものだ。

例文 C.

The essence of patriotism lies in a willingness to sacrifice for one's country, just as true greatness finds expression, not in blessings enjoyed, but in good bestowed. Read the words inscribed on the monuments reared by loving hands to the heroes of the past; they do not speak of wealth inherited, or of honours bought, but of service done.

【註】 名詞に従つてそれを形容する Past Participles が此の文には澤山ある。 blessings enjoyed; good bestowed; wealth inherited; honours bought; service done がそれである。そして、それ等は皆意味の上からはその形容詞の方が主たる行ひを表して居ると見られる、例は blessings enjoyed は形式上からは「享樂されたる幸福」であるが眞意は「幸福を享樂すること」である。で初めから解釋をして行くと、

essence of patriotism 「愛國心の精髓」

to lie in ~ = to consist in ~. 「.....にありて存す」

「幸福は足るを知るにあり」など云ふが此の lie in ~, to consist in ~ である、譯せば Happiness lies in contentment.

willingness to sacrifice 「犠牲となるをいとほぬこと」「進んで國家に身を捧げる事」。

just as 「丁度.....のやうに」。

find expression in ~ 「.....に表れる」。(expression は「發音、表現」である。「表現を見出す」とは「どう云ふものに表れる」意。

次の not は but と呼應して「.....に非ずして.....に」となるもの、good bestowed の good は此處で名詞であつて「善事」にあたる。to do good (益をなす) など云ふのがそれで、good bestowed [與へられたる善事] とは「世に善を施すこと」なり。True greatness finds expression in bestowing good. と同じ意味になる。

inscribed on the monuments 「記念碑に刻せられたる」。

reared = erected 「建てられたる」、此の inscribed や reared は本當に形容詞として用ひた過去分詞で words (which were) inscribed; monuments (which were) reared. なのだ。

loving hands 「愛する人々(の手)」。loving は「愛らしい」で無い。-ing の形は「.....をする」意の形容詞だから「(その英雄を)愛するところの(人々)」である。

they do not speak of ~. they は words で、碑に刻した文句はこう云ふ事は物語つて居らずして云々」といはんとするものなり。speak of は「言及する」である。

wealth inherited 「相續されたる富」即英雄たちが幾萬の富を相續したといふ事などは書いて無いと云ふのだ。

honours bought 「榮位勳爵を金で贖ふたこと」。

service done [爲されたる奉公] とは「如何なる奉公を國家に致した
かと云ふ事」。

【譯】愛國心の精髓は國のために喜んで一身を捧ぐるにあ
る。それは丁度眞の偉大なることは幸福の享樂に表れずして
世に善を施すに表るゝと同じである。過去の英雄のために愛
するもの、手に依つて樹てられた記念碑の文句を讀んで見よ。
それは如何なる富を相續したとか、名譽を贖ふたとかには言
及せずしてどんな奉公をなせしかを物語つて居るでは無いか。

問題

41. No man's spirits were ever hurt by doing his duty:
on the contrary, one good action, one temptation resisted
and overcome, one sacrifice of desire or interest purely for
conscience' sake, will prove a cordial for weak and low
spirits far beyond what either indulgence, or diversion, or
company can do for them.

May, Can, Must の意味

May, Can, 及 must には其れ其れ二た通りの意義が
ある。一つは Action に關するもので Permission,
Ability, Necessity (.....してよし、.....する事が出來
る、.....せねばならぬ)を表し、他は Probability,
Possibility, Certainty (.....かも知れぬ、.....の筈無
し、.....に違ひ無い)等 fact に關するものである。
此の事は文典に充分説く所で茲にくだしく云ふ必
要もあるまい、が問題を手にして色々の語句の意味に
屈托して居るといつかり此の第二の意義のあるを忘れ

て失敗する事があるから警戒を要する。下に此の點で
誤り易い文を擧げて置く。

例文 A.

It cannot be a weak mind that has pushed its
way to eminence through so great obstacles.

【註】此の文は一般の事を云ふて居るのか或 particular な mind に
就て云つて居るのか問題だ。ところで so great obstacles と云ひ has
pushed its way と云ふ點から考へて見ると、どうしても或る particular
な mind を云ふて居ると考へられて來る。又 mind が此處では a
person を代表して居るので、He cannot be a weak minded man to have
pushed his way to eminence through so great obstacles. など云ふたの
と大差は無い。かく mind や heart が person を代表する事はよくあ
り勝ちの事であるから注意すべきである。

to push one's way to~ は「困難を排して押し進む」場合の常用語で
ある。こう云ふ expression はその次に到達點を表はす名詞が來る、例ば

{ He rose at a bound to eminence.

{ 彼は一躍顯位に昇つた。

{ He pushed his way to his present position.

{ 彼は努力して今日の位置に達した。

eminence は high place である、従つて形容的に高位、名聲等を意
味する。それで此處の cannot は第二義の「.....なる筈なし」でなけ
ればならぬ。

【譯】か程の困難を排して出世の道を拓いた彼の心は決して弱
いものである筈は無い。

例文 B.

As many of the terms of science are such as
you cannot have met with, I think it would be

well to have a good dictionary at hand to consult immediately when you meet with a word you do not comprehend the meaning of.

【註】 can (may, or must) have done と云ふ形は必ず第二意である、第一義になる事は決して無い。そして此れは過去の事柄に關して今から推測をするものである。(邦語の「……した筈が無い」「……したかも知れぬ」等に當る)それで to meet with は「偶然出會ふ」意で、terms は「項目」の意から「言葉」となるので、terms of contract (契約の條項)、terms of science (科學の術語) などよく用ひる語である、依つて as らか met with までの句が「科學上の術語の多くは君が出會ふた筈の無い様なものであるから」の意である。その外の語句では to haveat hand が「手近に置く」意、at hand は near に等しい。(cf. The examination is at hand).

to consult は to consult with a friend (友人と相談する)等の句でよく知つて居るものだが此れを“with”無しに用ひれば「教へを乞ふ」意となるので to consult a doctor (醫者にかゝる)等よく云ふ、それから轉じて人間ならぬものに對してもよく用ひるので to consult a dictionary (字書を引く)、to consult a watch (時計を見る)等云ふのである。

【譯】 科學上の術語には君が今迄出會つた筈の無い様なものが多から常に字書を手元に置いて意味の解らぬ語に出會ふたら直ぐ引いて見るがよからうと思ひます。

【附】最後の“of”は「其の語の意味」なので when you meet with a word the meaning of which you do not comprehend. とあるべきを which を略したので“the meaning of”と云ふ風に“of”が後へ移されたのである。

例文 C.

People mistake very much, who imagine that they must of course speak their own language

well, and that therefore they need not study it, or attend to it.

【註】 they must of course speak their own language well. を「勿論よく話さなければならぬ」と譯したならばそれに續く文句即 therefore they need not study it. とどう調和するか、「よく話さなければならぬから勉強する必要がない!」こんな馬鹿々々しい矛盾が又とある事か、勿論上の must は「捨て、置いてもよく話せる筈だ」である。第二義の must であるは云ふを俟たぬ。次に People who..... は「人もし.....と思はぬ」と云ふが如き條件的語氣である事に注意せられよ。

【譯】 自國語は捨て、置いても善く話せるもので従つて其れを研究し又注意を拂ふ必要が無いと思ふ人あらば大なる誤りである。

例文 D.

He might have been resigned to die, but I suspect he wanted to die without added terrors, quietly, in a sort of peaceful dream.

【註】 to be resigned to die は「死ぬと覺悟して居る」意である、此の形は普通の passive (.....される)とは異なる、to resign は「辭職する」でよく覺えて居る人があるが此れは“to give up”が基の意で次で“to submit calmly”即「穩かに參(マイ)る」意になる、従つて to be resigned は「諦めて居る」に當るのである、You are mistaken. (御前は間違つて居る)と同一の云ひ方である。それで He might have been resigned. は may have done. (.....したかも知れぬ)の過去形で「諦めて居たのかも知れなかつた」である。added terrors は死ぬ際に伴ふ恐怖である、quietly は without added terrors の説明。In a sort of peaceful dream も同様。此の三つとも同じ格で wanted to die にかゝるのである。I suspect は perhaps 位に取扱ふべし。

【譯】 彼は死ぬ事は諦めて覺悟して居たのかも知れなかつ

たが多分死ぬ時の恐怖なしに、靜かに、安らかな夢でも見る様に死に度かつたのだらう。

Notes

(I) May や can の用法に一つ特別の場合がある。其れは此れ等助動詞が二つの動詞の root form にかゝる際に普通のかゝり方で行つて無い場合がある事で、時々讀者を間誤つかせる、次に二三例を引いて説明しやう。

例文 A.

He likes the work in which he can appear to be very active and yet not do much.

【註】此の文で“can”は普通の見方からすると“he can appear to be very active and yet he can not do much”となる事數學的の $a(b+c)=ab+ac$ の筆法である、がさてそれで譯して見ると變になる。「彼はこう云ふ仕事が好きだ——大變活動して居る様に見えて多くなを爲し得ぬ様な。」……併し文の眞意はさうぢや無い“not do much”を固めて「實際は多くなを爲さないで居る」ことが“can”（出来る）と持つて行かうと云ふのである、少し無理な筆使ひである、けれどもよく斯る書き方がしてある。但し“may”（かも知れぬ）の如きは常に此筆法である、例へて The report may be true. (眞であるかも知れぬ)。It may not be true. (眞で無いかも知れぬ)。此れに對して It can not be true. (眞である筈は無い) と can not の場合は not が can を打消すのである。此の may not の筆法を、「出来る」意の can に持つて行つたものと見ればよい、併し此れは極く例外の場合で吾々の眞似して用ひる發表法ではない。

【譯】彼は非常に活動して居る様に見えて而かも多く働かずに居られる様な仕事を好む。

例文 B.

Each man can act his part honestly and honourably, and to the best of his ability. He can use his gifts and not abuse them.

【註】前同断の語法。to act one's part は演劇なぞの「役をつとめる」がもとの意で part は各人が振り當てられた「役」である、act は「演ずる」である、それで此の句が「此の世で各人が自己の爲すべき務を果す」意となる、人生は要するに芝居の様なもの云ふ見方からである。use に對して abuse (ab は「非」、use は「用」で「濫用する」となる)がある。abuse は轉じて「言語の濫用」の意から「誹謗する」意となる事も知り置くべし。

【譯】各人は正直に立派に己れの能力の及ぶ限り自己の分を盡す事を得べし。人は天賦の才を善用して濫用せざる事を得べし。

(II) 下例の如きは特別の考慮を要する場合なり。

例文 A.

It must have come to this sooner or later, and I say it is better sooner than later.

【註】“must have done”は「……したに違ひ無い」意である事は普通の事だが此處ではそれと少し趣を異にする。此れは should have done, ought to have done (Infinitive の項参照) に似て「とくの以前から……した筈であつた、それが今迄實現せずに居たのだ」と云ふ様な心を表はしたものである。it is better sooner than later. は better の次に if it comes を入れて考へよ。I say は「敢て言ふ」様な意である、即「どうせ起らねばならぬ事なら悪い事でも早い方がよい」と断言する口調である。

【譯】それは早晩こう云ふ事になる筈のものだつたのだ。そしてそうなるなら遅いよりも早い方がよいのだ。

たが多分死ぬ時の恐怖なしに、静かに、安らかな夢でも見る様に死に度かつたのだらう。

Notes

(I) May や can の用法に一つ特別の場合がある。其れは此れ等助動詞が二つの動詞の root form にかゝる際に普通のかゝり方で行つて無い場合がある事で、時々讀者を間誤つかせる、次に二三例を引いて説明しやう。

例文 A.

He likes the work in which he can appear to be very active and yet not do much.

【註】此の文で“can”は普通の見方からすると“he can appear to be very active and yet he can not do much”となる事數學的の $a(b+c)=ab+ac$ の筆法である、かゝりてそれで譯して見ると變になる。「彼はこう云ふ仕事が好きだ——大變活動して居る様に見えて多くな爲し得ぬ様な。」……併し文の眞意はさうぢや無い“not do much”を固めて「實際は多くな爲ないで居る」ことが“can”（出来る）と持つて行かうと云ふのである、少し無理な筆使ひである、けれどもよく斯る書き方がしてある。但し“may”（かも知れぬ）の如きは常に此筆法である、例へば The report may be true. (眞であるかも知れぬ)。It may not be true. (眞でないかも知れぬ)。此れに對して It can not be true. (眞である筈は無い)と can not の場合は not が can を打消すのである。此の may not の筆法を、「出来る」意の can に持つて行つたものと見ればよい、併し此れは極く例外の場合で吾々の眞似して用ひる發表法ではない。

【譯】彼は非常に活動して居る様に見えて而かも多く働かずに居られる様な仕事を好む。

例文 B.

Each man can act his part honestly and honourably, and to the best of his ability. He can use his gifts and not abuse them.

【註】前同断の語法。to act one's part は演劇なぞの「役をつとめる」がもとの意で part は各人が振り當てられた「役」である、act は「演ずる」である、それで此の句が「此の世で各人が自己の爲すべき務を果す」意となる、人生は要するに芝居の様なもの云ふ見方からである。use に對して abuse (ab は「非」、use は「用」で「濫用する」となる)がある。abuse は轉じて「言語の濫用」の意から「誹謗する」意となる事も知り置くべし。

【譯】各人は正直に立派に己れの能力の及ぶ限り自己の分を盡す事を得べし。人は天賦の才を善用して濫用せざる事を得べし。

(II) 下例の如きは特別の考慮を要する場合なり。

例文 A.

It must have come to this sooner or later, and I say it is better sooner than later.

【註】“must have done”は「……したに違ひ無い」意である事は普通の事だが此處ではそれと少し趣を異にする。此れは should have done, ought to have done (Infinitive の項参照)に似て「とくの以前から……した筈であつた、それが今迄實現せずに居たのだ」と云ふ様な心を表はしたものである。it is better sooner than later. は better の次に if it comes を入れて考へよ。I say は「敢て言ふ」様な意である、即「どうせ起らねばならぬ事なら悪い事でも早い方がよい」と断言する口調である。

【譯】それは早晚こう云ふ事になる筈のものだつたのだ。そしてそうなるなら遅いよりも早い方がよいのだ。

例文 B.

To estimate the Japanese student by his errors, his failures, his incapacity to comprehend sentiments and ideas alien to the experience of his race, is the mistake of the shallow: to judge him rightly one must have learned to know the silent moral heroism of which he is capable.

【註】 此處の one must have learned etc. は上の例文 A の如きものとも異つて「have learned (學び終る事) を必要とする」意で、單に「學ばねばならぬ」と言ふに完了の意を添へたのである。「……したに違ひ無い」でも無ければ又「……すべきであつた」でも無い、「……してしまはねばならぬ」である。

to estimate 「評價する」、同じ語原の esteem は「尊敬する、……と思ふ」意になる。

incapacity to comprehend 「次の事を理解する能力の無い事」。

sentiments and ideas alien to ~ 「日本人の経験に無い様な感情思想」。

alien は foreign で「親しみの無い、縁の無い」意。

the shallow その次に minds が略されたもの、「淺薄な人々」である。

learn to know 「知る事を學ぶ」とは「習ひ覺える」である。

silent moral heroism 「無言の徳義心」日本人は沈黙の間に武俠心をつつんで居るから云つたのである。

of which he is capable は前講 Relative Pronoun の説明の應用例になるもので to be capable of anything (……が出来る) を which へ結んで、「日本の學生に可能なるところの……」とつゞくのである。

【譯】 日本の學生をその誤謬、失敗、或は日本人種の経験には縁の無い思想や感情を理解し得ぬ事に依つて評價するのは淺薄な人の誤りである。彼を正しく判じるには彼のよく能ふ所の無言の徳義を理解するを得てからでなければならぬ。

問題

42. The farmer can work alone in the field or the woods all day and not feel lonesome, because he is employed; but when he comes home at night he cannot sit down in a room alone, at the mercy of his thought.

Pro-verb (代動詞) としての "do"

動詞の do が既出の他の動詞の代理を務める事が屢々ある。此れは noun に對する pronoun の如くに verb に對する pro-verb とも云へやう。I think just as you do. の do の如きがそれである。一寸考へるとごく簡単なことで文句は無い様だがさて複雑した文中に此れが用ひられるとうつかり間誤つく危険がある、次に此の pro-verb の do が入つた厄介な二三の問題を提供する。

例文 A.

Every man has as good a right to think as he does as you have to think as you do; nay, in truth he can not help it.

【註】 right 權利。help 禁ずる、止める。

【譯】 何人と雖も自己が考ふる如くに考ふる權利ある事正に汝が自分で思ふ様に思ふ權利あると同様である、否實際其れは止むを得ないのである。

【附】 此の問題は as good a right の as に應ずべき後の as が其の

後にある三つの *as* の内のどれであるかを見出すのが第一の仕事なのである。其れは此の句を目的とする動詞が *has* であるから。 *He has as fine a book as you have.* と云ふ様に後に続く動詞も同様なものであるべきが普通であると云ふ事に目をつけて *Every man has as good a right to think as he does as you have.....* と續くと云ふ事に歸結すればよい、もし *Every man has as good a right to think as he does.* と掛けたならば「總ての人は彼が権利を持つと同じ権利を持つ」意となつて何のことやら解らぬ事になる。そこで *as you have* が *Every man has as good a right* に應ずる句と定まればそれが *as you have a right.* とあるのが略された事と判明する、そうすれば *as you have to think* (汝が考へればならぬ) なぞと見當違ひに持つて行く間違ひも避けられる。餘分なことだが、あまり平生呑み込んで居る形式に捉はれて *have to* なら *must* と云ふ風にテンから極めてかゝるのは最も危険なことである事を注意して置く。それで此の文はつまり *do, does* が *think* に對する *pro-verb* になつて働いて居るので文の構造はつまり下の如きものなのである。

Every-man has as good a right as
to think as he does.
you have (a right)
to think as you do.

例 文 B.

The habit of observation is the habit of clear and decisive gazing. You must look intently, and hold your eye firmly to the spot, to see more than do the rank and file of mankind.

【註】 *observation*, 觀察。 *decisive*, 判別的、決定する力ある。 *intently*, 心を込めて、ゲツと。 *rank and file*, 卒伍→普通の人々。

【譯】 觀察眼とは物を明瞭に判別的に視る習慣である、もし

普通一般の人々が観る以上に物を觀んとならば心を罩めて見、確と目標に目を凝らさなければならぬのである。

【附】 此の問題の暗礁は *to see more than do* の一句である一寸見ると「實行するより觀察する」様な意に取れるがそうすると *the rank and file of mankind* が迷子になつてしまふ、要するに *to see more than the rank and file of mankind do (=see)*. とあるべき位置を顛倒したわけなのだ。

decisive (は *decide* (決定する) の形容詞で *decisive judgement* 決断、*decisive battle* 決戦、等云ふ。 *rank* は軍隊の「横列」で *file* は「縦列」であるそれで *rank and file* は「兵卒」の意となる(士官は列外に立つから)、次で「並の人々、凡人」の總稱になる。

注意 代動詞としての“do”に附いてこう色々頭を攻めると又其れに氣を奪はれて案山子が立つて居ても幽霊に見えたりする様に“do”が出て來ると「又か」と早合點するのはよろしく無い、要は全文を熟讀して合理的に見分けるが必要なのである、下の問題の如きは *do* が立派な獨立動詞で使はれた一例である。

Alike for the nation and the individual, the one indispensable requisite is character,—character that does and dares as well as endures, character that is active in the performance of virtue no less than firm in the refusal to do ought that is vicious or degraded.

【註】 “do”を單獨に正動詞として用ふると「實行する」「進んで爲す」の意である。“character that does and dares”はそれだから「進んで事を敢行する性格」「ぐすぐすせずによつつける氣質」に當る。それの同格説明として“character that is active in the performance of virtue”を置き“as well as endures”(同時に事を耐へる性格)に對して“no less than firm etc.”が置かれて居るのだ。“in the performance of”(.....の遂行に)が“firm in the refusal to do”(.....を断じてせぬ事)と對をなして積極的美質、對、消極的美質を表して居るのである。

【譯】 一國民にしても一個人にしても缺くべからざる唯一的要素は性格である、即守つて破られぬと同時に進んで爲し遂げる性格、換言すれば不徳不倫の事は何でも断じて退けると等しく正道を行ふに勇猛なる性格である。

問題

43. Let us be up and be doing, and doing to the purpose, so by diligence shall we do more with less perplexity.

44. Those who devote themselves to the pursuit of pure science do not, as a rule, reap pecuniary reward. They probably enjoy their lives as much as if they did.

意志を表はす助動詞 “will”

I will do. の形に於ける will は I なる者の意志を表はすので「……するつもり」「……する決心だ」に相當する。さて此の will の用法が第二、第三人稱の名詞を主格に置た場合にも見出さるゝ事を忘れてはならぬ、問題はこゝにある。例ば

- a. He will soon be able to work hard.
- b. He will not listen to my advice and will have his own way.

の二文に於て a 文の he will は單なる未來を表はすもの、I shall に應ずるもの、で、b 文のは「彼」の意志を語るものである、即「彼は私の忠告に耳を假さず自分の勝手な行動を執ると云ひ張る」の意である。

猶此の意志を表はす will は無生物を主語とする文にもよく用ひられるので、それに對しては其の意味の没却されぬ様な譯語を加へるが必要である。

Accidents will happen in the best regulated family.

いくら取締りの行届いた家にも間違は起りたがるものだ。

此に類する語法は日本にもあるので下等な發表ではあるが The door will not open.—戸が開きやあがらぬ、などは最もよく此の心持が表はれて居る。

例文

By the law of nature the stream will run down, and the strongest man cannot stop it. But if he be a wise man, though he cannot alter the law he will know how to make use of it, and he will turn the law to his own advantage.

【註】 the stream will run down の will は本項説く所に當るので此れをたゞ「流れは低く流れるでせう」と譯したでは其の眞意を表はして居らぬ、須く「流れは低きに向つて走らでは置かぬ」とすべきである。

the strongest man は even the strongest man の意に表はすべき事に注意。「最も強い人でも」とすべき所であるのに「最も強い人が」とすれば如何にも間が抜けた文になるを考へられよ。he will know, he will turn の “will” は單なる未來を表はすものである、to turn to advantage は to turn to account と云ふ、「利用する」「有利なものとなす」意である。

【譯】 自然の法に従つて流れは低きに向ふて走らうとする、如何なる強者と雖も之れを止むる事は出来ぬ。が彼もし賢き人ならば此の自然の法則を變更し得ずとも此れを利用し自己に利益ある様に導く事を知るであらう。

“ Shall ” に就きて

It shall be done at any cost.

“shall” が三人稱や二人稱を主語にした文に使はれるとそれは “I will” の衣を更へたものであつて「乃公が……する又はさせる」の意になる事は文法の講義で耳が痛くなるほど聞いて居る筈。ところがさてそれがコミ入つた文の中へ入つて居ると、ついつつかりして見落してしまつて失敗する、それも

You shall die.—I will kill you.

You shall have this.—I will give you this.

の様な簡単な所ならばまだ危険が無いが

You shall be obeyed.

It shall be done at once.

なぞと Passive construction が附随したりしてくると一寸間誤つてそれが

I will obey you.

I will do it at once.

と云ふ簡単な事に還元する丈けに氣が利きかぬる人が多い様だ。次の意識の轉換をよく考へて置いてさて問題を譯して見られよ。

I will give you this.—>You shall have this.—>

This shall be yours.

例 文

We are glad indeed that we are on good terms with all the other peoples of mankind, and no effort shall be spared on our part to secure a continuance of these relations.

【註】 to be on good terms with—親密の間柄にある。
to spare the effort—努力を惜む。 on our part—吾等に於て。
to secure—確にする、得る。

【譯】 吾人は世界の各國民と和親の間柄にあるを眞に喜ぶものであつて此の關係を確かに繼續させるが爲めには吾等に於て如何なる努力も惜まぬ覺悟である。

【附】 此の問題中の大事な語句は to spare, to secure, to be on good terms with, on our part 等である。

to spare は金や勢力を使はずに済ますが根本義であつて従つて「骨を折るべき際にも骨折らずに済して置く」心から「努力を惜む、骨惜みする」様な意となるのである。

{ Have you no money to spare?

{ 君は今要らぬ(遊ばして置く)金があるか。

{ Will you spare me a few yen?

{ 二三圓僕に借して呉れぬか、(自分で使はずに、の意から)。

{ He spares no pains in his boy's education.

{ 彼は子供の教育に骨身を惜まぬ。

“spare” は此れから轉じて「殺すべき奴ながら命を取らずに済して置く」意で「助けてやる」、「人に迷惑を掛けずに済す」意で「手数を省く」等になる。

Spare me (or my life)! 命だけは御助け下さい。

比較、Save me! 救うて呉れ、助けて!

I will spare you the trouble. 君に手数は掛けぬ、(私が自身でやる)。

to secure は「安全にする」が原意で ①「確に手に入れる」② 危険

の無い様に保護する。③ (罪人等が自由になつて居ては不安心な次第だから此れを) 捕縛する、等の意で用ひられる。此れが形容詞としては「安全な」(例、a secure place)となる。

term は「句、句切り」が基本の意で ① 期間 (例 term of office 任期) ② 語句、言葉 (例 technical terms 術語) ③ 間柄 (アヒダガラ)、関係、の意、第二以下はよく複数形に用ひる。

{ He spoke of you in high terms.

{ 彼は君を大に賞揚して居た。

{ We are on friendly terms with him.

{ 吾等は彼と親密にして居る。

on one's part は主格関係を表はす句で「吾等の方で」「先方」等の「方」に當る。

After such conduct on his part our friendship is at an end.

彼奴の方でそんな事をしたからは御互の友誼も御終ひだ。

問題

45. Having been urged at one time to have his likeness taken, Pestalozzi said: "Those who would perform this task must either violate the laws of truth or of taste: neither the one nor the other shall be done with my consent."

46. Even if the girl is dead, no stone shall be left unturned to prove her innocence.

Relative Adverbs に就て

Relative adverbs の when, where, how 等はその先行詞 (antecedent) を明記する場合と然らざる場合とある、もし antecedent が略されると其れが一つの noun clause を導くことになる。

{ This is the place where the battle was fought.

{ This is where the battle was fought.

{ He told me the reason why he had done so.

{ He told me why he had done so.

此の各第二の場合が譯文に注意すべき要所である、次の例に依つて "how" の働きを辨ぜられよ。

a. He never told me that he succeeded.

彼は自分が成功した事を私に決して云はなかつた。

b. He never told me how he succeeded.

彼は自分が成功した徑路を私に云はなかつた。

a 文の that は conjunction で、たゞ「……なる事」であるが、b 文の how は the way how (=the way by which) の省略であつて單に成功せし事實に非ず「如何にして成功せしか其の一部始終を」である。

斯く relative adverb が antecedent 無しに用ひたものが noun clause を導く場合と普通に adverbial clause を導く場合とを比較して見られよ。

a. This is where I was born. [noun clause]

此處は私が生れた所だ。

b. I went where I was born. [adverbial clause]

私は自分が生れた所へ行つた。

a. The time was when the whole land was plunged in civil wars. [noun clause]

時は全國が内亂の渦中に陥つた時代だつた。

b. He was born *when the country was at war.*

彼は國が戦争中に生れた。[adverbial clause]

此の a の場合は時に疑問副詞が Sentence の中に含まれたものと見らるゝこともある、例ば I know *when he will arrive.* は「何時彼が着するかを知る」で when 以下は *When will he arrive?* が I know に附着したものと見るべきである。併し凡ての場合が此の流儀で解決は出来ぬ。時とすると when が relative adverb であつてしかもその antecedent が一向見つからぬ場合がある、次の文例を見られよ。

There goes an old man. He is the Mayor of the town. I remember him *when he was a boy in knickerbockers.*

彼處に老人が行く、彼は此の町の町長だ。私は彼が半ズボン（knickerbockers）を穿いて居る少年であつた時代の彼を覚えて居る。

此の文で when は普通の relative adverb の様に「……であつた時に」では無い、かと云ふて「……であつた時を」とすれば remember him の him が邪魔になる、要するに「……であつた時の彼を」とでも譯すべきで I remember him. と I remember the time when…… とが一所くたになつた構文である、英人にはそれが一向不思議でも何でも無い様子だが吾々の眼には誠に始末の悪い when の使ひ方である。一寸考

へると何でも無い様な when や how にもこう云つた難所がある事を注意して置く。

例文 A.

It is always something to know when one is beaten, and to give in with a good grace.

【註】先づ something が一つの關所である、此れは「或る事又は物」には遠い無いがこう云ふ不鮮明な言葉は中々險呑なものである、こう云ふ語は時々二重の意を持つ、some と云ふ「不定量」は時に little (僅かな) の意にもなれば a good deal (可成り) な意にもなる、I will do something in the world. と云へば「私は世の中で何か是れと云ふ事業をやらう」であつて something は「取るに取らぬ」の反對「語るに足る」意だ。He is somebody. (は He is nobody (名もなき人間) の反對で「彼は何の某と世に知らるゝ人だ」である、して見れば次の文意は御解りであらう。

Do you know English? That's something.

be beaten は「破られる」「敗ける」である。すると前半の文意は when の處分（adverbial clause）で極る、どうしても when 以下は to know の object である、が「何時負けるかを知る」は一寸當ら無い。宜しく「人は自分が負けた時を自覺する事は……」とすべきである。

to give in は to yield であつて「降参する」「参る」に當る、to give up が「断念する、棄てる」であるのと比較されたい。

{ Never give up what you have once undertaken.

{ 一度企てた事は決して棄てるな。

{ I must give in to his superior opinion.

{ 私は彼の勝れた意見に従はねばならぬ。

with a good grace は「潔よく」に相當する、その反對が unwillingly である。

【譯】人は自分が負けた時それと悟り且つ潔よく屈服するは常に大切な事である。

例 文 B.

Very few people know when they have had the worst of an argument, and if they do, they do not like it. Moreover, if they know they are beaten, it does not follow that they are convinced.

【註】 to have the worst of ~ は to be beaten の意と覺ゆべし。之れに對して「優る」「勝つ」が to get the better of one である。次に If they do の “if” が別項に説く所の「……しても」に當るので「ならば」ではない。to follow と云ふ語が議論の順序を擧げるに最もよく用ひらるゝ、即「従つて……と云ふ事になる」意を表はすに注意。to be convinced は「確信する」であるが此處では「成る程と悟る」などあるべきである。

【譯】 議論に破れた時それを自覺する人は誠に少いし又自覺しても其れを好まぬものだ。猶又人が自分が破れたと知つてもそれで必ずしも成る程と悟るとは云はれぬ。

結果を表はす副詞及副詞句

例へば茲に “He tried to effect a reform with success.” と云ふ一文を取つて見る。此れを「彼はうまく改革を行はうと試みた」と譯しては當らぬ。斯る場合の with success=successfully は結果を表はすので「彼は改革を斷行して成功した」意味になる。此の反對はよく讀本にもある in vain=vainly であつて In vain I tried to persuade him to join us. (彼を仲間

しやうと説いて見たが駄目だつた) の如きがその例である。要するに成、不成等の結果はよく副詞や副詞句で表はされる、もので successfully, effectually, vainly ; with success, with advantage, to the purpose 等その重なるものである、時には又 “He made a vain effort to resist.” (彼は無益の抵抗を試みた) の如くその役目を形容詞の方へ持つて行く場合もある。下の問題に就て實地に研究さるゝがよし。

例 文 A.

When a man has made a happy effort, he is possessed with an absurd ambition to have it thought that it cost him nothing.

【註】 此の問題の急所は a man has made a happy effort の一句にある。to make an effort は「努力する」「一と骨折る」である、それが happy effort とあるから happy はたゞの「幸福な」では無いと云ふ事はすぐ考へらるべきだ。然し “The matter has come to a happy end.” と云ふた場合の happy を考へて見られよ「目出度い落着」であらう、即 happy=lucky, successful である。すれば表題の下で説明した通り when a man 以下の句は「人が或る努力をして運よく成功した時は」である事が了解さるゝ筈である。

“to be possessed with” は “to be possessed of” と區別しなければならぬ句で to possess は元來「所有する」と云ふ他動詞だから其の passive form として前者を考へればよい、即此れは He was seized with an illness or a panic, (彼は病氣に又は恐怖病に取り付かれた、即病氣になつた又恐慌を起した) と同一筆法で He is possessed with a devil. 「彼には魔がついて居る」等云ふので覺えればよい、即 to be possessed with は「……に取り付かれる、魅(ミイ)られる」、それから轉じて「變な考へに支配される」意に用ひられるのだ。

Are you possessed that you should think of making such an attempt?

そんな事を企て、見やうなんて御前は氣でも狂つたか。

to be possessed of は全く別な意味で *to possess* (所有する) と何等異ならぬ句だ、此れは *to possess oneself of* — (.....を自分のものにする) と云ふ形から來たので *to be the possessor of* の意と思ふがよい。次の文例を比較されよ。

{ He is possessed of great wealth.

{ 彼は大きな財産を有す。

{ He is possessed with some dangerous thoughts.

{ 彼は危険思想にかぶれて居る。

absurd ambition は「馬鹿な野心」; *to cost one nothing* は「一文も金がかゝらなかつた」意から「少しも骨が折れなかつた」意となる、此處の意味の轉化を味はれよ。

{ His ambition cost him his life.

{ (彼の野心は彼に命を拂はした、即)彼は野心の爲に身を滅ぼした。

{ He gained wealth at the cost of clean conscience.

{ 彼は良心の清淨を失ふて(良心を汚して)富を得た。

それで *to have it thought that* が *to have my photograph taken* (寫眞を取らせる) 流儀の云ひ方で「.....だと人に思はせやう」の意と解すれば全文の譯は完全に仕上るわけだ。

【譯】 人は或努力をして幸に成功する、とそれが何等骨が折れなかつたと人に思はせやうと云ふ馬鹿けた野心に驅られるものだ。

例文 B.

There are many people who regard the body as a sort of food bag, into which we can put any materials with advantage, so long as they are popularly known as food.

【註】 本文中注意すべき語句は “with advantage” が結果を表はさうと云ふので「如何なる材料をぶち込んでもためになる」と譯すべきものである事。と “so long as” が「.....なる限りは」の意で “if” に似た句である事とである、此れを *as long as* (.....なる間、.....中) と比較されよ。

{ *So long as* you are idle you can never hope to succeed.

{ 君はなまけて居る限り成功しつこ無い。

{ I shall teach you *as long as* he is absent (=till he returns).

{ 私は彼の留守中君等に教へる。

popular は *people* から出た語で「一般の、世間の」の意と、轉じて「一般に人氣がある」意とを有する、*popularly* は *generally* と同意で「世間で、普通一般に」の意。

【譯】 世には身體を食物を入れる囊の様に心得て、何でもかんでも一般に食物として知らるゝ物はその中へ食ひ込んで利益があると思ふ輩が多い。

例文 C.

Whenever he went dodging about the village he was surrounded by a troop of children, hanging on his skirts, clambering on his back, and playing a thousand tricks on him with impunity.

【註】 此れは最後の *with impunity* の一句の解釋が必要なのである、*impunity* は *im-punity* で “-puni” は刑罰を意味する言葉の根になつて居る事 *punishment* で見る通りである、それに *im-* (no) て *negative* の prefix が附いて *impunity* は不罰、不問である、だから *with impunity* は「罰なくして、咎なくして」、と云ふ結果を表はす句になるのだ、例は

Some young men seem to commit all sorts of excesses with impunity.

若い人達には飲み過ぎ食ひ過ぎ何をしても何とも無い様な者があ
る。

それで with impunity は「平気で」と譯して丁度當る場合が出来るのだ。

to dodge は身を轉ずる、身をかはす意で to dodge about と云へば「あちこち身を轉ずる」意から「ちよこちよこ彼方此方を歩き廻る」意となるのである。

【譯】 彼が街中をうろうろ歩いて居る時は常に一隊の子供に取り巻かれる、そしてその子供達は彼の裾にブラ下つたり、背によち上つたり、色々様々の悪戯を彼に仕かけるが彼は別に咎めもせぬのだ。

例 文 D.

A certain readiness to perish is not so very rare, but it is seldom that you meet men whose souls are ready to fight a losing battle to the last.

【註】 「戦に勝つ」を “to gain the battle (or, the day)” と云ひ、「敗れる」を “to lose the battle (or, the day)” と云ふ、依つて losing battle は「敗れいくさ」である、losing はその戦の結果を表はす形容詞である。to be ready to do は「……するに躊躇せぬ」で、readiness は「覚悟」と譯して當る。

【譯】 潔く死ぬ覚悟は別に珍らしくもないが、敗れいくさを最後まで踏み止まつて戦ふ意義のある人物に會ふ事は稀である。

問 題

47. A poor student, especially if he lives in an out-of-the-way place where there are no big libraries to bewilder him, may apply his energy with effect in the study of a few authors.

48. Ridicule has ever been the most powerful enemy of enthusiasm, and properly the only antagonist that can be opposed to it with success.

目的を表はす句が轉じて結果を表はす句となる場合

「何々するやうに」と云ふに相當する英文は to do ; in order to do と云ふ不定法を用ふるか又は that may... と云ふ clause を以てするか普通である。此の that.....may が目的句である事をよく忘れて不徹底な譯をする事があるからよく覚えて置かるゝがよい、例ば次の問題を取つて譯して見よ。

What is done in business must be done well ; for it is better to accomplish perfectly a small amount of work than to half-do ten times as much. A wise man used to say, “Stay a little, that we may make an end the sooner.”

A wise man 以下の一文は全く文典の理づめで譯さなければならぬ即 “that we may make an end” は “in order to finish” で the sooner とは stay a little した丈けそれ丈け却て速にを意味する、此の邊をよい加減に譯してはいけ無い。

【譯】 仕事として爲す事はよく爲さねばならぬ。何となれば少々仕事を完全に成就するは十倍も多くの仕事を半分やりにするよりも優るからである。或る賢い人がよく云ふた言がある、「一寸待て、それ丈け早く仕上げが出来るから」と。

扱て本題に入つて此の目的を示す句が轉じて結果を示す句に用ひられる事がある、元來 Infinitive は目的

及結果何れをも表はすので下の如き例はよく見る所である。

{ His father *lived to see* his son become famous.
彼の父は己れの息子が有名になるのを見るまで
生きた。(.....を見て死んだ)

{ He embarked in a small ship *never to return*.
彼は小船に乗つて船出したが遂に再び歸つて來
なかつた。

{ The enemy attacked us with a desperate effort,
only to be repulsed.
敵は必死の勢で吾軍を衝いたが、まるで撃退され
に來た様なものだつた。

最後の例の如きは目的句の轉用と見てもよいので邦語でもよく此の流儀の云ひ方をする事がある。此の「まるで.....するための様に」「恰も.....せんとてなるかの如くに」に當る例文を少し練習して見やう。

例文 A.

That nothing might be wanting to Frederick's distress, he lost his mother just at that time.

【註】此の文は災厄の神が人をどこまでも追窮して苦しめむとするかとも見ゆるほど不幸の重來を描かうと云ふ筆法である。that..... might の働き具合をよく注意されよ。

【譯】フレデリックの災厄に毫末の遺憾なからしめむとてか彼は時も時丁度自分の母を失ふた。

例文 B.

Though you seem to be having it all your own way now, I may yet live to see you die like a dog in a ditch.

【註】to have it all one's own way の it は特に指すもの無し「萬事吾儘をつくす」「何事も自分の思ふ様にやる」意。to live to see 上の説明にある通り「生きて居る内に見る」である。ditch は溝(ドブ)だ to die in a ditch は「野たれ死にをする」にも當るべし。

【譯】御前は今ちと勝手放題に振舞つて居る様だが。乃公の生きてる内に野良犬の様に溝の内て死ぬ所を拜見する事だらう。

問題

49. It is sometimes discouraging to tell the truth only to discover that you are not believed. But time reveals truth as well as falsehood.

“too”

I. He is too ready to speak.

too.....+infinitive は negative meaning を帯びて so+that cannot..... に通ずる、例ば I was too much surprised to speak out a word. は I was so much surprised that I could not speak out a word. (餘り吃驚して一言も口へ出なかつた)。.....と云ふ事は殆ど知らぬ學生は無い、がドンナ場合でも此の流儀で押して行くと大怪我をする。上の “He is too ready to speak.” を「彼は支度が出来すぎて物が云へ無い」とやつたら

天下一品の御笑草だが試験場でアワテて居る時にはやり兼ねない。too.....to do は negative の意を表はす事もあるが常にしも然りとは云はれぬ、元來 too は exceedingly の意なので其のまゝの意即「.....であり過ぎる」に當るので

He is too ready to speak. は

彼はあまりお饒舌(シヤベリ)過ぎる。

と譯すべきである、此の場合の to speak は ready to speak (口が早い、オシヤベリ)と續くのであつて too.....to speak. (物云ふには餘りに.....)とかゝるので無い事を考へられよ。

例文 A.

I shall be only too glad to do my best in that line of work.

【註】 only は too を強めるための語、that line of work. — 其の方面の仕事。

【譯】 私は其の方面の仕事に全力を盡します事は實に實に嬉しいと思ひます。

【附】 only too..... と云ふ云ひ方は、強いが上にも猶一層強めた形である、て此れは「嬉しくて嬉しくてやり切れ無い」とか「實に諦められぬ程情け無い」とか極端の感情を含む文句である。

Alas! his prediction came only too true.

嗚呼、彼の豫言は悲しい哉適中した。

例文 B.

One can not correct one's faults without knowing them, and I always looked upon those

who told me of mine as friends, instead of being displeased or angry, as people in general are too apt to be.

【註】 此の問題で一才コンガラガツて居る所は I looked upon those (who told me of mine) as friends の一句で mine=my faults と知ればよろしい、即「私の缺點を私に云ふて呉れる人を私は友と視た」である。“look upon.....as~==to regard as (.....と見做す)”を注意すべし。to tell of は to speak of, や to hear of と同じで“of”は about に似て「.....の事を告ぐる、.....に就て云々する」意だ。それから“instead of”は「.....の代りに」の意が普通であるが本文の如き場合はそれでは駄目だ、よろしく「.....せずして」と譯すべきで此れは instead of の大切な一面である。此の意味で instead of を用ふる時は多くはその次に“—ing”の如き verbal noun の來る事も見逃す可からず。次例を比較。

a. I gave him money instead of the book. (.....の代りに)

b. Instead of working, as he should have been, he idled away his time.

勉強すべきのをさはずして彼はノラクラ日を消した。

それから終りの as people in general etc. の一句は to be displeased or angry の説明句で最後の to be の次に displeased or angry を補ふて考へられよ、即「一般に人がやり勝ちな様に.....」の心である。

【譯】 人は己れの缺點を知らずしては此れを改むる事が出来ぬ。されば予は己れの缺點に就て予にとやかう云ふ人を友と見て、決して一般の人のし勝ちな、否殆んど極つてやると云つてもよい位な、不快を感じたり怒つたりはしなかつた。

問題

50. Great men are few in any case, and we are too apt to look for them in the wrong places that we are in danger of missing some of those that do exist.

II. One cannot be too careful in the choice of one's friends.

“cannot too”を含む構文は非常にありふれたものでよく好んで用ひられる、邦語でも近頃「……し過ぎる事は出来ない」と直譯口調を使ふ人が出來た事程左様に英文によく出て來る句だ。要するに、此れは吾々ならば「いくらやつてもやり切れない」「いくら……しても猶且つ足らぬ位だ」に當るもので。一寸「……し過ぎてはならぬ」と云ふ様な意味に誤まれる懼れがあるから用心せねばならぬ、次の文を比較されよ。

{ You can not be too careful in the choice of your friends.

{ 君は己れの友を選ぶにはいくら注意してもし過ぎる事は無い、(如何程氣を附けても猶足らぬ位だ)。

{ You must not too much worry yourself about your health.

{ 御前は自分の健康を氣にかけ過ぎてはいけない。

さて此の「……過ぎる事はあり得ない」心は“cannot too”の形に限らず其れと等意の變つた expression を以てしても表はされる。要は「不可能+し過ぎる」意が何等かの form で表はされればよいのだ。

What a difference to the world Columbus's discovery has made it is impossible to exaggerate.

此の文では to exaggerate (「誇大に云ふ。大袈裟に云ふ」) で “too” の意味を表はしたものである、文の主體は it is impossible to exaggerate であつて此れが文の先頭に出たものと同じだ、it を made にくつ附けて has made it などと讀んだりしては駄目である、譯文は「コラムバスの発見が世界に如何なる變化を齎らせしかは誇張の辭を知らぬ」に當る。

例文 A.

A book may be compared to your neighbour ; if it be good, it cannot last too long, if bad, you cannot get rid of it too early.

【註】 此の文は cannot too の用途が解つて居れば至極解し易いものである、書物を隣人になぞらへ二者共に選擇を誤る可からざるを教へたものでよく御目にかゝる文である、語句として注意すべきものは、

to compare to~. で此れば to compare with とは異つた意味を carry する、後者は普通の「……と比較する」であるが前者は「……に譬へる」である。

{ I compared the translation with the original.

{ 私は譯文を原文と比較した。

{ Life is compared to a voyage.

{ 人生は航海に例へらる。

to get rid of は to free oneself from の意で厭なものや善くないものと手を切る、離れる意である of は from に通じる、to get rid of a bad habit or to rid oneself of a bad habit (悪い習慣を脱す) など云ふ。

それから last の動詞に用ひられて「長くつゞく」「保つ」意を表はす事も此の文で見逃すべからざる點である。

{ Such friendship will not last long.

{ そんな友情は長持ちはせぬ。

I took just as many books as would last me during my stay at the spa.

私は温泉に滞在中不足を告げぬ丈けの書物を持って行つた。

【譯】書物は人の隣人にも例へつべし。それが善きものならば、いつ迄交るも長きに過る事無かるべく、もし悪しきものならば、此れを絶つ事早きに失すること無かるべし。

例文 B.

We cannot be too strict in applying to books the rules we follow in regard to society and refusing our acquaintance to those books unworthy of it.

【註】此の問題も前のと同工異曲である。語句に就て注意すべきは to be strict in—ing. 此れは to be loose (緩やか)の反對で「……に嚴なる」である。strict は緊張を意味するので strict discipline (嚴格なる訓練)とか strict teacher (嚴しい先生)とか云ふ。

to apply は「當て嵌める」が基の意、規則等を適用する、方法を應用する、さては to apply oneself to work で仕事に身を入れる、勉強する意となる、入學を申込む、依頼するも to apply oneself for entrance でその oneself を略して to apply for— と自動的に用ひるので。此の語は最も用途の廣い大事なものだからよく覚えて置かるべし。

to follow は「従ふ」から「守る」(observe)の意に轉ずるは自然の道だ。

in regard to は“about”に等しい。“regard”は「眼を着ける」が元で ① 着眼點 ② 尊重、敬意、顧慮の二意に分れる、第一は in (or with) regard to とか regarding とか云ふ形となつて「……の點につきて」の意を有す。第二は I have a high regard for his opinion (私は彼の意見を尊重する)とか He pays no regard to appearance (彼は體裁を一向構はぬ)とか云ふ文で知らるべし。

and refusing の結ぶ所が……too strict in refusing となる事を知れよ、refuse は「拒む」だが此文では「……を排する」が當る。

最後の“it”は acquaintance を指すに注意。

【譯】吾人は交際上吾々の守る規則を書物に適用して、交るに足らぬ書物を近づけぬ様にする事は飽くまで嚴守せねばならぬ。

〔附〕此の問題で一つの大事な收穫物がある、其れは society 及 acquaintance の用ひ方についてである、society は普通「社會」と譯す、又 acquaintance は「知己、友人」と譯すが此れ等の語はかく固(カタ)まつた團體、箇人を意味するが本來では無い。society は「交ること」、acquaintance は「知る事」である、元は abstract の性質のものである、それが具體化して社會、知人等の意に用ふるのである、その事に氣が附かぬと上の問題等で society を「社會」、acquaintance を「知人」等と誤譯するのである、此れに關しては項を改めて説くつもりだがよい機會だから一言して置く。

例文 C.

Fifty years of study and labour elapsed before Galileo completed the invention of his pendulum, —an invention, the importance of which, in the measurement of time and in astronomical calculations, can scarcely be overvalued.

【註】此の問題は單語の六ヶ敷いのが少しある、まづ elapsed は passed で lapse は「滑り去る」意である、the lapse of time (時の経過)等云ふ、それで伊太利の有名な科學者ガリレオの pendulum (振り子)の發見を complete (完成)せしまでに、と此の before をこなし譯し度いものだ。それから an invention, the importance of which…… は誠にくだい云ひ方の様に思はれるであらう、即 an invention は前の振り子の發明の同格であるが「一つの發明、その發明の重要なる事は」と出直したものである、が此れをもし the invention of his pendulum, the importance of which…… とすると which が pendulum を受ける様な形

になるからそれを避けるために再び an invention と繰り返したのでごく明瞭な叙述である。

astronomical は「astronomy (天文学)の」の意 calculations は「計算」である、全體の譯は次の様になる。

【譯】 ガリレオが彼の振子の發明を完成せしまでに 刻苦勉勵の五十年が過ぎた。此の發明たる其れが時の計算及天文学上の測定に必要な事は如何に大きく見ても過ぎはせぬ位である。

例 文 D.

The selection of a place of residence, even though we only intend to pass a few short years in it, is from the educational point of view a matter so important that one can hardly exaggerate its consequence.

【註】 to reside=to live の名詞 residence が「住居」の意。from the point of view が「何々の見地から見て」に相當する句で物の觀察點 (view-point) を表はす句としてよく用ひられる。

【譯】 住所の選定は假令ほんの二三年を過す積りであるにしても教育上の見地より觀る時は非常に大切な事で其の影響する結果は殆ど誇張する言葉が無い位である。

問 題

51. No punishment, in my opinion, is too great for the man who can build his greatness upon his country's ruin.

注意 cannot too の構文にあまりなづみ過ぎると下例の如きをも誤る虞れがあるから注意するがよろしい。

Too much stress should not be laid upon calumny by the calumniated, else their serious work will be forever interrupted.

【註】 cal'umny は「誹謗、中傷」である、それを動詞に用ひて過去分詞にしたものが calum'niated であるが、此處では定冠詞を附けて the killed and wounded の流儀で「誹謗を受けた人」となるに注意。to lay stress on~ は「或事に力瘤を入れる」意だ。此處では“too much..... should not”とあるから「餘り.....す可らず」である。e'se 又は or else は「然らば.....なるべし」の意で接續詞的用法である。

【譯】 讒謗を受けた人はその誹謗にあまり重きを置く可きで無い、然らば彼等の大切な仕事は常に妨げらるゝであらう。

“Not” の作用

- a. He is not always so hard-working.
- b. He is not diligent at all.

“not” と云ふ打消しの adverb は代數の負の符號見た様に小いなりをして居ながら一文の死活を左右する。そいつが又他の adverb とからんで益々面倒な事になるから中々油斷がならぬ。上文の例で云つて見ると a. 文は「彼は始終あんなに勉強なのぢや無い。」の意である、それを「彼は常に不勉強だ」と譯せば大失敗になる。で、b 文こそ「彼は一向勉強せぬ」が相當する。其れと云ふのも、always, も at all も共に副詞の役目ではあるが not.....always の時は not が always に働くので

「always(常に)では無い」即 not always と云ふ心である、然るに not... at all の時は at all が not に働くので

「チツトモ.....せぬ」即 not... at all と云つた心なのだ。猶例を換へて云へば

He is not always happy.
彼は常に幸福とは云はれぬ。(「常に幸福で無い」に非ず「常に...なるに非ず」)

He is always unhappy.
彼は常に不幸だ。

要するに英文を解譯する際に not があつたら其れが文の何れの部分を打消して居るのか、predicate verb を打消して居るのか又他の副詞とか形容詞とかを打消して居るのかをしつかり見定めるのが必要である、例ば、I did it with not a little difficulty. と云へば not は a little を打消するので「not a little=少からず」で「私は並々ならぬ困難の末其れをやつた」となる、ので「少しの困難無しに仕遂た」とすれば正反對の誤譯になる。此の邊の呼吸を呑み込まれ度いのだ。

例文 A.

Success in any kind of practical life is not dependent solely, or indeed chiefly, upon knowledge.

【註】 —practical life 實生活。 to be dependent uponに頼る、.....に基づく。 solely 全然。

【譯】 實社會の如何なる生活に於ても成功なるものは十が十まで、否十中八九も、知識に基づくとは云はれぬ。

【附】 此の問題の難所は solely と chiefly との二つの副詞の捉え方にある、not は前講の通りで not solely, not chiefly と係るのであるが、sole は whole で「全々、丸つきり」、chiefly は「主に、主として」であ

る其れを not が打消するので not solely (全然では無い)=partly である、それだからis not solely dependent..... と云へば「全々.....に基づくのでは無い」に當るから、それなら「全々は基かぬ」としても「主として基く」かも知れぬ。そこで又 or indeed not chiefly 「否主として基きもせぬ」と念を押したわけなのだ。此の indeed は even の意と見ればよい。

それで此處まで讀んだ人はそれぢやあ「全然知識に基づくかぬ」意にはどう云ふのかと云ふ疑問が出て来る筈だ。それには not の意を強める副詞か副詞句を他に求むればよい即、

Success does not in the least depend upon knowledge, or Success does not depend upon knowledge at all.

等とすればよろしいのである。

例文 B.

It by no means follows in all cases, perhaps not even in the majority, that the purest water is the best for the health of a given family or for the population of a given district.

【註】 此の文の大體の骨は It does not follow that..... と云ふ形式である、此れは或る文句の次に置いて「さればとてコレコレと云ふ結論にはならぬ」「それだからコレコレだとは云はれぬ」と云つた様な語調である follow の「従ふ」と云ふのは「理屈が従つて通る」「道理が自然

と導く」様な心だ。例

Though the child is weak, it does not follow that he can not be educated.

子供が弱いからとて教育が出来ぬと云ふ事にはならぬ。

それで本問の初めの所はそんな事にして置いて that 以下を見ると, the purest water is the best for the health で「最も純粋な水が健康に最もよい」であるがこれが上の It does not follow に續けば「最も純粋な水が必ずしも……である」と譯したくなる、否それでこそ正しい文となるのだ。次に a given family の given だがこれはたゞ a certain の意に過ぎぬので「或家族の」とすればよい。幾何學で「與へられたる一點より與へられたる線への云々」と云ふのが即此の given なのだ。さて此れで大體の意味は通じた、「純粋な水必ずしも健康に最上と云ふ事にはならぬ」が此の文の骨子たる思想である、それで今一度初めの It by no means follows etc. へ歸つて in all cases, perhaps not even in majority が難點である、majority は「最多」で minority が「最少」である、此處で majority は most cases と置き換へ得る、してみると by no means は never だから It never follows in all cases, not even in most cases that……である、一寸見ると not even in most cases 「大概の場合に於てさへも」と云ふのが變て一向さへもが利かぬ様に思はれる。「not+all=some」と云ふ事の應用が必要なのは此處である。一體 it never follows in all cases とは何だか。これは割合に弱い expression である、即譯せば「如何なる場合でも然りとは云はれぬ」である、されば其次に、perhaps not even in majority 「否、大概の場合に於て然りとは云はれぬ位かもしれぬ」と來るのが自然の筆法である。此の問題は丁度前の not solely, not even chiefly と相似のもので要するに not の表はす partial denial (一部分の打消) 即 not all, not every の應用である。

【譯】 だからとて、最も純な水が必ずしも或家族の健康に、或は一地方の人民に、最良のものだと云ふ事が如何なる場合でも結論されるわけには行かぬ、否大概の場合さうは決して云はれぬ位のものだ。

【附】 譯文の初めの「だからとて」が變に思へる事と思ふ。一體原文のどこに「だからとて」に當る句があるのか「何だからとて」であるか。と質問が出やう。併し此の「だからとて」は If follows の follow と云ふ語の性質上必要なもので、さて「何だからとて」だかそれは解らぬ、此の問題は或文の一部を切つて取つたものだからその前に pure water の效能でも述べてあるか impure water の害でも説いて居るのであらう。その邊は此の文の原本を見なければ解らぬ筈だ。たゞ此れ丈けに對して譯すとしたらば此れ以上に想像を逞うする事は出来ぬ。又譯文後半は少し冗長である、が文の達意を欲する以上それはしかたが無い。

例 文 C.

No one can pursue a worthy object steadily and persistently with all the powers of his mind, and yet make his life a failure.

【註】 — 此の問題などは殊に文の終りまで譯んで意味を grasp しなければ失敗する種類のものである。to pursue は「追ふ」であつて「追求する」となる即 to pursue the enemy (敵を追ひかける) から to pursue happiness (幸福を求める)、や to pursue an occupation (職業に従ふ) の様な expression が出来る順だ。名詞の pursuit が「職業」を意味するのも自然である。で to pursue a worthy object は「立派な目的を達せんと務める」のでそれが steadily and persistently にやるのだ steady は stand の親類で「確立した」即「しつかりした」だ、persistently は to persist (頑張る、固守する) から出た副詞だから「根氣よく」に當る。それで pursue a worthy object……with all the powers of his mind 迄は「心の全力を傾けて確實に根氣よく立派な目的を追ひ求める」である。それで文の表面から見ればこれが no one can に直續するのだから「求める事は誰れも出来ぬ」と云ふ打消になるが、次の and yet 以下まで續けて見ると make となつて makes とはなつて居らぬ、即 no one can make his life a failure と續くべき文である事が明かだ、否此

れが全文の中心をなして居るので「立派な目的を pursue して而かも失敗する事はある得べからず。」が眞の狙つた文意である事を考へられよ。

【譯】 何人も心の全力を傾けて確實に根氣よく立派な目的の達成に務め、而かも自己の一生を失敗に終らしむる事のあらう筈は無い。

〔附〕 此の問題は打消が一文全體を支配する場合の一例であつて次の様に書き更へられる。

It never happens that
There is no case where a man can pursue a worthy object steadily and persistently, and yet make his life a failure.

“not nearly”

“nearly”は「殆んど」の意であるから“not nearly”は「殆んど……で無い」と譯しがちであるが此れはもつと強い言葉で「遙に……で無い」「中々……でない」に當る。

例文 A.

Learning is not nearly so important as tact in the transaction of business. = Learning is far less important than tact in the transaction of business.

商業取引には學問は才略よりも遙かに必要で無い。

例文 B.

The things which happen in our own times, and which we see ourselves, do not surprise us near so much as the things which we read of in

times past, though not in the least more extraordinary.

【註】 near so much as は又 half so much as と云つてもよい所で「決してこれ々々程に我々を驚かさぬ」と譯すべきである。which we read of in times past の句中に“of”のある事を見逃すべきで無い、即「吾人が讀んで知る昔の事共」に當る、「昔我々の讀んだ事」では無い。though not in the least more extraordinary(決してそれ以上異常なものでは無いが)の一句は things which we read of in times past を形容する積りの句である、即「決して珍しい事では無いが昔あつた事で我々がたゞ讀んで知つて居る事の方が吾々を驚かさぬ」意を云はうとしたのであるが文脈としては亂れて居る。though 以下はどうしても Things which happen in our own times を形容するものと見なければならぬのでそうすると though far more extraordinary とでもせればならぬ事になる。

【譯】 現代に起つて吾人が眼前見る事は過去に於て、決してそれ程異常なものでは無いが吾人の讀んで知つた事柄ほどには到底吾人を驚かさぬ。

not half so much.....as..... が「……の半分も……で無い」意から「遙に……で無い」意となるを知るべし。例は、

- { He is not half so clever as his brother.
- { 彼は利發な點は遠く兄に及ばぬ。
- { The result was not half bad.
- { 結果は決して悪くは無かつた。

問題

52. Respect yourself and others will respect you. Self-respect means to keep oneself above meanness, not nearly paying oneself undue homage.

53. He is quite as good a teacher, but not nearly so good a scholar, as his brother.

Implied negatives

打消の意味を明瞭に打消の言葉を用ひて云ひ表はさず
に圓曲に其の意を含めて云ひ廻す事は何處の國語にもよくある事であるが其れが外國語のになると何だかまわりくどく思はれてハッキリせぬ事がある。こゝには此の部に屬するものを取り纏めて見たいと思ふ。

I. Little, less, least の作用。

He is as diligent as ever. と云へば「彼は相變らず勉強だ」「以前に劣らず勉強だ」。であるが、*He is as little diligent as ever.* とすれば「相變らず不勉強だ。」と云ふ事になる。此れは其の quality (質) なり quantity (量) なりの 少なさ加減 を表はす形式で斯う云ふ場合には思ひ切つて「……で無い」と打消しに譯してしまふがよい。同様に其の比較形 *less, least.* も此の打消の意味を含んで用ひらるゝ事が多い。

{ This fact shows *how little* chance has to do with real success.

{ 此れで見ても眞の成功には、まぐれ當りと云ふものの無い事が知れる。

{ He was cleverer, but *less* courageous than his elder brother.

{ 彼は兄よりも才は勝れて居たけれども勇敢で無かつた。

例文 A.

We are creators in the intellectual world as little as in the physical. We may remove obstacles, and render latent capacities active, but we can not suddenly change the nature of men.

【註】 —creator, 創造者、造物主。intellectual, 智的。physical, 物質的。obstacles, 邪魔物、障碍。to render active, 活動せしむる。latent, 潜在の。capacity, 能力。

【譯】 吾人は物質界に於て創造主たらざると均しく智的世界に於ても然らず。吾等は障碍を除去して他人の潜在せる智能を啓發する事は得べきも人間の個性を急變せしむるを得ず。

【附】 Creator (は to creat (無より有を作る、創造する)より作る語で「造物主」「神」の意である。宇宙萬物皆神の造る所で人間は一物とて創造すると云ふ事は出来ぬ、其れと同様に白痴を賢人にする事も出来ぬと云ふのである。猶此處の as little as (は no more than に通ずるもので “We are *no more* creators of the intellectual world *than* in the physical” としても同意である。 (“no more than” の項参照)。

to render は “to give” が基の意、to render service (奉公をつくる) 等用ふ次で「どう云ふものにしてやる」意となつて to make, to cause to be に等しくなる、此處の to render active がそれである。

Capacity は「包容力」が原意である、即「to take in する力」の意で「容積」にもなれば「能力」にもなる。形容詞の capacious (廣い) も capable (……し得る) も同様の言葉である。

{ Sponge has a great capacity for moisture.

{ 海綿は濕氣を吸收する容積が多い。

{ Immense capacity for good as well as for bad was found in his nature.

{ 彼の性質には善にも強ければ悪にも強い所があつた。

此の後の例にも見る如く capacity は潜在能力 (latent capacity) の意が元來の語義である。

例文 B.

Least of all should boys think that it makes men of them to imitate the vices of men.

【註】 —to make a man of 一人前にする、大人にする、vice 悪徳、よくない行爲。

【譯】 何よりも先づ子供は大人の悪い所を眞似することが大人になる道だと思つてはならぬ。

【附】 Boys should think は「子供等は考ふべし」に當るから此れに“first of all”を附ければ「第一に考ふべし」と云ふ事になる、所が“least of all”だと「何よりも最も少く」の意で例の negative sense を帯びて來るのである。此文で *should* boys think, と *should* が先きへ出たのは“least of all”と云ふ副詞句が其の意味を強めるために文の冒頭に出たのに誘はれたのである。

II. “might as well……as”

有る事を有るがまゝに云ふ形を Indicative mood と云ふ、此れが普通規定の動詞の形を用ふる文である。ところが今現在に關係のある事柄でありながら過去の動詞形を用ひたり *will do* でなくて *would do*, *may be* でなくて *might be* と云ふ様になると通り一遍の事實でなくて裏に negative sense を含む事になる。此れと云ふのも事實の反對を假想する subjunctive mood を用ひた條件文の片割れなのであるから此の事は別項“would have done”等で猶説く事として此處には“might as well……as”だけに就て考へて見やう。

元來“*may as well……as……*”の構文は「何々しても又何々してもどちらでもよい」の意であるが日本

語でも「腹が減つたから何か一つ食べてもよい」など云ふとそれが「食べた方がよい」意である如くに *may as well* も「……した方がよい」即“had better do”に通じた意で使ふのである。

If you are also of my opinion we may as well begin at once.

君も僕と同意見なら僕等は直ぐに始めた方がよい。(we may as well begin at once as not.)

One may as well leave a thing untried as leave it half-done.

物事を半分やりでやめる位ならば全然手を着けぬ方がよい。

此の *may as well……as* が *might as well……as* と變ると「……する事の非なるは猶……することの非なるが如し」と云ふ様な negative の對立を意味する事になる。

You might as well reason with a wolf as try to persuade such a person.

そんな人間を説諭する位なら狼に道理を説いた方が増しだ。

要するに此れは或事の無益、不可解又不條理なる事を云はんがために極端な例を對照に持つて來る云ひ方なのである。

問題

54. You want to prevent a woman from talking; you might as well try to turn the course of the Danube.

III. "More than"

或る程度より以上であると云ふ事は要するに其の程度で無い事になるので、more than..... が negative meaning を帯ぶるは自然の理である。例ば

It is more than flesh and blood can bear.

と云へば「其れは神ならぬ身の到底堪えられぬ所だ」に當るので *It is past endurance* などとも云ひ換え得やう。(flesh and blood は「肉と血」だから普通の人間に當る)。

“More than” が斯く negative sense を表はす場合は多く上例の如く “than” が clause を従へる場合であるが猶その外 more than を一個の adverb の如く働かす場合がある。例ば

He is living more than moderately.

に於て moderately は「適度に」の意から「つゝましやかに、派手で無く」の意であるからそれ以上にとは「不相應に」を意味する事になるのだ。即其の文は「彼は不相應な暮しをして居る」である。

例文

At length even the task of burying the dead was more than the living could perform, and

the bodies were tossed into the stream, or left for beasts of prey.

【註】 the dead, the living 共に「人」を意味する事。more than could perform が「.....し切れぬ、やりかねる」に當る事。to leave for が「捨て置いて.....に任せる」意味。beast of prey が「他の小動物を prey (生餌)にする猛獸」。

【譯】 遂に死人を埋葬する事さへも生存者の爲し果し切れぬ事となつたので屍は河に投げ込んだり猛獸の食ふに任せて捨てられたりするに至つた。

問題

55. Many people eat more than they require; not a few as much as would be sufficient for two, nay, even three persons. Excessive eating not only forms a waste of national wealth, it also injures the health.

Note

More than には猶一つ大切な役目がある。それは其程度を超ゆる位にの意から exceedingly (非常に)の意を表す事である。例ば

He was more than pleased with the happy result.

彼は好結果に喜んだ所ちや無い狂喜した。

の如きである。此れは前に説いた more than moderately (不相應に)と衝突する様に見ゆるが考へ方は同一なので不相應と云ふ事が不相應に贅澤を意味する事も又不相應に貧しさうにを意味する事もあり得るであらう、たゞ moderately と云ふ語の性質上前者の場合が

普通になるので *more than pleased, or happy* は「喜ぶ以上」から喜ばぬ意とは成り得ぬ事は一寸考へても解る事と思ふ、同様に *I was more than surprised* が「驚いた所ぢやないビックリ仰天した」意になる事も合點さるゝであらう。次の二文を比較して見られよ。

{ *The girl was dressed more than modestly. (=far from modestly.)*

娘は「穩やかと云ふ程度を超えて」即ち寧ろ贅澤な身なりをして居た。

{ *The girl was dressed more than poorly. (=very poorly.)*

娘はみすぼらしい所では無い酷いなりをして居た。

例 文

By this method he gained money enough to purchase, in order to sell again, a few cows, of which he had taken pains to understand the value. And the final result was, that he more than recovered his lost possessions, and died a miser.

【註】 *in order to sell again* (再び賣るために) の一句は *he gained money enough to purchase a few cows* (數匹の牛を買ふだけの金を得た) の間に割り入れである、即ち仲買してもうける資本の金を得た意だ。

of which 以下を次の如く書き直して見よ。

the value of which he had taken pains to understand.

其の牛の價値を理解する様に彼は苦勞したのだ。

原文では *the value* を *understand* のすぐ次に置いてあるので、*of which* の *of* の處分に一寸迷ふ人ありはせぬか。

to take pains の *pains* は複數形で、「苦心、骨折」の意。 *to take pains to do.....* は「苦勞して.....する」意なり。

the final result は「最後の結果」で *the final result was, that* は「最後の結果は.....であつた」意から「とゞのつまりは.....」に當る。

He more than recovered は「.....を恢復して餘りあつた」意即ち此處の *more than* は積極的の意を表す一例である。

He died a miser は *He was a miser when he died* の idiomatic expression で、「彼は守錢奴となつて死んだ」意になる、文法に所謂名詞 "*miser*" は complement (補足語) として用ひたものと云ふべき例である。[P. 79 "complement" 参照]

【譯】 此の方法に依つて、彼は數匹の牛を再び賣るために買ふだけの金を得た。彼は牛の價値の理解が出来る様に苦勞したのであつた。そしてとゞのつまりは一度失つた財産を回復して餘りあるに至り、守錢奴となつて一生を終つたのである。

IV. "No more than" と "no less than"

"Implied Negatives" の項に加えるには稍當を得ぬけれ共特別の色彩を帶ぶる negative form として *no more, no less* の用法を此處に研究して置く。

「彼は普通の人でない」と云ふ所を「彼はたい者でない」と云ふと其の言葉に底意が含まれて來る。此れは名詞に底意を持たせた一例だが英語で斯る場合を「でない」の云ひ方で表はす事が出来る、例ば

He is *not* an ordinary man. と云ふのを

He is *no* ordinary man. と云ふと

上の和文に稍似た底意を含むことになる。元來言外の意を含む言葉は普通の云ひ方の軌道を外れた所に生命がある。英語で打消は“not”と“no”を用ひて表はすのだが其れには各々受持がある。即ち物の存在、所有等を云ふ時の否定(……がある、……が無い)は“no”を名詞に附けて There is *no* man. とか I have *no* book, とか云ふが常であり。反之、物の性質状態を否定する(……である、……で無い)には動詞を not で打消して It is *not* a good book. とか I am *not* better to-day. とか云ふのが普通である。今此の各自の受持を轉じて There was *no* man. と云ふ代りに There was *not* a man. 又は There was *not* a soul. と云ひ。I am *not* better. と云ふ代りに I am *no* better. とすれば其の常軌を脱した所に底意が胚胎して「人、子一人も居なかつた」; 「私は一寸も快くは無い(寧ろ悪い位)」に相當する文となる。蓋し *no* なり *not* なりが *not any* と云ふ程の語氣を持つ様になるからなのである。それで次に擧げた三つの文を考へて見る。

A. The sum paid was *not more than* 100 yen.

B. The sum paid was *no more than* 100 yen.

C. The sum paid was *no less than* 100 yen.

A 文は「支拂金額百圓を出でず」と云ふ單に事實を述べるに止まる、同様に *not less than*…… とすれ

ば「…を下らず」に當るので此れ等は只數理的に \leq, \geq の符號を言葉に表はしたまでである。

B 及び C 文に至つては此の事實に感情が伴ふ。即ち B 文は「支拂金百圓に過ぎず」(The sum paid was *only* 100 yen.)

C 文は「大枚百圓に達した」に當る。事實は同一でも B はその金額の小きを云はむとし、C は其の少なからぬを云ふ。

扱て *no more than* (=not any more than) が數量の少き感じを表はすのが、やがて轉じて事物の *negative quality* (「……なるに過ぎず」「甲の……ならざるは乙の…ならざるが如し」)を表はすに用ひられる、此れに對して *no less than* (not any less than) は數量の大なる感じより轉じて比喻を以て事物の *positive quality* (甲の……なる事猶乙の……なるに異らず)を表はす。例ば

a. He noticed the bustle *no more than* a deaf man.

彼は喧嘩に心を留めぬ事聾者に異らざりき。

b. He loved me *no less than* if I were his own son.

彼の私を愛する事眞の子を愛するに異らざりき。

上の a 文に於ては「彼の雑音を意に介せぬ」と云ふ *negative quality* を聾者に比して表はし、b にては「自

分を愛する」と云ふ positive quality を眞の子に比して表はしたものである。同じく「異らず」と云ふても其の negative quality (……でない、……せぬ、と云ふ否定の性質) と positive quality (…である、……する、と云ふ肯定の性質) との云ひ表はし方が一寸した所で判然と區別されるのである。

此處迄は別にさ程面倒な事は無いが此處に一つ特に注意すべき點がある、其れは同じく不可能、不條理を表はすに他の比喩を持つて来る云ひ方に此の “no more……than” と前出の “might as well…as” とがあるが前者は「…の……ならざるが如く……もならず」と比喩の句が than の次に來るに對して、後者は「……が…である程なら……も……だ」と比喩が先きへ出る、同一事項を下の様にならば二様に書き分けて比較に便する、よく彼此見較べられよ。

個人の大は其の身長もて量る可からざると等しく國の大も其の面積もて判す可きに非ず。

a. Nations are *not* to be judged by their size *any more than* individuals.

b. You *might as well* judge a person by his size *as* a nation by its dimension.

愛の無い家庭を家庭とし云ひ得るならば魂の無い肉塊を人間とも云へやう。

a. A home without love is *no more* a home *than* a body without a soul is a man.

b. You *might as well* call a body without a soul a man *as* a home without love a home.

例文 A.

Activity is not energy any more than motion is progress. A man may be incessantly busy and yet never advance. Misdirected effort is only a waste of activity.

【註】 Act→active→activity で activity は「活動」である、が此處では確たる目的も無く、やたらに動き廻るのを指す。motion は「運動」であるが一尺進んで一尺退るのも motion である、が併しそれは progress (進歩) には無い。

incessantly は unceasingly だ「少休み無く」である、寸時も席暖かならぬ人にして少しも advance (進む) せぬ人がある、此れは努力 (effort) の用ひ所を誤まつたので、狙ひの違つた (misdirected) 努力は所謂徒勞 (waste of activity) だと云ふのである。

【譯】 運動必しも進歩ならざるが如く活動必しも精力を意味せぬ。絶えず忙殺さるゝ人にして少しも進まぬ人もある。狙ひを誤まつたる努力は單に徒勞と云ふものである。

例文 B.

He always kept his appointments, and would no more think of taking other's time by tardiness than their money by theft.

【註】 appointment は先約又は豫約である、殊に會見の時日等の約束を云ふ。tardy はぐづぐづしたのを云ふ。“by tardiness” で「ぐづぐづして」、tardiness は promptitude (テキパキ、敏活) の反である、theft が thief の爲す行爲である事を知られよ。think of~ は「思ひ

及ぶ、……しやうなぞと思ふ」であるからそれを打消して He does not think of—ing とすると「夢にも……しやうなぞと思はぬ」意になる。

【譯】 彼は常に約束を守つて、ぐづぐづして他人の時をつぶす事などは、他人の金銭を盗み取るに等しく、彼の決して思ひもよらぬ事であつた。

〔附〕 “no less” に就て。

“no more” が negative quality を表はすならば “no less” は positive quality を表はす。そしてそれが何かある標準を置いて其れに劣らず……の心を表はすのである。たゞ其の標準を見失はぬ様にせればならぬ。

no less には又次の様な idiomatic use がある事を承知して置かれよ。

a. He is no less a person than the illustrious statesman B.

彼は誰あろう有名な政事家 B だ。

b. We expected nothing less than a revolution.

〔此の文は次の二意を表し得る〕

a. 吾々は革命位起る事と思つて居た、(“nothing less than” “……より決して少く無いもの” で “as much as” の意。)

b. 吾々は革命ほど豫期せぬものは無かつた。(nothing を less than が形容して “……より少いものは決して豫期しなかつた” 革命を最も少く豫期して居た、) 意で Revolution was the last thing we expected. に等しい。)

例 文

My house is perfect. By great good fortune I have found a housekeeper no less to my mind, a low-voiced, light footed woman of discreet age, strong and clever enough to render me all the services I require, and not afraid of solitude.

【註】 此の文で no less の對照を見出す事が必要だ、「何より less で無い」のである、が、かかる文は no less の眞意が「それに劣らぬ」即

equally である事を考へて、to my mind が「私の心に適ふ或は適はぬ」意を以て My house is perfect からずと讀んで見られよ。さらば「私の家は完全で又幸にもそれに劣らず私の氣に入つた女中が見つかつた」意に讀み取れるだらうと思ふ。即 no less perfect to my mind なのである。

housekeeper は「家事向の事を掌る人」で普通の家ならば細君のする仕事を大家では女中頭がやるし獨身者の家では雇つた人がそれを housekeeper と云ふのだ。

discreet age は「分別盛りの人」で四十前後を指す。

to render は「爲し與へる」が元の意、to render service で「奉仕する、仕える」である。

【譯】 私の家は申分無い。實に運よくも同じく私の心に適つた女中を見つけた。分別盛りの年頃な、聲が低くて足の軽い女で、一切私の世話をして呉れる丈に丈夫で利口で、そして一人で居ても怖がらない。

問 題

56. Persons do not become a society by living in physical proximity, any more than a man ceases to be socially influenced by being so many feet or miles removed from others.

V. Last.

「最後の」と云ふ心は「最も……に遠い」意から「最も……せぬ」てふ negative sense を帯びて來る。丁度 “far from” が「似もつかぬ」「遙か……ならぬ」意と同じである。

{ You are the last man whom I expected to have met here.

{ 此處で君に會はうとは思はなかつた。

{It is far from my intention to do so.
 {そんな氣は毫も私には無い。

“Last” の此の用法に對して知つて置くべき事は「最後」が「極度の」の意となつて greatest に通じる場合のある事である。

This is a matter of the last importance.

此れは最も大切な事である。

かく一語で positive, negative の兩様に用ひらるゝ例は他にもよくある、例ば priceless の如き「値無き——無價値の」及び「値の附け様の無い——最も貴き」の二意を有するので a priceless gem は an invaluable gem と同じ事になる。此の如く -less, や in- 等打消の語尾や接頭詞が無類、無上の意となる事は珍らしく無いのである。(priceless が「無價直」の意になる事は極稀である。)

例文 A.

A bad habit is the last thing that most of us are afraid of. We think that we are acting always from our choice, that it is no matter what we do now, because another time, whenever we wish, we can do differently. But all the while a certain habit is forming and hardening, until we at last find ourselves helpless.

【註】此の文で last の意味さえ取違えずに譯せば外に面倒な語句は

無い。all the while は「上の様に思つてうっかりやつてゐる間に」の心である。helpless は「助け無し」に非ず「力無し」である、此れは self-help の力無い意味で helpless infant など云ふ。

【譯】悪い癖は吾人の多くが最も怖がらぬものである、吾等は常に自分の判断で動いて居ると思つて居る。今やつて居る事は別に大事にはならぬ、いつでも欲する時に改める事が出来るからと思ふ。所がその間に早や一つの習癖が形造られ固定しつゝあるので遂に如何ともなす事が出来なくなるのである。

VI. Be+Infinitive.

此の形は未來を表はす性質のものである、例ば The funeral is to be performed to-day. (葬儀は今日行はれる筈)の様。従つて此れに類する形式が或る場合には「未だ……せず」と云ふ打消を意味する事になる。例ば It remains to be proved. の如きがそれである此れなどは「其れが證明される様になつて居る」など譯せば文の眞意は捉えられて居らぬ、須く「其れは未だ證明されぬ」と譯すべきものである。

例文 A.

All that he had learned only made him feel how little he knew in comparison to what remained to be known.

【註】how little は how much と對照して「如何に知る所の少きか」「如何に無學であるか」と negative の心を表はすに注意すべし。in comparison to は compared with で「……に比して」と云ふ phrase preposition である。で what remains to be known = what was unknown to him と知られよ。但し此の文の筆法が「彼の學んだ事」が「彼の無學を感じしむるのみ」だつたと云ふのであるが、その心は「學

間を積み積む程益々知るべき事の多く先きにある事に気が附いて、己れの不足を自覚せしむるのみだつた」事を考へて譯さねばならぬ。

【譯】彼の學び知る事皆、彼をして如何に彼の知る所が彼の未だ知らざる所に比して少きものなるかを悟らしむるのみであつた。

57. A youth in choosing a career, must not be alarmed by poverty. Want is a sore thing, but poverty does not imply want. It remains to be seen whether with half his present income, or a third he cannot live as fully as at present.

“Not so much……as”

- a. I was not so much offended as he.
b. I was not so much offended as surprised.

比較對照に便な爲めに似つかはしい二つの文をこゝに擧げた、not so……as は「……ほど……でない」である事は云はずもがなである、ところが其の相對する比較が二つの subject の比較をする場合と。一つの subject の有する quality の比較をする場合とある、即、a. A は B ほど……で無い。b. A は……であるほど……で無い。と云ふ事である。で此處で問題にするのは b. の場合なのである、簡単に云へば「A は賢者であるほど仁者で無い」と云ふ云ひ方は「A は仁者なるよりは寧ろ賢者である」と云ふのと同じ事である。即「A は仁者では無くて賢者だ」と絶對的に云つて退けずに比

較的に、相對的に云ふたのである、例ば He is not clever, but diligent (彼は賢くは無いが勉強家だ)と云ひ切らずに He is not so clever as diligent (彼は勉強である割りに頭はよくは無い——頭が善いと云ふより勉強家の方だ)と云ふ、換言すれば He is rather (or more) diligent than clever. と云ふ事になる、とかく世の中が開けて行くと云ふ事まで直裁簡明に「……ぢや無い……だ」とせず「……と云ふよりも……の方だ」と餘裕を存して圓曲に云ふ様になる。此の邊の語氣をよく呑み込んでかゝる必要がある。

で最初に出した二文の譯は、

- a. 私は彼ほど怒らなかつた。
b. 私は腹が立つよりは寧ろ驚いた。

例文 A.

A man's worth lies not so much in what he has as in what he is.

【註】——worth, 價值。to lie in…… —……に存す。

【譯】人間の價值は彼の財産にあるよりも寧ろ彼の人物如何にある。

【附】to lie in~ は to consist in~ と云ふ、「……にありて存す」の意。例

The remedy for the present unrest lies in the proper management of the poor.

現代の不安に對する救濟策は貧民の適當なる統御にある。

what he is は「彼が實際ある所のもの」で「實際の人物」に當る、

what it is (ありのまま、實狀)など一所に知つて置くべき句である。例
I do not exaggerate it at all. I tell you only what it is.
決して誇大したりはせぬ、事實ありのまゝを云ふのだ。

例文 B.

After the introduction into Europe of cotton and linen rags as materials for paper-making, the use of other vegetable fibers was for many centuries entirely or almost entirely, given up; not so much, however, on account of their unfitness, as because rags, besides being, admirably adapted for the purpose, were cheaper than any other material.

【註】 —introduction 用途が開かれた事、materials for..... の材料。vegetable fibre 植物繊維。be given up 廢せられる。be adapted for— 適當する。

【譯】 木綿やリンネルの襤褸が製紙材料として歐洲に知らるゝに至りてより他の植物繊維の使用は全く——でなくば殆んど全く、數百年來廢されてしまつた。其れは併し植物繊維が不適當だと云ふ理由より寧ろ、襤褸の方が製紙の目的に立派に適するのみでなく他の材料よりも廉價であるが爲めである。

【附】 Introduction は「紹介」である、場合に依つては「輸入」「移植」等色々に譯し得るが此處では「襤褸の輸入」、では變である、此れは introduction of the use of rags の意で譯さればならぬ。

be adapted for. to adapt は「適應せしむる」「改作する」の意此れは apt (適當な)に ad- がいたので、adopt (採用する、養子にする)と誤られやすい言葉である。それで、be adapted for~ は「~に適して居る」意となるのである。

序に注意して置き度いのは on account of their unfitness; because the rags were cheaper の云ひ方の比較である、前者は preposition に相當する句であつて其の次には名詞又は名詞句が従はねばならぬ、後者の because は conjunction だから the rags were cheaper と云ふ様な clause (句)が置かれる、此れを混じて on account of they were cheaper 又は becau unfitness と云ふ事が出来ぬ、ところがさう云ふ誤文がよく學生の作文の中に見出さるゝのである。

例文 C.

It is not the greatness of a man's means, that makes him independent, so much as the smallness of his want.

【註】 —means 財力。independent 獨立。wants 慾望。

【譯】 人に獨立を與ふるものは其の財力の大にあらざして寧ろ其の慾望の小にある。

【附】 此の文では大切なのは means の意味の取り方である。means は「手段、方法」の意から轉じて(世の中の事萬事金次第だから)「資金、財力」の意になるのである。例、

{ He is a man of means.

{ 彼は資産家だ。

{ I wished to enter a college but I lacked the means to do so.

{ 私は大學に入りたかつたが學費がなかつた。

wants は「生活に必要ななりとして要求するもの」の意で多く複数形にて用ふ。例

He is a man of few wants.

彼は寡慾の人だ。

以上の如くに “not so much.....as” 又は “not.....so much as” と分裂して用ひらるるに非ずして “not so much as do” とくつついて用ひる別の場合がある、此の時は “not so much as” は “not

even” に等しいので「……ほどにもせぬ、……だに、無し」に當るのである。例ば

He did not so much as say good-bye to me.
彼は僕に「さよなら」とさへ云はなかつた。

例文 D.

He flatly refused the proposal they made, without so much as touching the proffered money.

【譯】 — flatly キツバリと、ニへも無く。proposal 提議、相談。proffered 差し出された、提供された。

【譯】 彼は其處へ出された金を手にさへ觸れずに彼等の申し出でをキツバリと断つた。

問題

58. What is needed as to preparation for a lifetime's work is not so much to store up knowledge, but rather the power to gain, assimilate and use it.

59. It was not so much the German soldier as the horrible principles he was fighting for, that the Canadians wanted to defeat.

If に就て

“if” は subjunctive mood に限つて用ひらるゝ conjunction で無い。indicative mood が “if” に導かるる場合が往々ある。従つて其の従ふる句が「……ならば」と譯して當らぬ事がある。例ば

If he is short tempered, he is not at all ill-natured.

よし彼は短氣であつても、決して不良な性質ではない。

If he be (or, is) short-tempered, he may also be ill-natured.

cp. もし彼が短氣ならば、亦性質も善く無いかも知れぬ。

If he did so, he was quite justified.

よし彼が左様したにせよ、全く理由があつたのである。(過去の行爲に對する批判)

If he did so, he would be justified.

cp. もし彼がそうやれば正当なのだが、そうせぬからいかぬ(現在の假定)。

例文 A.

If boys have naughty, low, mischievous tricks in their nature, as monkeys have, that is no

reason why they should give way to those tricks like monkeys, who know no better.

【註】 trick と云ふのはいやな言葉である、正々堂々立ち向はずにコツソリ何か謀を巡らしてやる巧みを云ふ、「策」とか「手だて」とか云ふものである、手品師の藝も trick なれば瞞着手段も trick である、悪戯も trick である、mischievous tricks は「悪戯癖」とも譯そうか。それは決して無邪氣なものではない。

naughty も low も似たものだが naughty boy (不従順な子供) と云ふ様に naughty はよく子供の不良さを意味する、low は base で「卑しい」である。それで此處の “if” は「よし……があるとしても」と譯すべき所である、次に to give way to~ の一句が肝要である、「道を與へる」と云ふ事は「拒まずに自由に通す」事である、従つてこう云ふ場合に此の句が使はれる。

{ The floor gave way under the weight of so many people.

{ 大勢の重みで床が抜けた、(支え切れなくなつて落ちた)

{ You must not give way to your passion.

{ 汝の情熱に左右されるな、(情熱の力に抗せずそれをほしきままに荒れ狂はす意から)

それで to give way to some feeling は「或感情に負ける」意で「それをほしきままにする」意となるのである。

【譯】 よしんば少年が猿の様に不良な、卑しい、悪戯癖を持つて居たとて、彼は猿の様にその癖を恣にしてよいと云ふわけは無い。猿は何等それに優る事を知らぬのだもの。

【附】 who know no better (即ち who know nothing better than that の意、即「猿は外に何等の能がない」意である。

例文 B.

The express train takes four and a half hours to make the journey from Alexandria to Cairo.

If the change in the open country and the climate is extraordinary, as one proceeds southward, no less so is that between the seaport and the capital.

【註】 此れはエザプトの港である Alexandria からその首府たる Cairo へ旅する時その中間の風景や氣候の變化が素的であると同時に此の二つの都邑の差違も又甚しい事を云ふのであつて此處の if は「……であるけれども」である。Cairo は Alexandria の南方、ナイルに沿ふた内地にあるので as one proceed southward (南へと進むに従ふて) と云ふたのである、no less so は no less extraordinary であつて no less が「それに劣らず」と譯さる可き所だ、此れは Implied Negatives の項を参照してその「決して劣らぬ」意のある點を研究され度い。

【譯】 アレキサンドリヤからカイロへ旅するには急行列車で四時間半かゝる、南へと進むに従ふてその廣漠たる外野と氣候の變化も著しいけれ共アレキサンドリヤ港と首府との差異も決してそれに劣らず目醒しいものである。

例文 C.

Give, and you may keep your friend if you lose your money; lend, and the chances are that you lose your friend if ever you get back your money.

【註】 Give and you may…… の書き出しは例の「……せよ然らば云々」の條件例である。

you may keep your friend 「汝は己れの友を失はずに居る事が出来やう」。之につづく if you lose your money を「汝が金を失ふならば」では文意がへんなものになる、最初から Give と云つて居るのだから、即「友人に金を貸してやれ、さうすれば、金は失ふても友は失はずにす

む」と解釋せればならぬ。次の文句も同一筆法である。

the chances are that..... 「多分さう云ふ事になるであらう。」 *the chances* は「將來の見込み」の意で定冠詞づき複數形に用ひる、例は

The chances are against him.

彼の勝つ、又は成功する見込無し。

の如く。

you lose your friend etc. は借金を催促して取戻せば相手の心は離れてしまふをいふ。

【譯】 與へよ、然らば金は損しても友は失はずにすむ。貸したらば、たとへ金を取り戻す事はあつても汝の友は失はれるであらう。

“As” (I)

“As” の特別な用法ではあるが多く試験問題などに出る人の多い形であるから *as=though* の場合を先きに練習して置く。此れは形容詞(時に動詞又はその分詞形)を先きに出して次に *as one does (or is)* の句を置く形で「何々である(又はした)けれども」の意を表はすのである、例は

Young as he is, he is equal to the task.

年こそ若けれ彼は其の仕事はやりこなせる。

此の“as”を用いた句は主として事實を擧げて「併しそれでも」と云ふ場合で“even though”の如き假定の句と異なるのだ、例は

Even though you were a genius you could not expect to accomplish it.

かりに君が大天才としてもそれは成し遂げ得られまい。

の様な。

例文 A.

Already of a good age as the great statesman was, death came to him too suddenly and a year or two too early to let him accomplish the task he had, for years past, been engaged in.

【註】 *already of a good age.....* は單に *old as he was.....* としても大異無い。「大分な齡に達してゐたのだ(から死んだのも仕方が無い)か」と云ふ心。 *to let him accomplish the task he had been engaged in* と續けて考へて *to let him* が「彼をして成就せしむるには(死期が早過ぎた)」と解せられよ。 *for years past* は「死ぬ前幾年も續けて」の意で *engaged in* を形容する事勿論だ。

【譯】 彼の大政事家は既によい年齢であつただけ共、彼が數年來從事して居た仕事を大成せしむるには死期が餘り急で、一二年早や過ぎた。

例文 B.

The wisest thing we can do is cheerfully to make the best of our situation, for, struggle as we may, we can never be completely satisfied.

【註】 此處では“*struggle as we may*”の句が中心になつて居る、此れは *struggle as hard as we may=However hard we may struggle* の省略句と見るがよい。此れ等は所謂 *concessive clause* (讓歩の句)であつて「如何に.....しても」に當る、(其の項参照)。其の他の語句では *to*

make the best of~ 此れは「不十分な事、不利な事情をも成るべく善用して有利にする」的の意である「善きものを善きが上にも出来るだけ利用する」意の“to make the most of~”と對なす句である。だから“to make the best of our situation”とは「不満足な境遇とてもそれを不満に思はずに出来る丈善用する」意と知るべし。

【譯】 吾等の取り得べき最も賢い途は吾等の境遇を不足を云はずに最も善用する事である。何となれば、人間如何に踴いても完全に満足する事は出来ぬのだから。

問題

60. Young as he was, there was visible, in his countenance much of genius, manly dignity, and determinate resolution.

61. Divided as they were politically, they were, nevertheless, united by a certain national feeling.

62. Much as sheep look alike, there is a difference between them, and John knows one from another.

63. Cold and dreary as it was in Manchuria, our soldiers were quite at home, and equal to any task whatever.

As (II)

前説の *as=though* の句と形式に於て甚だ相似たるものにして全然その意を異にするものあり、特に動詞の分詞形を *as* の前に出したる句がよく見受けられる、それはありふれた Participial phrase (軽い理由や条件を表はすもの)に過ぎぬのであるけれども、外見が一寸似て居るものだから、うつかり“Poor as I am...”流の語法と取り違へるのである、下例を見られよ。

One cannot accomplish anything, tiring of everything as he does.

彼のように何事にも倦きては人間何にも成功は出来ぬ。(as he does の does は tires である)

上文の配列を變じて

Tiring as he does, one cannot accomplish anything. としても決して差支へ無い、がさてそうして此の文を眺めて見ると……なる程似て居る。猶此れが past participle の場合には一層形式が似て来る。

Armed well as they were, they were quite ready to fight.

充分に武装して居たものだから彼等は戦はんと手薬煉引いて居た。

さて此の二種の場合をどう見分けたらと云ふ心配があるだらうがそれは別に何も無い、要するに文の前後の關係を察して見れば自づから明らかになる事である。

例文 A.

Made as we are, there are certain pains without which it would be difficult to conceive certain great and overbalancing pleasures.

【註】 Made as we are は Born as we are としてもよろしい。その前に Being を附けて考へて見られよ、「神ならぬ吾人、人間が作られてゐる如くば」の様な意で「人間の本质として」「吾人の元來の生れつきとして」とても譯すべき所である、ひどい云ひ方をすれば「人と云ふものは元來出来ぬ出来だから」とても云ふ所だ。次に大切な語は *conceive* である、此れは「考へる」と譯すが普通だが、元來此の語は *receive*,

perceive と同類で to take, to hold が基の意である。即ち to conceive は to hold in one's mind の意で従つて to cause to spring up in one's mind 「心に抱く」とか to engender 「心に生み出す」とか云ふ意である、to conceive a violent hatred (強い憎念を抱く)とか to conceive a perfect man (完全無缺の人格を心に考へて見る)など云ふ句を覚えられよ、それで此處で conceive a pleasure とふのは何か或る崇高な(文藝とか哲理とか云ふ様な)快樂を心に抱く即ち「體感する」「體得する」意味である。

pains は「痛み」でなく「苦勞、心配」である、He takes much pains in the education of his boy、(彼は子供の教育に非常に骨を折る)等の文がある。

全文の意は、人間元來不完全なものであるから或偉大な快樂を體得するには相當の苦勞無しでは出来ぬ、と云ふ様な心である、よく No gains without pains (勞せずして得る事なし)と云ふ語があるが、それをもつと六ヶ敷く高尚な事柄について云ふたのである。

overbalancing は「天秤にかけらぬ様な」「無量の」の意。

【譯】 人間の本质として或苦勞なくしては何かある崇高な無量の快樂を體感せむ事至難である。(或至大の快樂を體感するには拂はねばならぬ或苦勞がある)。

例文 B.

Taken as I was by surprise, I confess that astonishment and terror so far mastered all my faculties that, without daring to cast a second glance towards the apparition, I walked rapidly back into the garden.

【註】 此れなぞは As I was taken by surprise..... と改めてしまへば何でもない。或は又 As I was を全く削つて、Taken by surprise..... としてもよろしい。實際は此の後の方の語勢に類してゐるので as I was は所謂 parenthetical clause (括弧句)である。

to take by surprise は「不意を襲ふ」意だ、「驚かす」とは稍違ふ。so far mastered.....that は so.....that と大差ない、此處の to master は打勝つ意で「挫く」とても譯せばよい。apparition は to appear から作るもので「現はれた現象」の意から怪物、化物である。

【譯】 私も不意を打たれたので實の所驚愕と恐怖が私の意力を全く挫いてしまつて、私は怪物の方を二た目と見もやらず足早に庭へ逃げ歸つた。

例文 C.

Although money ought by no means to be regarded as a chief end of man's life, neither is it a trifling matter, to be held in philosophic contempt, representing, as it does to large an extent, the means of physical comfort and social well-being.

【註】 文の前半は金錢が決して人生終局の目的物 (chief end and aim と同じ様な語を繰り返すと強くなる)では無いが、さりとて (neither) つまらぬ物で無い、と云ふのだ。

to hold in contempt は「輕んずる」意、こんな場合の hold は regard である、to hold it dear と云へば to love or value it の意となる、philosophic は此處では善くない意に用ひたので、philosopher は世の實際を無視して抽象、理想をのみ説くものが多いから philosophic contempt (哲學者流の侮蔑)と云ふのである。さて representing as it does etc. が今の問題になる句で、此れも「斯くも廣く.....を代表するものから」に當るのである。to large an extent は so much である。physical は spiritual の反で此處では material (物質上の)と相通する。well-being は happiness のごく解りのよい語である。

【譯】 金錢は決して人生の終局の目的では無いけれ共、さりとして哲學者流の侮蔑を以て見るべきつまらぬ物でも無い。事

實上彼の如く廣く物質的慰安と社會の幸福との手段を代表するものであるから。

問題

64. Used, as they are, to all sorts of danger, nothing can deter them from accomplishing their design.

65. The opinion, coming as it does from a person of his experience, has great weight with us.

As (III)

As は that, which の如く一個の關係代名詞として働く。ところが其れは後者の如く簡短なもので無くて妙な一種の風格を帯びた expression を作る。例ば That night he was drunk, as is often the case (with him). に於て as は前の he was drunk てふ fact を受けて「その事實は屢、彼に於て見る事 (case) であるが」と云ふ様な説明を表はすのである、此れは「屢、彼に見る事である所の……」と云ふ様には續かぬので附かず離れずの説明句をなすのである。譯せばこうも云ふ所である。「其の夜は彼は酔うて居た。彼としてはよくある事だが。」それで一方 as は關係副詞として「……の如くに」の意を表す、例ば

{ I will do as I like.

{ 私が好む様にする。

{ State the facts as they are.

{ 事實を有りの儘に述べよ。

等に見る用途である、此れと前の as とは似て非なので

ある、後者の場合には as の次にはチャンと subject (I とか they とか) が來て文脈は至極單純である。が前者には as 其れ自身が subject を爲してすぐ次に verb を從へる (as is the case の如く)、此の點は which や that と一致する、それで居て「理由」とまでは云はれぬが前文の説明になる所は後者の as に大分似て居るのだ下の例を比較して見られよ。

a. He spends all he has, as students will. (關係副詞)

彼は持つてる丈け費ふ。——學生はそうしたものだ。

b. He spends all he has, as is usually the case with students. (關係代名詞)

時に as はそれに從ふ Be 動詞を省略して句を作る、例ば

The Japanese, as compared with the Chinese, are simple in money matters.

日本人は支那人に比して金錢に淡泊だ。

上の様な場合には as compared を when (or if) they are compared と解けば一番解りが早い、必しも when it is と置き換えて成り立つとも限らぬ要するに who, which の如き關係代名詞と if, when, as の如き接續の語とを結んだ様な役をつとめる接合詞だと思へばよろしい。

例文 A.

We have a liking, and perhaps more than a liking, for the place where we were born and where our lives are passed. We should have, in the same way, a love for the whole of our country as opposed to all other countries; and ought to do everything that lies in our power to preserve it from harm.

【註】 liking と云ふ語は割合に弱い言葉で「好きな感じ」である。からして more than a liking てふ句を挿んで we have a love for~ とでも云ひ度い所である様な心を表したのである。As opposed to が「.....に對して」「.....と差別して」である、此處では when it is opposed としたては一寸納らぬ。to do everything that lies in one's power は簡単に云へば to do one's best だ、that lies in one's power は that we can である。to preserve=to keep と覺えたが一番よい、此處では「保護する」である。

【譯】 吾人は吾人の生れた所生涯を送つた場所に對しては一種の親しみ、否親しみ以上の感じを持つものだ。それと同様に吾等は吾が國全體に對しても他國と區別して一種の愛着を持ち吾國を守護する爲めに力にある限りを盡す可きである。

例文 B.

The story is somewhat loosely put together, as it stands, but will doubtless more interesting when better told.

【註】 as が關係副詞として用ひらるゝ際にそれが必しも.....の如く

とは行かぬ。上文の如き場合は「.....の如くば」とでも云ふべき所である、例ば

{ He is a good man, as the world goes.
{ 彼は世間並から云へば善人である。
{ We are anything but satisfied as the matter stands.
{ 今のまゝでは決して満足して居られぬ。

それで本文でも as it stands が「そのまゝでは」に當る。to be put together が「材料を綴り合せる」様な心から「書き上げられる、纏められる」意で loosely とあるから「締りなく綴つてある」事になる。when better told に it is を補ふ事勿論である。

【譯】 其の物語りは其の儘では稍間が抜けて書いてあるがもつと上手に書けたら面白いに違ひ無い。

例文 C.

If, as is the case with millions of people in this country, you have hunger for beauty, and do not know that it is beauty that you want, you have no chance of satisfying it.

【註】 be the case with~ の句に於ての case は「實際の場合」である。例ば「人はイザとなると勇氣の出るものだ」と云つてから It was the case with me と云へば「それは私に於てもその通りだつた、私がさうだつた」意である、て、こゝに as is the case..... の句は本文の註として入れたもので、「此の國の幾百萬の人がさうであるが.....」に當る。

hunger for beauty 「美に對するあこがれ」。

it is beauty that you want 「自分のあこがれて居るのは美といふものである」。

have no chance of~ 「.....する機會は無い、見込が無い」。

satisfying it 「己れの望みを充たす」、it は hunger.

【譯】 もし、此の國の幾百萬の人がその通りであるが、君も美に對してあがこがれて居り、而も自分の欲するものが美である

事に気がつかずに居れば、遂にはそのあこがれを満すべき機会
は遂に得られぬであらう。

問題

66. The salary of a Japanese general is only £600 a year, as against the £2,900 a year paid to generals in the British Army.

Suchas

“As” が連關詞として such に呼應するのは普通の事である、で此れは that.....which (or who), thosewho に相當するものであるが which や who と違つて as は一寸耳馴れぬものだからうっかり文脈を取りそこなふ。

a. Choose such friends as you will benefit by their intercourse.

交つて利する様な友を選べ。

b. Choose such friends as will benefit you.

その内でも上の b 文の様に as が who に相當してその次に別に subject が來ずに as will benefit と云ふ様に直ぐ predicate verb が來る場合が誤り易いのである、殊にその predicate と as との中間に他の形容句が挿まれたりする時に文脈が辿り誤まれるのである、下の諸例文を研究せられよ。

例文 A.

He who would do some great thing in this short life must apply himself to the work with such a concentration of his forces as to idle spectators, who live only to amuse themselves, looks like madness.

【註】 Concentration [con (together) + center (中心)] が「集注」の意、concentration of forces が「精力の集注」、spectator [spect = to look] = looker. が「見物人、傍觀者」、to apply oneself to が to employ oneself で「仕事に就く、従事する」。と此の三つの譯を定めて、さて全文を通讀する事數回、それで such concentration of forces as looks like madness. 「狂と見ゆる程の熱中」と文脈が掴めれば問題の解決はついたのである。ところが“as”と“looks like madness”との間に to idle spectators who..... と云ふ餘分なものが入つて居るので一寸まごつくのである、此れは無論 looks like madness to idle spectators etc. となるべきものだ。即ち「たゞ遊ぶが商賈の香氣な傍觀者には狂と思はるゝ様な」の意である。殊に as にはその次に to do と云ふ様な“to”に始まる phrase が來る事があるので(勿論此處では to spectators だから此の“to”は infinitive の“to”では無いが)餘計に迷ひ易いのだ、本文と區別對照して次の様な construction も序に見て置かれよ。

He went about his work so eagerly as to win his employer's admiration. = He went about his work with such eagerness as to win his employer's confidence.

彼は主人の感心を得る様な熱心を以て仕事に就いた。

上の文で解る様に so は副詞だから他の副詞 (eagerly の如き) や形容詞に附くし such は形容詞だから名詞 (eagerness の如き) に附くのである。

それで元へ返つて全文の譯は次の様なもので宜敷い。

【譯】 此の短かい人生に於て何等か大事を成さむとする者